

松本市文化財調査報告No81

松本市向畑遺跡II

— ほ場整備に伴う緊急発掘調査報告書 —

1989・3

松本市教育委員会

松本市向畑遺跡 II

— ほ場整備に伴う緊急発掘調査報告書 —

1989・3

松本市教育委員会

序

向畑遺跡は松本市の東部、中山地区にあり、この周辺の東山山麓は、古くは縄文時代から中・近世に至るまでの多くの遺跡が残され、隣接する内田地区、窪尻市片丘地区とともに、早くから識者の注目するところとなっていた場所であります。

今回の調査は、当遺跡一帯で県営は場整備が行われることになり、松本市教育委員会が長野県松本地方事務所の依頼を受け事業予定地内の遺跡の発掘調査を行ったものです。

発掘調査は市教育委員会を中心に地元考古学研究者の先生方等で組織した調査団により、昭和62年8月10日から12月23日にわたって実施され、多大な成果をおさめて無事終了いたしました。調査内容は本文で詳述してあるとおりですが、古墳時代の住居跡などと中世の基址群やそれらに伴う遺物が多数発見され、この地が古くから人々の生活の根拠地となっていたことが証明されました。

今回の発掘は、記録保存と呼ばれ、開発のために遺跡を破壊するがその前に記録をとっておくという性格のもので、本書を残して遺跡は消え去る運命にあります。せめて、本書に記された調査結果が十分に活用され、郷土や先祖の歴史を探る一助となれば幸甚に存じます。

最後になりましたが、この調査にあたり多大なご理解とご協力をいただきました中山土地改良区、発掘に従事された地元の皆様から心から謝意を表して序といたします。

平成元年3月

松本市教育委員会

教 育 長 中 島 俊 彦

例 言

1. 本書は昭和62年8月10日から12月23日にわたって実施された松本市中山向畑に所在する中山向畑遺跡の緊急発掘調査に関する報告書である。
2. 本調査は昭和62年度県営は場整備事業に伴う事前の発掘調査であり、長野県松本地方事務所より委託を受け、松本市教育委員会が行ったものである。
3. 本書の執筆は下記の分担で行った。

第1章 事務局 第2章第1節 三村竜一 第2節-1 中村賢二・吉沢克彦・高野昌英・三村竜一 第2節-2～5 三村竜一 第2節-6 中村賢二 第3節(1)-(i) 竹原学 (1)-(ii) 白居直之 (1)-(iii) 神沢昌二郎 (2) 関沢聰 (3) 神沢昌二郎 (4) 西沢寿晃 第4章 三村竜一 付編 竹原学
4. 本書の編集は事務局が行い、滝沢智恵子の助力を得た。
5. 本書の作成にあたっての作業分担は次のとおりである。

土器復元 滝沢智恵子 五十嵐周子 岩野公子
遺物実測 神沢昌二郎 直井雅尚 関沢 聰 竹原 学 白居直之 中平智昭 望月 映
宮城幸之 岩野公子 土橋久子 赤羽包子
土器拓影 五十嵐周子 白居直之
トーンズ 直井雅尚 関沢 聰 竹原 学 白居直之 中平智昭 土橋久子 岩野公子 関
崎八重子 赤羽包子 金井ひろみ 町田庄司 宮城晴美 三村竜一
遺構写真 三村竜一
遺物写真 宮嶋洋一
一覧表作成 白居直之 中村賢二 吉沢克彦 岩野公子 三村竜一
6. 本書の作成にあたって次の方々にも多大な協力を得た。

山田真・高野昌英 高瀬典子
7. 遺構図中のスクリーントーンは焼土・炭化物を表現したものである。第8・18図を参照されたい。
8. 土壌の土層名は記号化した。第31図を参照されたい。
9. 図面上の方位は磁北を用いた。
10. 委託契約書、作業日誌等の事業経緯を示す書類は調査結果の記載を重視したために、本書から割愛したが、図類、出土遺物と共に松本市教育委員会が保管している。

目次

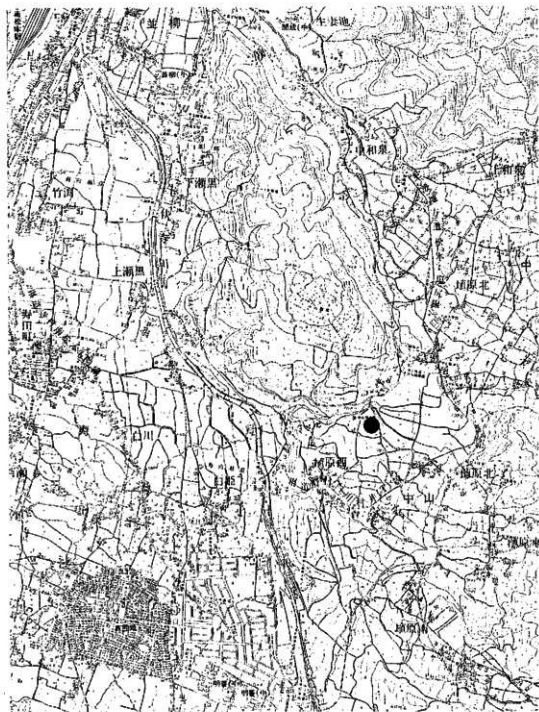
第1章 調査経過	
第1節 調査に至る経過	5
第2節 調査体制	6
第2章 調査	
第1節 調査の概要	9
第2節 遺構	
1 住居址	10
2 古墳	41
3 方形周溝墓	42
4 土壇	43
5 溝	85
6 竪穴状遺構	86
第3節 遺物	
1 土器・陶磁器	88
(1) 縄文時代の土器	88
(2) 古墳時代の土器	103
(3) 陶磁器	137
2 石器・石製品	137
3 鉄器・銭貨	152
4 土壇353出土の人骨について	155
第4章 結論	157
付 編 松本平の縄文中期初頭土器	158

表目次

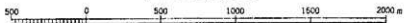
表1 住居址一覧表	37
表2 土壇一覧表	72
表3 古墳時代土器一覧表	120
表4 石器一覧表	142
表5 鉄器・銭貨一覧表	153

挿 図 目 次

第1図 遺跡の位置……………4	第27図 土壌配置図(2)……………46
第2図 遺跡範囲図……………7	第28図 土壌配置図(3)……………47
第3図 調査範囲図……………8	第29図 土壌配置図(4)……………48
第4図 第1号住居址……………11	第30図 土壌(1)……………49
第5図 第2・3・5号住居址……………12	} }
第6図 第4号住居址……………13	第52図 土壌(2)……………71
第7図 第11号住居址……………14	第53図 竪穴状遺構 3……………86
第8図 第12号住居址……………15	第54図 竪穴状遺構 2・4……………87
第9図 第13号住居址……………17	第55図 縄文時代出土土器(1)……………92
第10図 第14・15号住居址……………18	} }
第11図 第16・18号住居址……………20	第57図 縄文時代出土土器(3)……………94
第12図 第17・19・20・21号住居址……………21	第58図 縄文時代出土土器拓影(1)……………95
第13図 第22・23・29号住居址……………23	} }
第14図 第24号住居址……………24	第65図 縄文時代出土土器拓影(8)……………102
第15図 第25・26号住居址……………26	第66図 古墳時代出土土器(1)……………106
第16図 第27・28号住居址……………27	} }
第17図 第30号住居址……………28	第79図 古墳時代出土土器(4)……………119
第18図 第40号住居址……………30	第80図 陶磁器……………138
第19図 第40号住居址遺物出土図……………31	第81図 石器(1)……………145
第20図 第42号住居址……………32	} }
第21図 第44号住居址……………33	第87図 石器(7)……………151
第22図 第45号住居址……………35	第88図 鉄器・鉄貨……………154
第23図 第47号住居址……………36	第89図 縄文時代中期初頭土器集成(1)……………163
第24図 向畑7号古墳……………39	} }
第25図 方形瓦溝墓……………42	第92図 縄文時代中期初頭土器集成(4)……………166
第26図 土壌配置図(1)……………45	付図 全体図



1 : 25,000



第1図 遺跡の位置

第1章 調査経過

第1節 調査に至る経過

- 昭和61年 8月29日 埋蔵文化財保護協議を市役所及び現地にて実施。出席者は長野県教育委員会、松本地方事務所、松本市教育委員会。
- 12月23日 昭和62年度補助事業計画書提出。
- 昭和62年 4月27日 昭和62年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金内定。
- 5月16日 昭和62年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付申請書提出。
- 6月1日 昭和62年度県営ほ場整備事業中山地区向畑遺跡埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約を結ぶ。
- 6月30日 昭和62年度文化財保護事業補助金（県費）内定。
- 7月11日 昭和62年度文化財保護事業補助金（県費）交付申請書提出。
- 7月20日 昭和62年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付決定通知。
- 8月5日 昭和62年度文化財保護事業補助金（県費）交付決定通知。
- 8月6日 向畑遺跡埋蔵文化財発掘調査の通知提出。
- 9月7日 昭和63年度埋蔵文化財保護協議を市役所及び現地にて実施。出席者は長野県教育委員会、松本地方事務所、松本市教育委員会。
- 12月21日 昭和63年度補助事業計画書提出。
- 昭和63年 1月28日 向畑遺跡埋蔵文化財取得届及び同保管証提出。
- 2月15日 向畑遺跡埋蔵物の文化財認定通知。
- 4月7日 昭和63年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金内定。
- 4月27日 昭和63年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付申請書提出。
- 5月31日 昭和63年度文化財保護事業補助金（県費）内示。
- 6月14日 昭和63年度文化財保護事業補助金（県費）交付申請書提出。
- 6月21日 昭和63年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付決定通知。
- 8月25日 昭和63年度文化財保護事業補助金（県費）交付決定通知。
- 9月6日 昭和63年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）計画変更承認申請書提出。
- 9月19日 昭和63年度文化財保護事業補助金（県費）計画変更承認申請書提出。
- 11月21日 昭和63年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）変更交付決定通知。
- 12月21日 昭和63年度文化財保護事業補助金（県費）変更交付決定通知。

第2節 調査体制

この調査に関する体制は、次のとおりである。

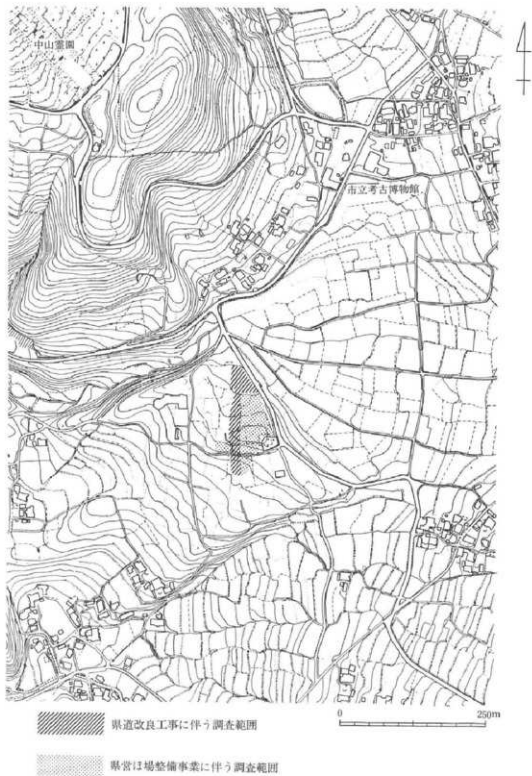
团长：中島俊彦（松本市教育長） 調査担当者：神沢昌二郎 現場担当者：三村竜一 調査員：太田守夫、西沢寿晃、森義直、三村肇、土橋久子、横田作重

発掘作業参加者：青柳洋子、赤羽章、赤羽包子、荒井唯邦、飯沼富夫、石井良子、五十嵐周子、伊丹早苗、岩野公子、臼井美枝子、大出六郎、太田千尋、大谷成嘉、奥原富藏、小野光信、開鳴八重子、金井要二郎、金子富人、唐沢友子、小池直人、神戸巖、小岩井美津子、小林謙次、小林文子、小松啓吾、沢柳秀利、瀬川長広、仙石唯男、荘秀也、袖山勝美、田中泉造、田中正治郎、土橋幸子、土橋久美子、鶴川登、直井由加理、中島新嗣、中島督郎、中島直美、中島治子、中村文一、中村文子、中村恵子、中村高頼、西原明子、西原いさ子、西原千代子、林昭雄、林伊和夫、林源吾、林住孝、巾崎助治、藤本嘉平、丸山誠、丸山久司、丸山恵美、丸山よし子、丸山愛徳、丸山麻子、町田庄司、百瀬八江、牧田浩幸、村山正人、横山篤美、横山保子、横山倍七、若井七十郎、若井孝夫

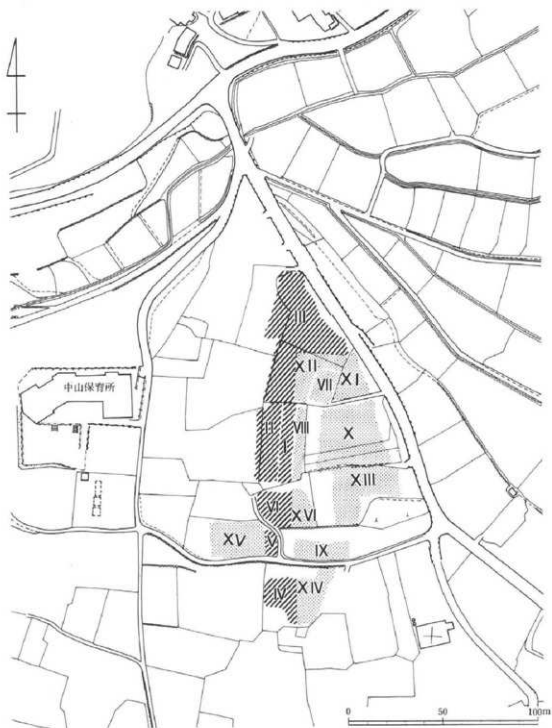
整理事業協力者：永沢周子、吉沢克彦、海野洋子、綱島正道、石合英子、宮島俊行、開鳴八重子、赤羽包子、伊丹早苗、金井ひろみ、町田庄司、小松千寿子、横山保子、小松正子、中村恵子、五十嵐周子

事務局：浅輪幸市（社会教育課長） 小松晃（文化係長） 柳沢忠博、大村敏博（主査） 熊谷康治、直井雅尚（主事） 洞田睦子





第2図 遺跡範囲図



第3図 調査範囲図

第2章 調査

第1節 調査の概要

発掘調査は遺跡の範囲内で県営ほ場整備事業にかかる畑地を調査地として設定し、県道建設事業による発掘調査と並行していった。このうち、ほ場整備事業に伴う調査については昭和62～63年に亘って実施された。今回の報告では62年度調査分についてののみ扱う。そのため遺跡の調査方法は全体の流れに従っているため、非効率な点もあるかも知れない。調査結果についても向畑遺跡全体の評価に基づいて行っているため、本調査範囲のみでは把握できない点についても言及することがあるかと思うが、予めご了承いただきたい。尚、県道建設事業報告書は63年度に既刊した。

a 調査の方法

- ・該当の畑9枚について、畑作の休耕に合わせて行った。
- ・畑の形状を損なわない事が前提であったので、掘り出した順に畑の区割りごとの番号7～16までをつけた。
- ・実質調査面積は7区235m²、8区190m²、9区310m²、10区1040m²、11区280m²、12区330m²、13区690m²、14区380m²、15区530m²、16区170m²、計4155m²である。
- ・発掘調査は県道の東側とし、西側は63年度に行った。
- ・調査は重機による表土除去後、人力により遺構の検出作業を行い、確認された遺構から掘り下げを開始した。
- ・測量については10、11区間に設定した基準点から南北、東西に基準点を掘り出し、そこから3m間隔に直行する線を掘り、調査地全体を3×3mのメッシュで覆い、調査地内の求める位置を基準点からの方向と距離との組合せ、N、S、E、Wを数字によって表現できる様にした。ただし、7、8、9区については平板測量を行い、後の遺構図整理の段階で平面上にメッシュを移し、他の調査区同様に標記出来る様にした。標高は調査区が南北に長く、高低差も大きいため5本の杭を埋設して基準とした。
- ・遺構の命名については各地区の検出が終了し、掘り下げが開始された時点でその性格を推定してつけた。尚、本調査と県道建設事業に伴う調査は開発起因が異なるため別々の調査報告書となるが、本来は一つの遺跡であるので遺構番号については一連のものを付した。
- ・堅穴住居址、堅穴状遺構は土層観察用の畔を十字に残して掘り下げた。土壌は2分割してまず半分を掘り下げ、土層観察を行ったあと全掘した。古墳については、既に墳丘部が削平されている

ため、周溝のみで主体部は検出されなかった。

b 調査結果

・遺構 竪穴住居址 30軒（縄文時代中期1、古墳時代前期29軒）

古墳 1基（7号古墳は周溝のみが残り、周溝から供献用の一括土器が出土した。
直径22mの円墳である。）

方形周溝墓 1基（古墳時代前期）

土壇 575基（縄文時代約150、古墳時代13、その他は中世～近世に属する。）

溝 10基

竪穴状遺構 3基（平安時代3）

・遺物 竪穴住居址を中心として各種遺構から土器、石器、石製品、鉄器、銭貨などが出土した。土器には縄文土器、土師器、陶磁器があり、石器、石製品には石鎌、石鋸、石匙、スクレイパー、打製石斧、磨製石斧、凹石等がある。鉄器には、鉄鉚、釘、鉄等がある。

銭貨は、政和通宝、元祐通宝、至元通宝等がある。

c 成果

・古墳時代前期の大集落の一部が検出されたこと

・古墳一基が検出されたこと

・中世の大墓址群を検出したこと

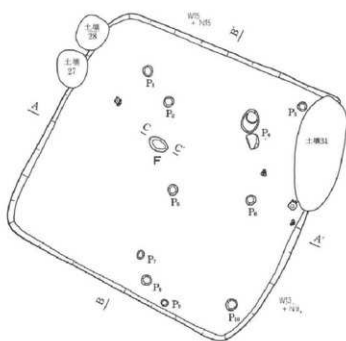
第2節 遺構

1. 住居址

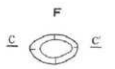
第1号住居址（第4図）

遺構 1区中央N8～N15、W12～W19に位置する。周囲の一部を土壇27、28、31に切られる。主軸方向はN-65°-W、5.76×5.66mと比較的規模の大きな住居址であるが、他の住居との切りあいもなく、隅丸方形の輪郭が明瞭である。二次堆積ロームの黄色土中に25cmの深さで掘り込まれていて石英閃緑岩を含むわけて固い覆土を上げば、ゆるやかに外傾する壁面、平坦な床面とともに非常に堅固なものであった。中央西寄りには地床炉があり、100×60cmの範囲に10cm近い厚さの焼土が観察された。床面のピットのうちP₁は深さ30cm、はっきりした柱痕が認められ、位置からみても主柱穴の一つと考えられる。

遺物 土師器が多量に出土した（第66図）。器種は高坏、有段口縁壺、甕、台付甕があり、いずれも小片で器形の復元はできなかった。本址の時期は遺物より古墳時代前期と考えられる。



褐色土(石英閃緑岩の小礫混入)

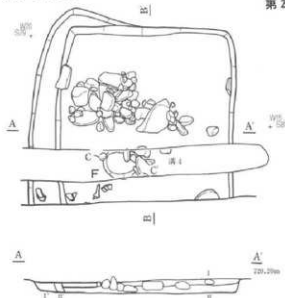


- I : 暗褐色土(粘質)
- II : 褐色土(焼土粒混入・砂質)



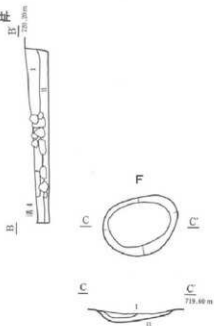
第4図 第1号住居址

第 5 号住居址



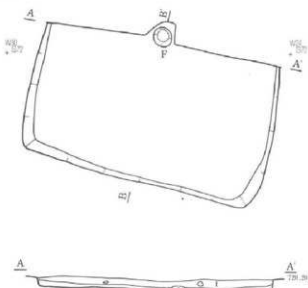
- I': 黒褐色土(ローム粒微量・砂粒混入) I: 暗褐色土(砂質)
 II': 暗褐色土(砂質) II: 暗褐色土(ローム粒微量, 砂粒混入)

第 2 号住居址



0 50cm

第 3 号住居址



- I: 褐色土
 II: 褐色土(石英閃緑岩の小礫混入)
 III: 黄褐色土(焼土粒多量混入)

0 1 2 m

第 5 図 第 2・3・5 号住居址



第6図 第4号住居址

第2号住居址 (第5図)

遺構 9区南側S78～S83、W15～W20に位置する。溝4にきられ、5号住居址を切っている。主軸をN-O'にとり、南北3.8m、東西3.6mの隅丸方形のプランを呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり壁高25～50cmを測る。覆土中に80cm大の石が多量に投げ込まれていた。二次堆積ローム層に掘り込まれた床面は堅くたたきしめられ、少々起伏をもつものであった。中央部に炉(100×60×20cm)が検出された。

遺物 少量の土師器のみで図示できなかった。本址は遺物より古墳時代前期と考えられる。

第3号住居址 (第5図)

遺構 9区北側S71～S76、W24～W30に位置し、主軸をN-11'-Eにとる(南北5m)東西3.8mの隅丸方形プランを呈する。北側を調査区域外に残す。壁はやや垂直に立ち上がり、高さ10～25cmを測る。床面は堅固で少々起伏をもち、ゆるやかに傾斜している。中央部に炉(40×40×16cm)が検出された。

遺物 少量で図示できたものはない。本址の時期は遺物より古墳時代前期と考えられる。

第4号住居址 (第6図)

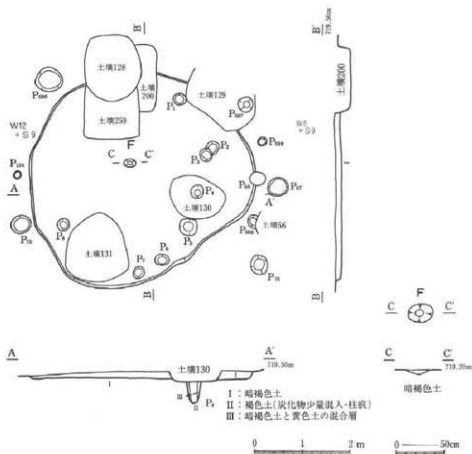
遺構 9区南側S75～S79、W32～W36に位置し、主軸をN-9'-Eにとり、南北3.8m、東西2.9mの隅丸方形のプランを呈する。壁はゆるやかに立ち上がり高さは8～12cmを測り、床は堅固で起伏をもつ。P(220×60×16cm)が検出されたが、その性格は不明である。

遺物 少量で図示できたものはない。本址の時期は遺物より古墳時代前期と考えられる。

第5号住居址 (第5図)

遺構 本址は、大半を2号住居址、溝21にきられ、南端を調査区域外に残す。西側に帯状に検出された部分から、壁の状態は、壁高16cm程でほぼ垂直に立ち上がっている事がわかった。尚、ピット、周溝などの施設は発見されず、床面の状態も不明であった。

遺物 多量に出土したが図示できたものはない。本址は遺物より古墳時代前期と考えられる。



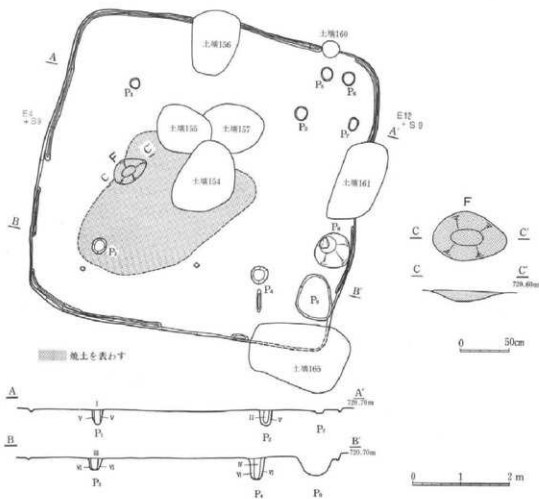
第7図 第11号住居址

第11号住居址 (第7図)

遺構 6区北西S 7~13、W 7~12に位置し、周囲や床面を土壇124、259、128、129、130、131に切られる。東西4.9m、南北4.76mの不整形の住居で、今回の調査では唯一の縄文時代の住居址であった。壁高は12mで壁はなだらかな立ち上がりをもせ、黄色土中に暗褐色土の落ち込みがあり、自然堆積の様相を呈していた。黄色の二次堆積ルームの床面は、やや起伏があるものの堅固で、地床がほぼ中央にあり、その下部の土は30×20cmの範囲にわたって約5cmの深さまで焼土の混入が認められた。P₁~P₆はそれぞれ柱痕を有し、位置、深さからしても主柱痕とみては間違いなく、また、本址の周囲を衛星状に取り巻くP₆₇、P₇₂、P₇₃、P₁₂₄、P₅₂₇、P₅₂₈、P₅₂₉、P₅₃₀は本址に伴わないピットとして扱ったが柱痕が明瞭に観察されることから、本址に関係する柱穴、恐らくは支柱痕と考えられる。

遺物 土器と石器が合わせて数十点出土している(第55、81~84図)。土器は小片が多く、器形を復元できたのは第55図3の1点のみである。

本址の時期は、出土遺物より、縄文時代中期初頭と考えられる。



- I : 黒褐色土
- II : 褐色土(暗褐色土粒混入)
- III : 黄褐色土(0.5~1.0cm大のローム塊、0.5~0.6cm大の暗褐色土塊、焼土混入)
- IV : 暗褐色土(ローム粒、1~4.0cm大のローム塊、炭化物混入)
- V : 暗褐色土
- VI : 黄色土(0.5~2.0cm大の暗褐色土塊、焼土粒混入)

第8図 第12号住居址

第12号住居址（第8図）

遺構 5区北西S 6～S14、E 4～E12に位置する。本址は土壌157→155→154の順に切られ、また土壌161、156、165にも切られる。主軸方向はN-165°-W、隅丸方形をなすプランは明瞭で、6.8×6.7mの規模を有する。黄色土の地山には直の壁を以って掘り込まれており、壁の直下にはほぼ全周にわたって周溝が巡らされている。南西の主柱穴の南にも溝があるが、間仕切りのものであろうと推測される。覆土は明褐色土で重機により削平され、非常に薄い。床面のピットのうちP₁～P₄はいずれも深さが25～40cmあり、明瞭な柱底を有しており主柱穴と思料され、P₅（深さ30cm）P₆（深さ40cm）は、位置、規模から考え貯蔵穴とみて間違いないだろう。炉は東側の主柱穴間に地床が楕円形に存在し、その下部に約10cmの厚さの焼土が観察された。更に炉の東側に広範囲に10cmの厚さで焼土が堆積していることは、この住居が火災に遭ったことを物語る。

遺物 土師器の破片数点と土製勾玉1点が出土している（第68図）。土師器はいずれも小片で、器形を復元できるのは器台（第68図25）のみである。土製勾玉（第68図30）は東側の床面直上から出土した。大形で遺存状態は良好である。

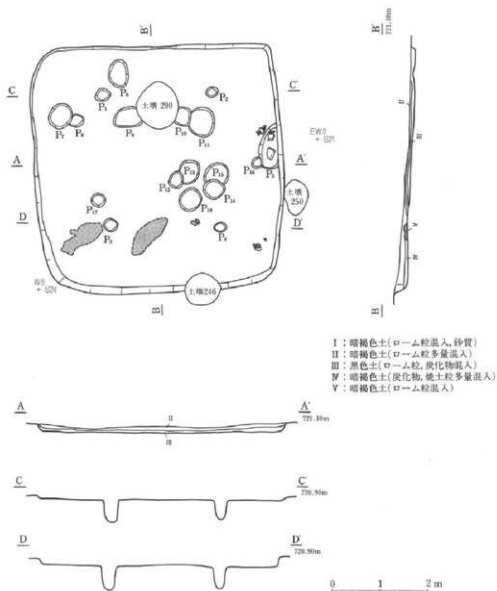
本址の時期は遺物より古墳時代前期と考えられる。

第13号住居址（第9図）

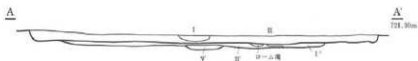
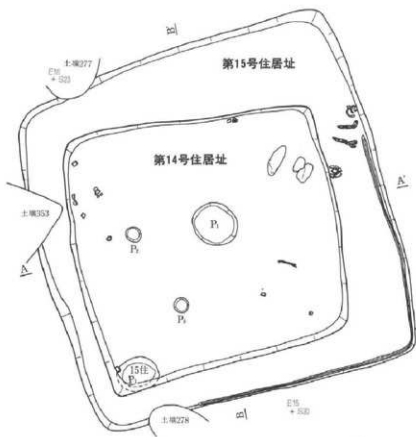
遺構 5区中央S19～S25、W6～0に位置する。土壌246、290に切られ、土壌250を切る。主軸をN-0°にとり、南北5.2m、東西5.7mの隅丸方形を呈する。壁はゆるやかに立ち上がり、壁高15～25cmを測る。床面は、南から北へ向かってなだらかな傾斜をもつ。全体的に多量のピットが検出されP₁（20×30×50cm）、P₂（24×24×40cm）、P₃（30×28×50cm）、P₄（28×22×50cm）は、位置、規模から主柱穴と思われる。また東壁面に沿って位置するP₅（90×30×34cm）は土器が出土しており、貯蔵穴の可能性がある。北側半分には粘質で黄色土の平坦な貼り床が確認された。この貼り床を取り除いてみたところ、同じ範囲で窪みがみられ、さらに北壁直下に壁面に沿って細長い落ち込みがみられた。この落ち込みの覆土によって、貼り床の設置過程がわかる。2通りの可能性が考えられ、1つは構築時に掘りすぎた窪みを埋めるための貼り床である。この場合、落ち込みの覆土は人為堆積となる。もう一方は、この落ち込みを周溝ととらえ住居址を改築したときにつくられた貼り床であるという考えである。この場合覆土は自然堆積を示す。このように2つの可能性を解明する糸口である落ち込みの覆土を確認できなかった事は残念である。炉の位置は特定できないが、南西部に焼土の広がりが確認された。

遺物 土師器の破片数点とミニチュアの高環1点が出土している（第68図）。遺物のほとんどがP₅より出土した。土師器は壺、鉢、甕、高環があるが器形を復元できるものは少い。ミニチュアの高環（第68図37）の破片がある。

本址の時期は遺物より古墳時代前期に比定できる。



第9図 第13号住居址



I : 黑褐色土
II : 黑色土

I' : 暗褐色土(ローム粒混入)
II' : 黄褐色土(暗褐色土塊混入)
III' : 黄褐色土
IV' : 黄褐色土(暗褐色土粒混入)
V' : 暗褐色土
VI' : 茶褐色土

第10图 第14・15号住居址

第14号住居址（第10図）

遺構 10区南東S23～S30、E10～E17に位置する。本址は15号住居址に全体を貼られている。主軸方向は、N-169°-Eを示し、東西5.2m南北5.7mを測る隅丸方形プランを呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がる。床面は二次堆積ルームまで掘り込まれ、堅固、平坦で15位の床面より4cm程深い。ピットは確認されたが、いずれも性格不明である。

遺物 多量の土師器及び、紡錘車と鉄鋸各1点が出土した。土師器（第69図）は埴、甕、台付甕、器台があるが、器形を復元できたものは少ない。紡錘車は北東隅の床上より鉄鋸（第88図）は南東部の覆土中より出土した。本址の時期は出土遺物より古墳時代前期と考えられる。

第15号住居址（第10図）

遺構 本址は、14号住居址をまるごと貼る位置にあり、土壌279、353、277にも切られる。南北7.54m、東西6.80mを測る大型の隅丸方形を呈する。壁はほとんど垂直に立ち上がり、壁高は15～25cmを測る。床面は二次堆積ルームで堅固、平坦である。南北壁直下に周溝が見られる。

遺物 土師器が多量に出土した（第70図）。器種は埴、甕、坏、高坏、壺があり、高坏の数が多い。いずれも小片で器形を復元できるものではない。本址の時期は古墳時代中期と考えられる。

第16号住居址（第11図）

遺構 10区南西部S26～S32、W14～W19に位置する。西側はわずかに調査区域外にかかっており土壌281に切られるが、全体として南北4.36m、東西4.50mの隅丸方形のプランは確認できる。壁は浅いため定かでないが、ゆるやかに落ち込む様相を呈する。床面は西側から東側へなだらかな傾斜をもつ。ピットは、11ヶ確認され、P₁、P₂、P₃については位置と規模からして主柱穴と見られる。

遺物 土師器とミニチュアがある（第71図）。遺物より本址は古墳時代前期と考えられる。

第17号住居址（第12図）

遺構 10区南西部S30～S33、W18～W19に位置する本址は大半が区域外にかかり、平面形、規模など不明な点が多い。壁の立ち上がりは急で、壁高13cmを測る。床面は二次堆積ルームで平坦でありやや軟質であった。床面精査を行ったがピット等の施設は検出されなかった。

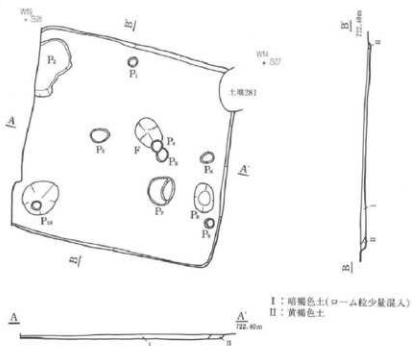
遺物 非常に少なく図示できたものはない。遺物より本址は古墳時代前期と考えられる。

第18号住居址（第11図）

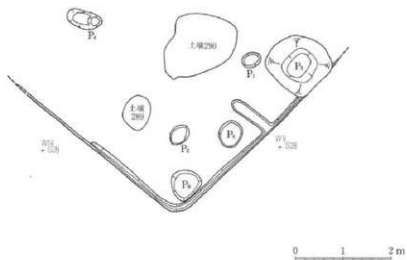
遺構 10区中央S26～S31、W7～W15に位置する。土壌213、214が、本址覆土中央部に掘り込まれている。主軸はN-49°-Eで、10区のはかの住居址とは異なった方向をもつ。重機の削平によって北側は床面下まで掘られているが、残存部ではやや起伏をもつ堅固な二次堆積ルームである。南西壁下に周溝がみられ、西側には間仕切りがある。P₁、P₂は位置と規模より主柱穴と断定する。

遺物 土師器とミニチュアがある（第71図）。遺物より本址の時期は古墳時代前期と考えられる。

第16号住居址

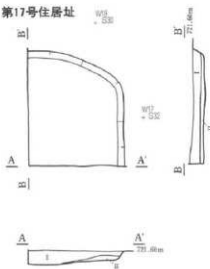


第18号住居址



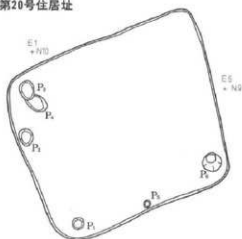
第11图 第16・18号住居址

第17号住居址



- I : 暗褐色土(1~10cm大のローム堆多量混入)
 II : 黄色土(1~2cm大の暗褐色土塊微量混入)

第20号住居址

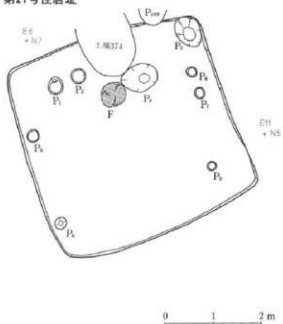


第19号住居址



- I : 暗褐色土
 II : 暗褐色土(ローム粒, 0.3~0.5cm大の白色礫混入)
 III : 黒褐色土

第21号住居址



第12図 第17・19・20・21号住居址

第19号住居址（第12図）

遺構 10区中央S14～S18、E1～E6に位置し、土壌20に切られる。主軸方向N-0°で、不整形を呈し、南北3.54m、東西2.76mの規模をもつ。壁面の傾斜は、西がゆるやかで、東はほぼ垂直と対照的である。床面は、非常に堅固で、西壁を除き周溝が検出された。

遺物 わずかのみで図示できなかった。本址は遺物より古墳時代前期と考えられる。

第20号住居址（第12図）

遺構 11区中央部N6～N11、EW0～E11に位置し、主軸方向N-158°-Eをとり、南北4.3m、東西3.8mの隅丸方形を呈す。床面は、平坦で非常に堅固な二次堆積ロームであり、覆土は検出面より0～3cmと非常に浅いため詳細は不明であったが、わずかに暗褐色土が認められた。

遺物 少量の土器片のみで図示できない。本址は遺物より古墳時代前期と考えられる。

第21号住居址（第12図）

遺構 11区南東部N2～N7、S5～S11に位置し、土壌374に切られる。南北4.42m、東西4.40mの隅丸方形プランを呈する。検出面からの壁高は0～3cmと非常に浅いが、壁はほぼ垂直に立ち上がるようである。床面は、二次堆積ローム層に掘り込まれ、非常に堅固でやや起伏をもつ。また地山の傾斜に沿って北東から南東はゆるやかな傾斜を示す。

遺物 土師器が少量出土した(第71図)。器種は、壺、甕、S字甕がある。本址の時期は出土遺物より、古墳時代前期と考えられる。

第22号住居址（第13図）

遺構 13区北東隅にS37～S45、E20～E23と座標をとる。大半を調査区域外に残す住居址である。主軸はN-0°をとり、29住を切って立地している。規模、プランは定かではない。壁高40cm程度を測り、ほぼ直に立ち上がる。床面は二次堆積ローム中に掘り込まれ、平坦で堅固なものになっている。2段に掘り込まれたP₂は2個体のつぼが出土した事から、貯蔵穴と推定できる。

遺物 土師器が多量に出土した(第72図)。器種には、高坏、甕、壺がある。本址の時期は出土遺物より古墳時代前期と考えられる。

第23号住居址（第13図）

遺構 11区北側S37～S41、E10～E17に位置する。主軸はN-2°-Eを示す。南北5.56m、東北3.64mの隅丸方形を示す。検出面からの壁高が浅いため詳細は不明だが、壁は比較的ゆるやかに落ちる。床面は、軟質で起伏はないが東から西へ向い、地山に沿ってなだらかに傾斜する。西壁面直下に周溝が見られた。

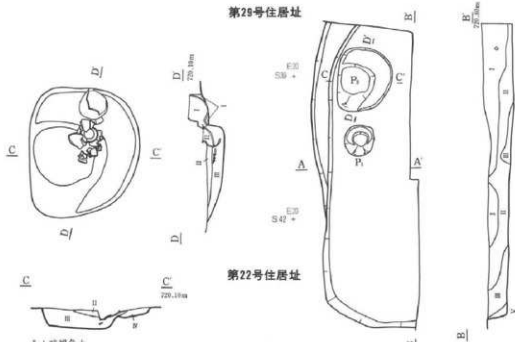
遺物 土師器の小片のみで図示できたものはない。本址は遺物より古墳時代前期と考えられる。

第29号住居址（第13図）

遺構 本址は、大半の部分を22号住居址に掘り込まれ、プラン、規模とも不明である。残された西側壁と床面より、壁高は20cm、二次堆積ロームの平坦でやや軟質な床であることがわかった。

遺物 多量の土師器片のみで図示できなかった。本址は遺物より古墳時代前期と考えられる。

第29号住居址



第22号住居址



- I : 暗褐色土
- II : 暗褐色土(ローム粒少量混入)
- III : 暗褐色土(ローム粒微量混入)
- IV : 褐色土

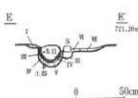
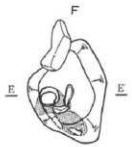
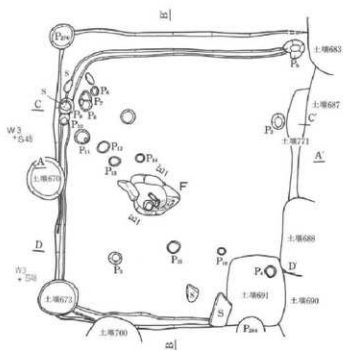
- I : 暗褐色土(炭化物混入, 砂質)
- II : 暗褐色土(0.5~6cm大のローム塊・ローム粒・炭化物混入, 砂質)
- III : 暗褐色土(ローム粒・炭化物混入, 砂質)
- IV : 黒褐色土(0.5cm大のローム塊混入, 砂質)
- V : 暗褐色土(0.5cm~10cm大のローム塊混入)

第23号住居址



- I : 暗褐色土(0.5~3cm大のローム塊, 炭化物微量混入)
- II : 暗褐色土(3~5cm大のローム塊混入)
- III : 褐色土(焼土・ローム粒混入)

第13図 第22・23・29号住居址



- I : 黄褐色土(焼土粒, 0.5cm大の暗褐色土塊微量混入)
- II : 暗褐色土(焼土粒, 炭化物微量混入)
- III : 褐色土(焼土粒微量混入)
- IV : 焼土
- V : 暗褐色土(炭化物, 0.5~1.5cm大のローム塊微量混入)
- VI : 暗褐色土(ローム粒混入)
- VII : 暗褐色土(焼土粒混入)
- VIII : 暗褐色土(0.5~0.7cm大のローム塊混入)

第14図 第24号住居址

第24号住居址 (第14図)

遺構 13区中央N43～N50、E 6～W 3に位置する。主軸をN-87°-Eにとり、南北6.20m、東西6.80mの方形プランを呈する。東側壁面は中世土壌によって切られており、全体の把握は難しかった。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は10cm～20cmと浅い。二次堆積ロームを掘り込んだ床面は平坦で堅緻であった。床面精査の結果、深さ10～20cm、幅15cm程度で壁面から60cm程内側をめぐる周溝、4本の主柱穴などが検出された。炉址は、炉₁、炉₂が検出された。南北100cm、東西90cmの窪みの中央部に位置する炉₁は、緑石をともなった埋甕炉であり、埋設された甕は胴部のみで、その下を高杯の杯部が受けており、杯部接合部の穴をさらにおおうように土器小片2枚が出土した。甕を中心として、周囲に不整形を呈する焼土の広がりを見せている。この焼土の広がりに切りとられるようにして、炉₂の焼土が、楕円形を呈して広がりを見せている。この中には抜き取られた緑石の痕だろうと思われる暗褐色土の落ち込みが確認され、この位置に炉₂が存在したことが推定される。

遺物 土師器の破片が少量出土したのみである(第73図)。器種は高杯と甕があるがいずれも小片で器形を復元できたものはない。遺物より本址の時期は古墳時代前期と考えられる。

第25号住居址 (第15図)

遺構 13区南端N62～N67、W 1～W 3に位置する。主軸をN-14°-Eにとり、南北3.18m、東西2.10mの隅丸方形を呈する。土壌757、776に切れ、東壁と南壁は調査区域外にまでかかっている。壁の立ち上がりは比較的なだらかで、床面は二次堆積ロームに掘り込まれ、軟質で、ピット、炉などの施設は見られなかった。

遺物 遺物の量は非常に少なく、またいずれも小片のため図示できたものはない。本址の時期は遺物より古墳時代前期と考えられる。

第26号住居址 (第15図)

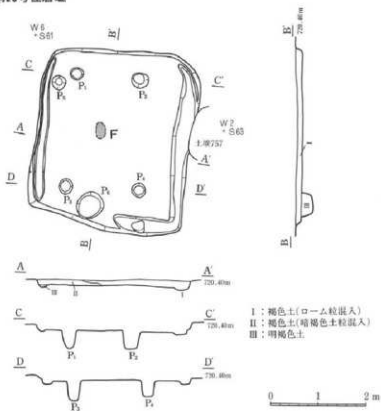
遺構 13区南端N61～N65、W 3～W 6に位置する。主軸はN-166°-Eをとり、南北3.30m、東西3.82mの隅丸方形を示し、北隅を土壌757に切られる。壁の立ち上がりはなだらかで高さは15cm前後を測る。二次堆積ロームに掘り込まれた床面を精査した結果、周溝、ピット、炉などが検出された。周溝は、北側を除いてみられ、幅20cm、深さ6cmと、住居址の規模に比べれば、大きいものであった。炉は地床炉で34×22cmの楕円形を呈し、3～9cmと浅く皿形に掘り込まれていた。

遺物 遺物の量は非常に少なく図示できたものはない。本址の時期は遺物より古墳時代前期と考えられる。

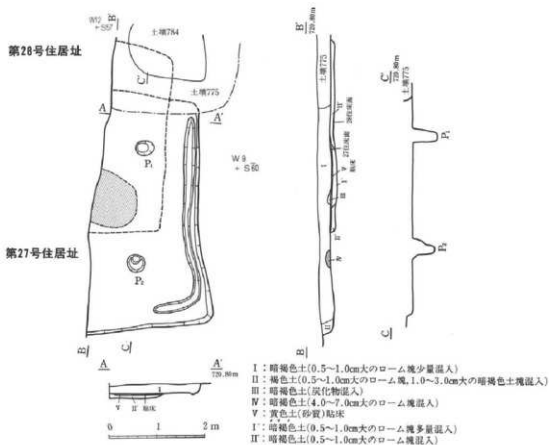
第25号住居址



第26号住居址



第15图 第25・26号住居址



第27号住居址 (第16図)

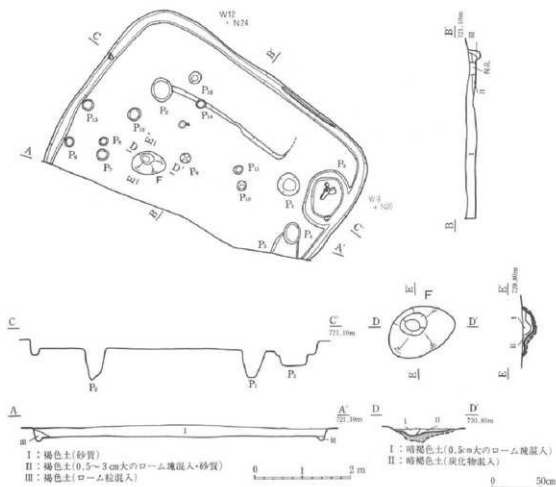
遺構 13区南端、N59～N63、W9～W12に位置し、主軸をN-3°-Eにとり、南北5.20m、東西2.70mの隅丸方形を呈する。28住を貼り、土壌783に切られ西側を調査区域外に残す。壁はなだらかな立ち上がりを示し、床は二次堆積ロームで非常に堅固、平坦であった。28住を切る部分の床面は砂質ローム土の貼り床が厚さ8cmで貼られていた。また貼り床に重なるように、厚さ2～3cm程度の灰の層が見られ、あるいは焼失住居の可能性も残される。東側床面には幅24cm、深さ20cmの周溝が見られた。また検出されたP₁、P₂は、位置と規模から支柱穴と見られる。

遺物 遺物の量は少なく、いずれも小片のため図示できなかった。本址の時期は遺物より古墳時代前期と考えられる。

第28号住居址 (第18図)

遺構 27号住居址、土壌に切られ、大半を調査区域外に残す本址は、他の住居址に見られない人為堆積の覆土の特徴をもつ。床面は比較的固く、二次堆積ローム中に掘り込まれている。わずかに残る床面からは、ピット、炉などの施設は確認できなかった。

遺物 遺物はわずかにあるのみで、図示できたものはない。本址の時期は遺物より古墳時代前期と考えられる。



第17図 第30号住居址

第30号住居址 (第17図)

遺構 12区東端N19～N25、W9～W16に位置するが、南側は区域外にかかり、全貌は明らかでない。本址は向畑7号古墳によって切られている。主軸方向はN-124°-Eを示す。南北6.20m、東西(4.60m)の隅九方形のプランを呈する。壁はほぼ垂直に落ちている。床面は堅固であり、その傾斜は平坦である。

P₁、P₂はそれらの位置と規模より主柱穴であると断定できる。区域外にあると思われる西側主柱穴と北側主柱穴P₂間より北側主柱穴P₃寄り、両主柱穴間より若干内側に炉が位置しており、炉底の被熱焼土化はこの炉の使用頻度の高さをよく顕している。P₄は貯藏穴であると思われる。なお、本址北側にはベッド状の遺構があり、高さは床面より3～5cm、長さは280cmに及ぶ。

遺物 土師器が少量出土したのみである(第74図)。器種別では、小形甕、高坏、甕がある。本址の時期は出土遺物より古墳時代前期と考えられる。

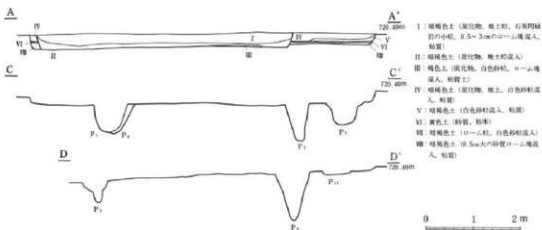
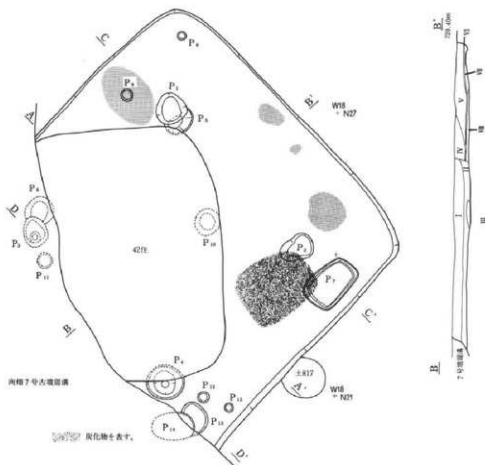
第40号住居址（第18図）

遺構 本址は3区中央東側N20-29、W17-24に位置する。土壌794を切り中央部を第42号住居址、南西側を向畑7号古墳周溝に切られる。表土除去作業の段階で焼土を伴う暗褐色土の落ち込みを確認した。規模は切り合いのため不明確の部分もあるが一辺が7.5mの隅丸方形を呈し、本遺跡の中では大形住居址に属するもので、2時期にわたって使用されたものである。壁は垂直に近い角度で立ち上がり、壁高は30cmを測る。住居址内には30本を越す炭化材が放射状に遺存しており焼失住居の跡を示していた。炭化材の最大幅は約12cmで、長さは直線上のものを同一個体としてみると最大180cmに及ぶ。東北側には170×140cmの範囲に4cmの厚さで炭化物が散乱し、北側に沿って3箇所に厚さ10cmあまり焼土があった。床面は砂質の黄色土でやや軟弱だが平坦な貼り床である。貼り床は厚さ10cm余りで上面の黄色土の下はローム粒・ローム塊の混入する暗褐色土が堆積していた。東側のP₂脇には120×80cmの炭化物が充満していた貯蔵穴と思われる穴がある。ピットは新旧15本が検出された。このうちP₁：円形(80×70×70cm) P₂：不整形円形(72×52×78cm) P₃：円形(66×54×60cm) P₄：円形(84×74×92cm)はその位置・規模及びピット内の断面に炭化物が観察されたことなどから新住居址に伴う柱穴と考えられる。遺物は壁近くに沿って配置されていた。旧床面は新床面より10cm余り下にあり砂質ロームで堅緻だが僅かに起伏がみられる。住居址の大きさは上面の住居址とほぼ同一であり、柱穴もP₂、P₄は共通でP₁に切られたP₅：円形(60×?×75cm) P₆：円形(60×60×41cm)の4本が考えられる。

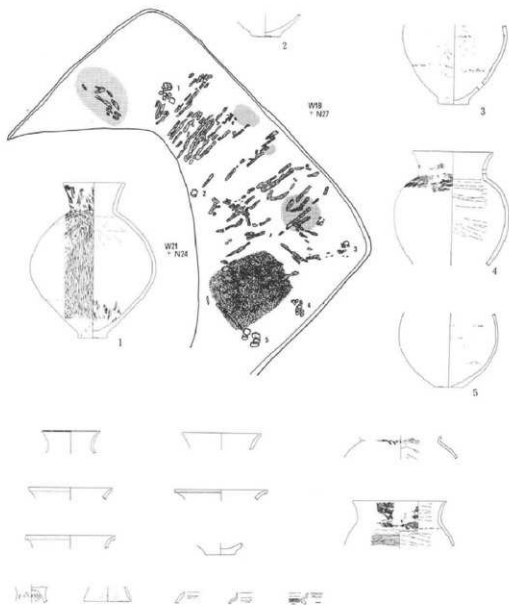
これらのことから下部の旧住居址とほぼ同一箇所に建て直して貼り床をした住居址であり、柱穴も殆ど同一箇所に掘られたものと判断したい。旧住居址から遺物の出土はない。

遺物 覆土中より土器・土製品が出土した他、上記のように新住居址から半完全形以上の壺が4点出土している。特にP₂脇には完形の壺があり、この壺は頸部以下に籠目がついており、籠で保護されていたものとおもわれる。覆土出土のものは小破片で器形の一部しかわからないものが多い。これら出土土器から本址は古墳時代前期と比定できよう。ただ下部の旧住居址については直接時期決定となる資料はないが、第37号住居址の例もあり、新住居址との時間差は少ないものと思われる。

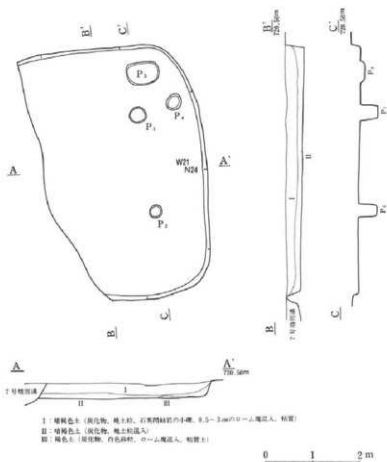
※炭化材の樹種については、本址の数ヶ所からサンプルを採取して、大町高校森義直教諭に鑑定を依頼したところ、すべてがエノキとの結果を頂いた。



第18図 第40号住居址



第19图 第40号住居址遺物出土图

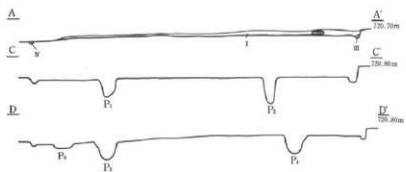
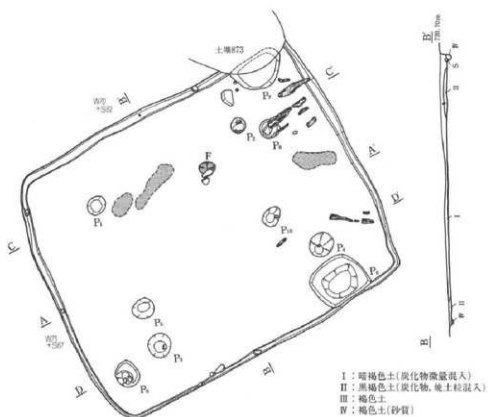


第20図 第42号住居址

17) 第42号住居址 (第20図)

遺構 3区中央東N21~27、W21~24に位置する。40号住居址を切り、西側壁を向畑7号墳周溝に切られる。本址は40号住居址の覆土中に掘り込まれており、検出時に見落としてしまった。40住の掘り下げを開始した後、炭化物が見られない部分を確認し再検出を行なった結果、その存在が明らかになった。規模は南北で5.4mを測り、隅丸方形のプランが推定される。壁は外傾気味に立ち上がり、壁高は30~40cmを測る。床面は石英閃緑岩混入のローム層まで掘り込まれ、堅緻で平坦なものとなっており、40住のものより僅かに深い。ピットはP₁~P₄が検出され、このうちP₁、P₂は位置・深さから4本柱の主柱穴の2つと考えられる。

遺物 土師器小片が、少ないが出土している。遺物より、古墳時代前期の住居址と考えられる。



第21图 第44号住居址

第44号住居址（第21図）

遺構 15区中央S61～S69、W63～W72に位置する。主軸はN-152°-Eをとり、南北5.9m、東西7.1mの隅丸方形のプランで、土壌873に切られる。深い耕作によって削平されて、覆土が非常に浅く、壁の立ち上がりなどは確認できない状態であった。床面は二次堆積ローム層に掘り込まれ、非常に軟弱で緩やかな起伏をもつ。炭化材が東側に方向性をもってみられる事から、焼失住居の可能性も残されるが、焼土、炭化物の量が少なく、分布状態が東部に偏向しており、遺物の量も少ない事から断定はしかねる。

床面精査の結果、壁際を全周する幅16～20cm深さ10cmの周溝、炉、ピット10ヶが検出された。炉は15×8cmの楕円形で、浅く皿状に掘り込まれていた。P₁（40×36×50cm）、P₂（34×30×50cm）、P₃（60×30×40cm）、P₄（60×50×30cm）は位置、深さから支柱穴の可能性がある。またP₅（70×56×74cm）、P₁₈（50×26×16cm）は、位置的に支柱穴の可能性がある。P₆は住居全体の位置から見て南側に壁に沿って設営されており、110×90×40cmの規模をもつ方形の施設でしかも二段に掘り込まれている事から貯蔵穴と断定できる。

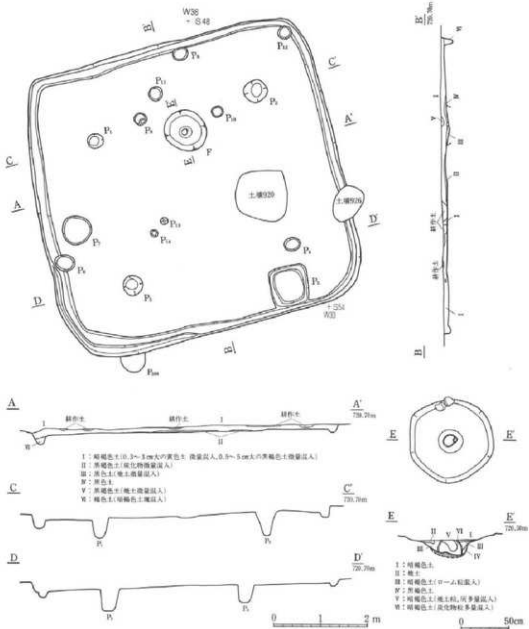
遺物 少量が出土したのみで、図示できたものは、ミニチュア土器2点と台付甕の3点のみである（第74図）。ミニチュア土器は共に遺存状態は良く、第74図119は完存、118は口縁を大きく欠くが器形の復元は可能である。台付甕（第74図120）は、胴と接合部がわずかに遺存するのみである。

本址の時期は遺物より古墳時代前期と考えられる。

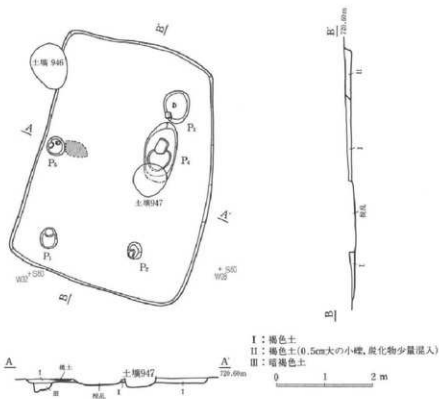
第45号住居址（第22図）

遺構 6区西端S48～53、W32～39に位置する。土壌930を貼り、土壌899、927、928に切られる。南北6.2m、東西6.4mの隅丸方形プランを呈し、炉址の位置からみて南側に出入口を想定でき、主軸方向はN-14°-Wを示す。壁は、ほぼ垂直に近く立ち上がり、壁高は10～20cmを測る。床面は二次堆積ローム中に掘り込まれ、平坦で堅緻なものになっている。床面精査の際に、周溝・ピット・炉址が確認された。周溝は深さ10～20cm程で、壁際を全周する。ピットは14ヶ検出された。P₁～P₄は、いずれも50cm前後の深さで、方形に配列されており、支柱穴と考える。南壁直下東側にあるP₅は二段に掘り込まれており、貯蔵穴と考えられる。炉址は北側柱穴間に設けられ、直径45cmの円形を呈する埋甕炉であり、その掘り方の中に壺の胴部上半を正位に埋設している。底面の砂質黄色土は被熱層として残る。埋甕炉の周囲は浅く窪み、床面から6cm程掘り下げられている。

遺物 土師器と石器が出土している。土師器は古墳時代前期の様相をもつもので、床面北東部に集中して高坏・甕・手づくねなどが出土している。石器は砥石が3点確認されている。遺物よりみて本址は古墳時代前期に比定される。



第22图 第45号住居址



第23図 第47号住居址

第47号住居址 (第23図)

遺構 16区S55~61、W28~33に位置し、主軸はN-20°-Eをとる。南北5.20m、東西3.78mの隅丸方形のプランを呈し、土壙946、947に切られる。深い耕作により覆土がけずられ、壁の状態は明確ではないが、比較的なだらかな立ち上がりであった。底面は、二次堆積ロームに掘り込まれ、軟弱で緩やかな起伏を持つ。住居址中央部に、深さ10cm程で広範囲に攪乱があり、本来あったであろう施設が破壊された可能性がある。P₁、P₂、P₃は規模、位置より支柱穴と思われる。P₁、P₂については、二段の落ち込みがみられ、柱底ととらえる事ができる。またP₃にも柱底がみられ、穴の配置から支柱穴と思われる。またこのP₃に関しては遺物も多少出土している。土壙947に切られるP₄は、二段に掘り込まれ位置と規模より、貯蔵穴ととらえることが自然かもしれない。

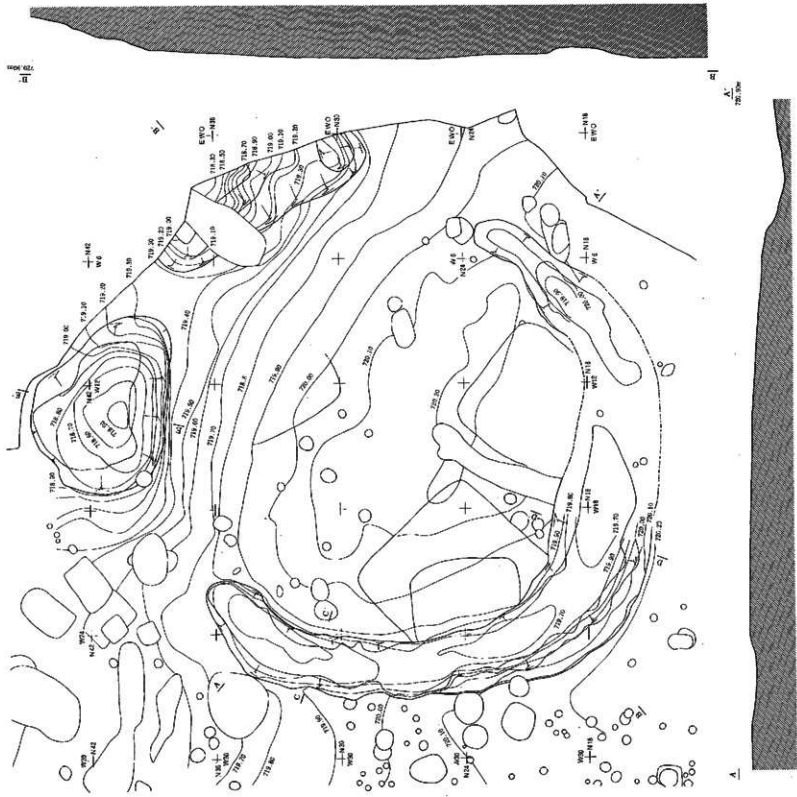
遺物 遺物の量はごくわずかであり、いずれも少片のため図示できたものはない。本址の時期は、遺物より古墳時代前期と考えられる。

住居址一覧表

表 1

住居 No.	図 No.	主 軸	平面形 (cm)	炉位置	炉有燃焼機 (cm)	出 土 遺 物	備 考
1	4	(N-65°-W)	隅丸方形 576×566	中央西 より	地床炉 42×48	土師器高坏、壺	土壇27、28、31に切られる 土壇30を切る
2	5	(N-0°)	隅丸方形 376×(368)	柱穴間	地床炉 100×60	土師器壺、埴、甕	溝4に切られる 5住を切る
3	5	(N-11°-E)	隅丸方形 500×(380)	中央?	地床炉 400×40	土師器壺、甕	
4	6	(N-9°-E)	隅丸方形 378×(290)	なし	—	土師器壺、鉢、甕、埴	
5	5	?	?			土師器壺	溝4、2住に切られる
11	7	(N-0°)	不整形形 490×476	中央	地床炉 24×18	縄文土器、環鉢	土壇128、129、130、131、259、200に切られ る 土壇364を切る
12	8	(N-65°-W)	隅丸方形 680×670	柱穴間	地床炉 44×48	土師器高坏、器台、埴、 甕、土製勾玉	焼失住居、間仕切りの溝あり 土壇145に切られる 土壇154、155、156、157、161、165に切られ る
13	9	(N-0°)	隅丸方形 523×522	不明	不明	土師器高坏、壺、埴、 鉢、ミニチュア	土壇199、246に切られる 土壇250を切る
14	10	(N-109°-E)	隅丸方形 568×516	なし	—	土師器器台、甕、粉鉢 車、釜用	15住を切る
15	10	(N-162°-E)	隅丸方形 754×880	不明	不明	土師器高坏、壺、器台、 甕、台付甕、S字甕	土壇216、354、353、14住に切られる
16	11	(N-14°-E)	方形 830×830	中央東 より	地床炉 60×50	土師器甕、ミニチュア	土壇281に切られる 17住を切る
17	12	(N-0°)	460×400	不明	不明		16住に切られる
18	11	(N-49°-E)	? 42×46	不明	不明	土師器高坏、用、小形 壺、ミニチュア	土壇289、278、290に切られる 間仕切りあり
19	12	(N-0°)	隅丸方形 354×776	不明	不明		土壇201、202を切る
20	12	(N-158°-E)	隅丸方形 430×380	なし	—		
21	12	(N-162°-E)	隅丸方形 442×440	柱穴間	地床炉 54×50	土師器甕、S字甕	土壇374、P ₁₀₀ 、P ₁₀₁ に切られる
22	13	(N-0°)	? 629×164	不明	不明	土師器高坏、壺、甕、 台付甕	29住を切る
23	13	(N-2°-E)	隅丸方形 556×364	不明	不明	土師器高坏、壺、甕、 S字甕、器台	土壇768、789、787、772、618、620、621に切 られる
24	14	N-87°-E	方形 620×608	柱穴間 柱穴間	緑石埋燵炉 42×32新 新田あり 35×22旧	土師器高坏、甕	土壇673、670、683、771、687、688、691、 P ₁₀₀ 、P ₁₀₁ に切られる 土壇700を切る

住居 No.	区 No.	主 軸	平面形 (cm)	炉位置	炉形態規模 (cm)	出土遺物	備 考
25	15	(N-14'-E)	隅丸方形 (318×210)	不明	不明		土層776、757に切られる
26	15	N-166'-E	隅丸方形 330×382	中央	地床炉 34×22		土層757に切られる
27	16	(N-3'-E)	隅丸方形 520×(270)	不明	不明		土層783、775に切られる 土層758、28住を切る
28	16	(N-4'-E)	隅丸方形 402×(140)	—	—		土層783、775、27住に切られる
29	13	?	?	不明	不明	土師器小形甕、壺、台 付甕	22住に切られる
30	17	(N-124'-E)	隅丸方形 620×(460)	柱穴間	地床炉 124×100	土師器高坏、甕、小形 甕	北面にベッコ仕遺構あり
40	18 19	(N-46'-E)	隅丸方形 750×(680)	不明	不明	土師器甕、台付甕、壺	惣矢住居。土層817を切る 42住に切られる
42	20	N-175'-E	隅丸方形	不明	不明		40住を切る。7号墳南溝に切られる。土層549 に切られる
44	21	N-152'-E	隅丸方形 590×706	柱穴間	縁石地床炉 30×28	土師器台付甕、ミニチュ ア	土層873に切られる 惣矢住居址か
45	22	N-14'-W	隅丸方形 640×620	柱穴間	埋篋炉 90×90	土師器高坏、甕、台付 甕、手づくね	土層920、926に切られる P ₁₀₀ を切る
47	23	N-20'-E	隅丸方形 520×378	不明	不明	土師器壺、ミニチュア	土層946、947に切られる

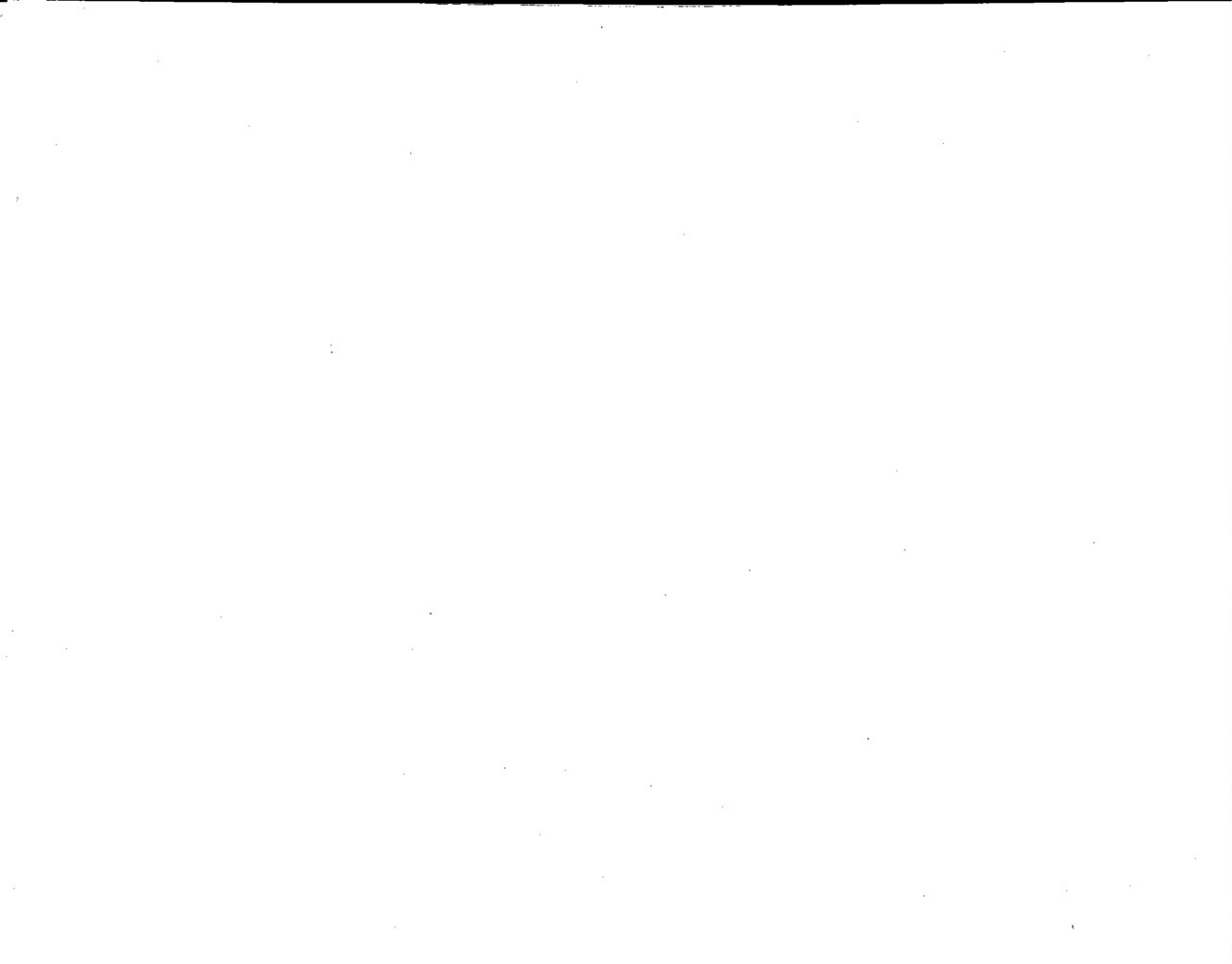


1: 埴輪土 (埴輪の遺存)
 2: 埴輪土 (埴輪の遺存)
 3: 赤土 (埴輪の遺存、砂利)

1: 埴輪土 (埴輪の遺存)
 2: 埴輪土 (埴輪の遺存)
 3: 赤土 (埴輪の遺存、砂利)

1: 埴輪土 (埴輪の遺存)
 2: 埴輪土 (埴輪の遺存)
 3: 赤土 (埴輪の遺存、砂利)

第24図 向陽7号古墳

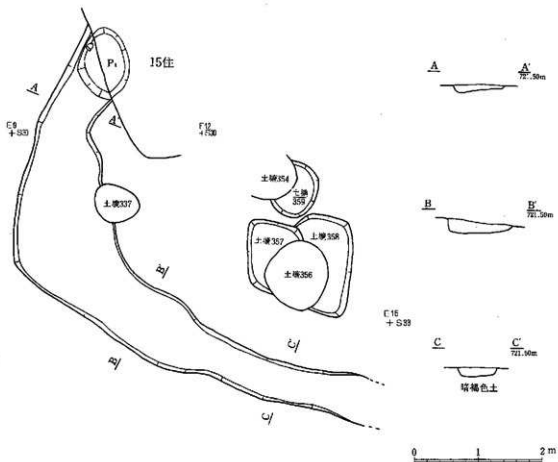


2. 古墳

向畑7号古墳（第24図）

Ⅲ区東側に位置する。丘陵上の台地の北はずれにあたり、6号古墳の南東に隣接する直径22mの円墳である。調査開始以前には墳丘とされる顕著な高まりはなく、本古墳の存在は予想されていなかったが、Ⅲ区検出時に弧状に巡る周溝を確認し、古墳の存在が明らかになった。本古墳の墳丘は地山の二次堆積ロームまで完全に破壊され、周溝部分の他に本古墳を推測させるものはない。周溝は3ヶ所で途切れている。南側周溝は平坦な台地上を掘り込み、およそ半周を巡る。検出面での最大幅は480cm、最深部は52cmを測り、断面形はU字形を呈する。覆土は砂質の褐色土～暗褐色土が堆積しており、下層～底面には拳～人頭大の礫が僅かに見られた。これらが墳丘の葦石として利用されていたものか否かは明らかではない。底面は砂質の二次堆積ロームであった。周溝の内端は台地のはずれにあたり、ここから自然地形は北側に傾斜をまして下方に向っており、北側、東側の周溝部分では急激な傾斜となっている。北側周溝は、最大幅640cm、最深部90cmを測る。壁は急斜面を掘り込んでいる為、内側ではやや急に立ち上がるが外側では確認されなかった。東側周溝は東半が調査対象地外となるが北側周溝と類似すると考える。

遺物は周溝内、検出面から土師器・須恵器・石廬丁等が確認された。土師器では、南側周溝の東端から供献用土器10個体がまとまった状態で押し潰され出土している。須恵器は甕・壺が周溝から確認された。石廬丁は弥生時代のもので混入品と考えられる。遺物より本古墳は古墳時代中期に比定されるものである。



第25図 方形周溝墓

3. 方形周溝墓 (第25図)

遺構 N29~34、E8~13に位置し、土壊333を切り、15住、土壊339に切られる。自然地形はこれより東は傾斜を増して下方へ向かっている。15住による掘削と深耕の為に僅か尻溝の南西コーナーを検出するに止まった。周溝は二次堆積ローム中に掘り込まれ、最深部で20cmを測り、断面皿形を呈する。東辺にはP₁(114×84×50cm)が検出された。また主体部と断定できる落ち込みは検出できなかったが、土壊として扱った土壊357、358、359は位置、規模等の点で問題はあるが、いずれも人為堆積の状態を示しており、本址の主体部である可能性は捨てきれない。土壊357からは鉄(第88図)が出土している。遺物は少く周溝P₁の壁際から出土した埴(第74図)1点を含む古墳時代前期の土師器が少量出土している。

本遺構の所属時期もそこに求めたい。

4. 上墳

今回の調査では多数の穴を検出した。このうち竪穴住居址に伴わないもので直径50cmを越すものを上墳とし、それ未満をピットとして扱った。その数は発見された各種遺構の中ではとりわけ多く、本遺跡を代表する遺構と言えよう。

① 分布 今回の調査で土壌575基が確認された。並行して行った県道改良工事に伴う調査を含めて土壌の分布を見ると、1・2・8・10・13区に集中しており、これらの地区の南北方向には広がっていない。西側は本年度実施された圃場整備事業に伴う第2次調査で多数の土壌が確認された。土壌の分布集中地は地形的に見ると丘状の地形面の中央平坦地にあたる。(付図参照)14区の土壌については他のものとやや趣きが異なり、平面形、断面形、遺物の有無から、あるいは樹木の根痕または耕作による伐根の痕かも知れない。

② 規模 長径は最大713cm、最小50cmである。50cm単位でみると、50～100cmが245基と最も多く、約4割を占め、次いで101～150cm184基、151～200cm91基、201～250cm34基、250cm以上21基と規模が大きくなるにつれ減少している。

③ 平面形態 おおむね円形、楕円形、方形、長方形の4つに分けられるが、それぞれに不整形のものがある。円形、楕円形を呈するものは11区北西部、15区、16区に集中している。規模との関係を見ると、100cm未満のものには円形をしたものが多く、大型のものは方形、長方形のものが多。

④ 断面形

A 方形、長方形を呈するもの

底面が平坦で垂直に近い角度(斜度が85°～90°)で立ち上がるもの。

B 台形を呈するもの

底面が平坦で壁の斜度が85°以内で外傾して立ち上がるもの。浅いものはA類と近似性を持つ。

C 半円形を呈するもの

底面が徐々に浅くなり、緩やかに立ち上がっていくもので、底面と壁面との区別が付きにくいもの。

D フラスコ状を呈するもの

検出面より下に最大径を持ったもの。袋状をしたもの。

E 二段底のもの

底面が二段になっているもの。

F その他

上記A～Eに当てはまらないもの、底面の凹凸の激しいもの、三角形を呈するもの等。

また、A～Fの他にそれらの中間型があるが、いずれか一つの分類を行った。

⑤ 覆土

a 自然堆積を示すもの。各土層が上墳の形状に合わせて層的に重なり合って堆積しているもの。

b 一時的または短期的に重なりまとまった埋没状況を示すもの。かなり深い土層でも単層であるか、ないしは不規則な土層が観察されるもので、ローム粒、ローム塊が混入している例が多い。この様な覆土はかなり特殊な状況下で形成されたものである。人為的な埋め込みが考えられる。

c 土層の区分が不明瞭で漸移的に土色、土質が変化するもの。数は非常に少ない。中には土壌の壁と覆土の識別さえ困難なものもある。

⑥ 特徴的な土壌

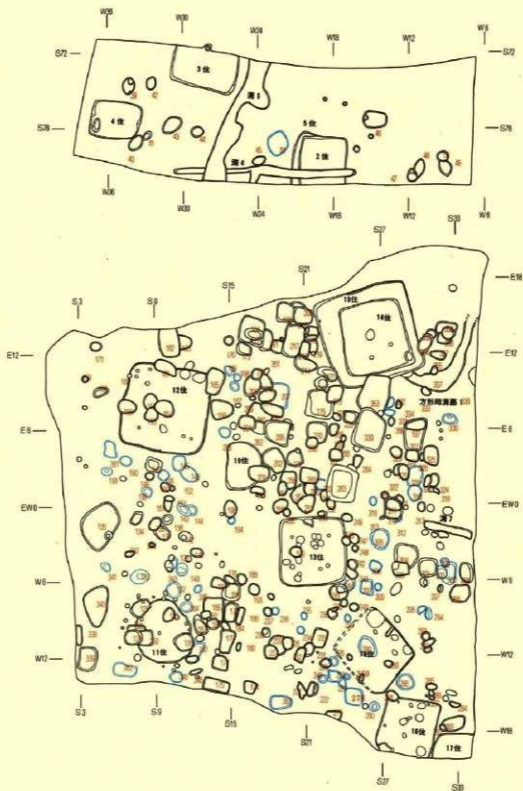
土壌744 13区南側に位置する。規模は123×89cmを測り、方形プランを呈する中世以降の墓址である。長軸方向はN-89°-Eを示している。壁はやや緩やかに立ち上がり、覆土の暗褐色土中にはローム塊が混入していた。この覆土中には多量の人骨が確認された。人骨については詳しく後述している様に壮年期以降の男性のものと思われる。

土壌353 10区南側に位置し、規模は(238)×238cmを測る。平面プランは長方形を呈し、長軸方向はN-18°-Eを示している。壁は急に立ち上がり、覆土は人為堆積の様相を呈していた。底面は軟弱な2次堆積ロームで、平面形に合わせて中央に200×60×20cmを測る長方形の掘りこみが認められた。この段状の掘りこみは棺槨を設置した窪みかもしれないが人骨、釘等の遺物は確認できなかった。

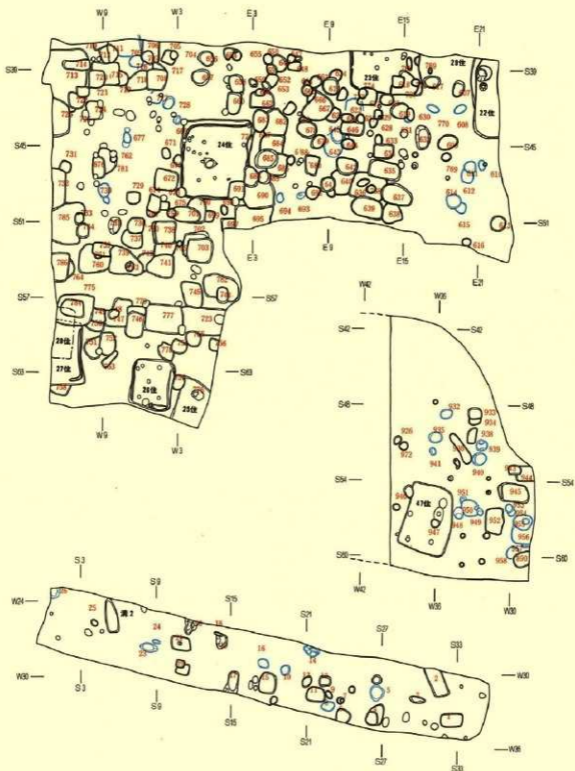
土壌134 10区北側に位置する。規模は102×66cmの長方形プランを呈し、長軸方向はN-22°-Eを示す。深さは検出面より17cmと浅く、壁は緩やかに立ち上がっていた。底面は被熱しておりやや浮いた状態で角礫が敷かれていた。覆土の暗褐色土中には大量の焼土と共に焼けた骨片が認められ、底面から礫の上面に最も多くみられた。覆土の様子などからみて火葬墓と捉えられるが、短期間に何回かに亘って使用された可能性もある。

⑦ 出土遺物と時期 多数の土壌からは土器、石器、銭等の遺物が出土した。土器は殆どが小破片である。他の遺構から混入したと思われるものも多い。土器には縄文時代早期、前期、中期、古墳時代前期、中期のものが見られる。石器は、石鏃、石鏃、石匙、打製石斧、凹石、磨石、磨製石鏃等が出土している。中近世の遺物は陶磁器、宋銭等僅少である。これらの出土遺物と覆土の状況等から各土壌の所産時期を推定する手掛かりとした。

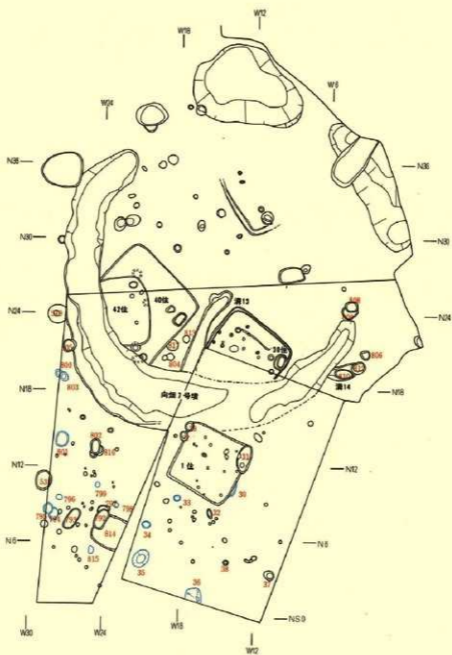
⑧ 墓道について 中世以降の土壌は比較的規模が大きくて方形、長方形を呈するものが多く、数ヶ所に集中が見られる。その集中地区では、はっきりと土壌群と空地とが識別でき、空地は墓道と判断したい。しかし石敷き、踏み固め等の確認は出来なかった。



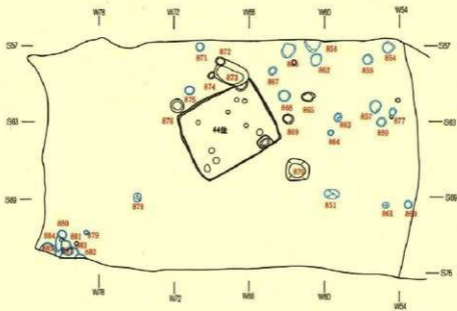
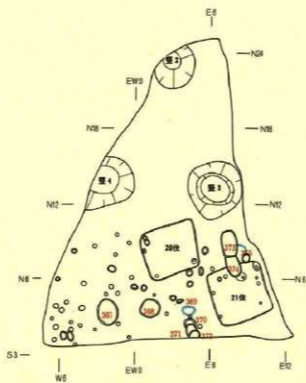
第26圖 土壤配置圖(1)



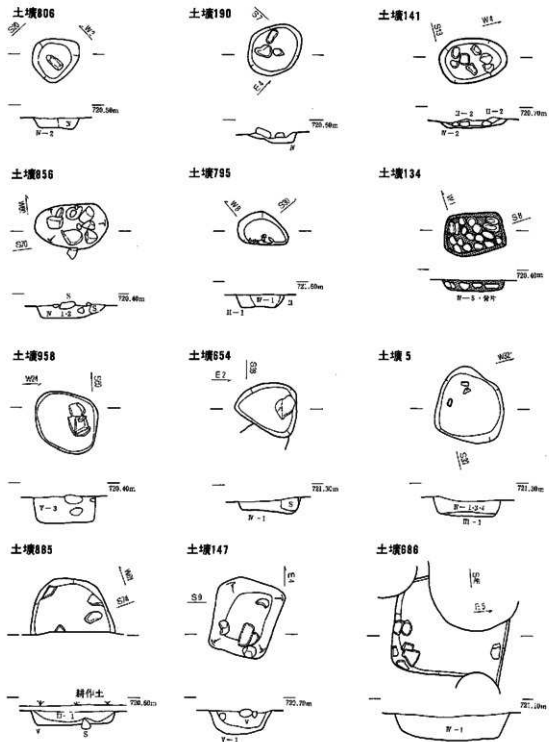
第27図 土壤配置圖(2)



第28图 土壤配置图(3)

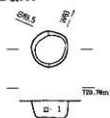


第29圖 土壤配置圖(4)

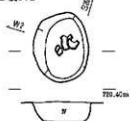


第30圖 土壤(1)

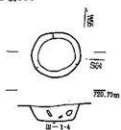
土壤869



土壤812



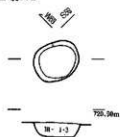
土壤855



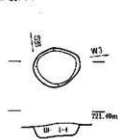
土壤358



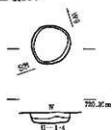
土壤872



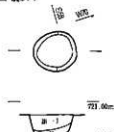
土壤704



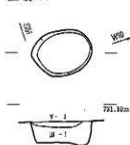
土壤234



土壤871

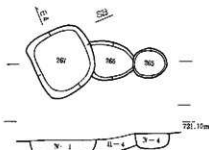
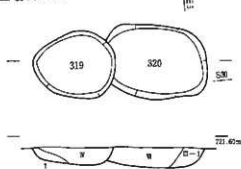


土壤733



土壤265・266・267

土壤319・320



※統一土層

基本土層

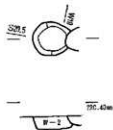
混入物

黄色土	I	□-人粒、□-人塊	1
黄褐色土	II	砂粒	2
褐色土	III	小石・礫	3
暗褐色土	IV	灰化物	4
黑褐色土	V	熟土	5
黑色土	VI		

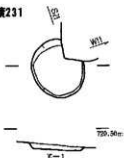


第31圖 土壤(2)

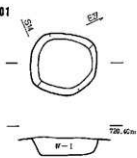
土壤804



土壤231



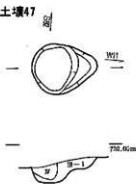
土壤801



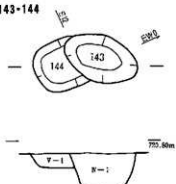
土壤276



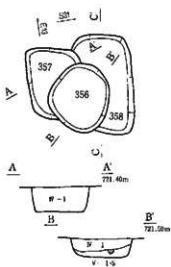
土壤47



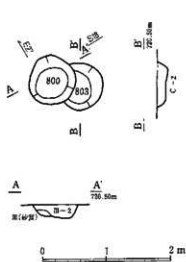
土壤143-144



土壤356-357-358

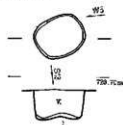


土壤800-803

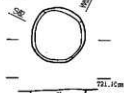


第32圖 土壤(3)

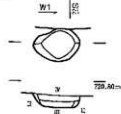
土壤182



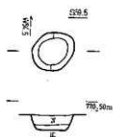
土壤868



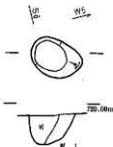
土壤250



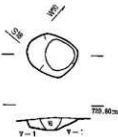
土壤887



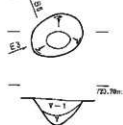
土壤341



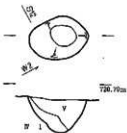
土壤230



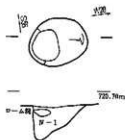
土壤181



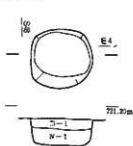
土壤142



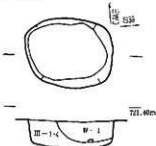
土壤948



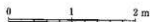
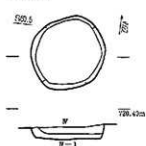
土壤889



土壤657

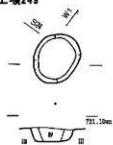


土壤890

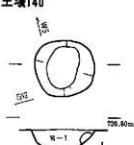


第33图 土壤(4)

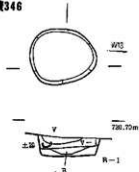
土壤249



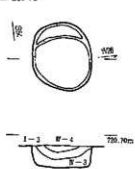
土壤140



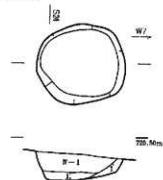
土壤346



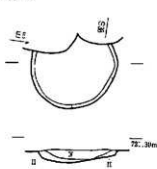
土壤940



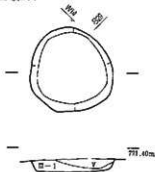
土壤241



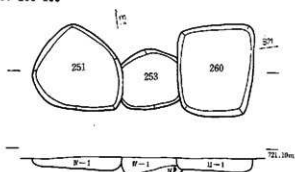
土壤646



土壤288

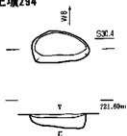


土壤251・253・260

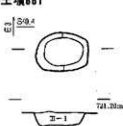


第34圖 土壤(5)

土壤294



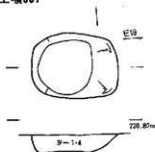
土壤661



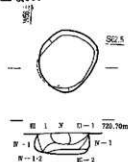
土壤218



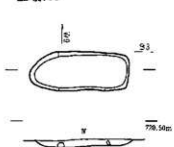
土壤607



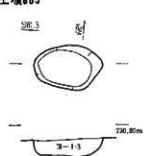
土壤857



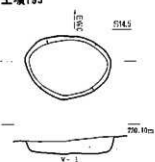
土壤338



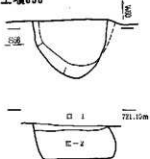
土壤665



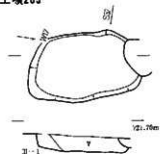
土壤195



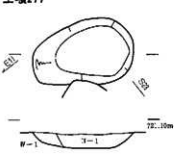
土壤858



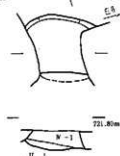
土壤263



土壤277

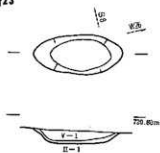


土壤352

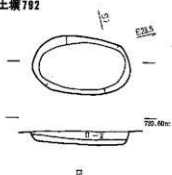


第35图 土壤(6)

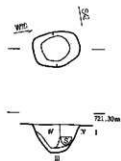
土坑23



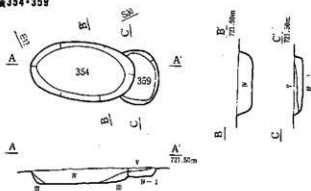
土坑792



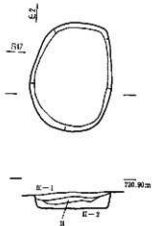
土坑725



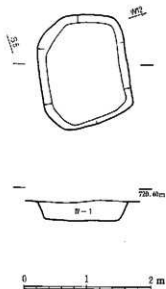
土坑354·359



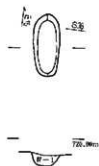
土坑201



土坑339

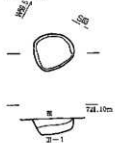


土坑788

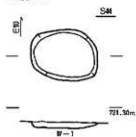


第38图 土坑(7)

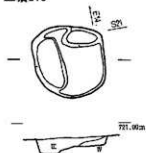
土坑 863



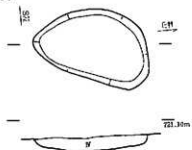
土坑 644



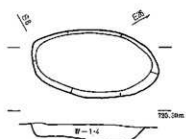
土坑 215



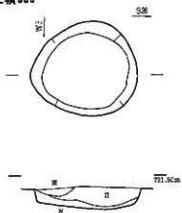
土坑 214



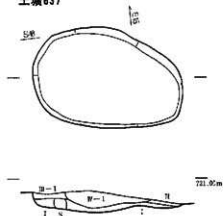
土坑 793



土坑 305

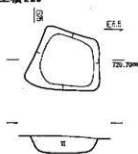


土坑 637

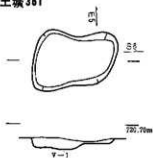


第37圖 土坑(8)

土坑 220



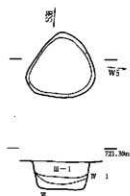
土坑 361



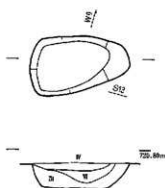
土坑 178



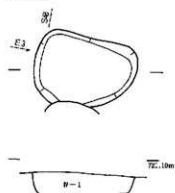
土坑 707



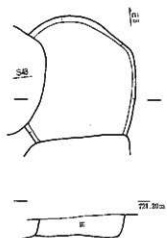
土坑 183



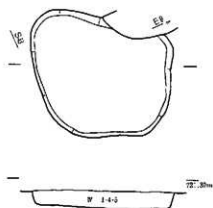
土坑 686



土坑 682

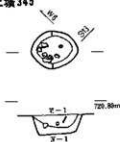


土坑 667

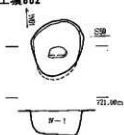


第38图 土坑(6)

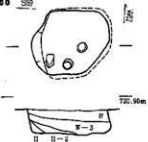
土壤345



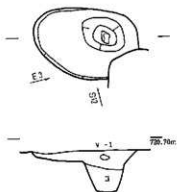
土壤862



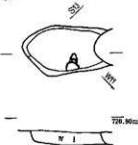
土壤866



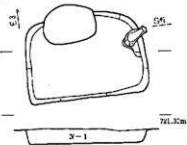
土壤146



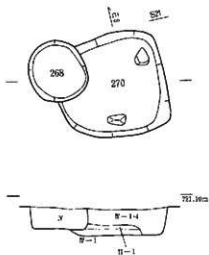
土壤347



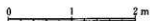
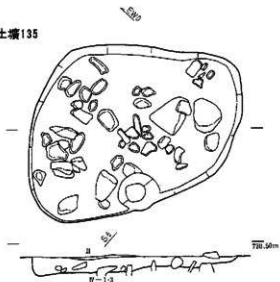
土壤862



土壤268・270

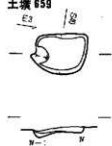


土壤135

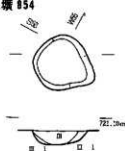


第39圖 土壤00

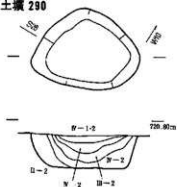
土坑 659



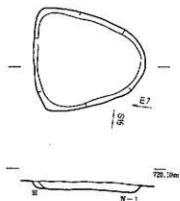
土坑 854



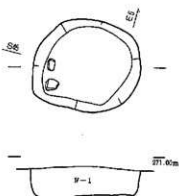
土坑 290



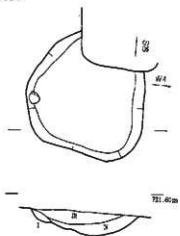
土坑 166



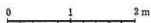
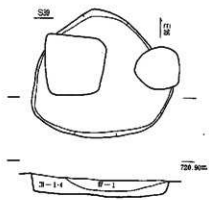
土坑 685



土坑 304



土坑 787

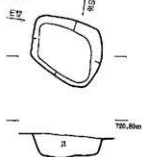


第40图 土坑(1)

土壤 681



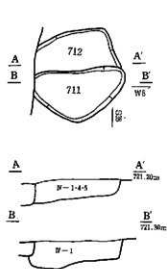
土壤 173



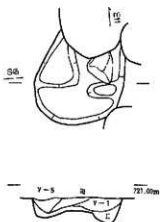
土壤 211



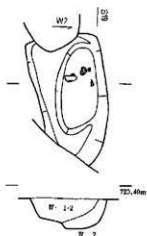
土壤 711·712



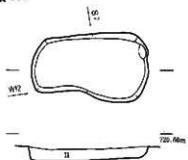
土壤 643



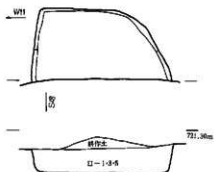
土壤 810



土壤 362



土壤 732

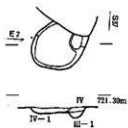


第41圖 土壤(1)

土坑 617



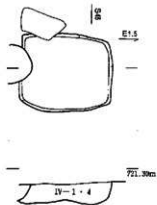
土坑 655



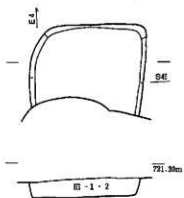
土坑 222



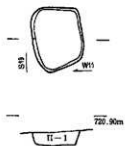
土坑 691



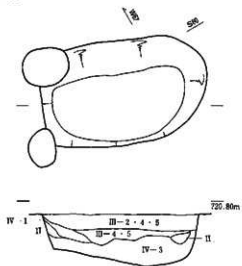
土坑 884



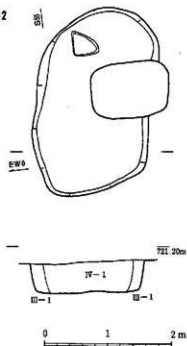
土坑 228



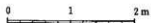
土坑 873



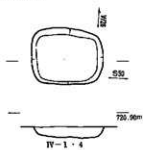
土坑 782



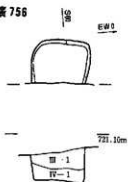
第42图 土坑(3)



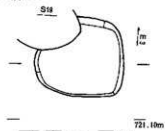
土坑 933



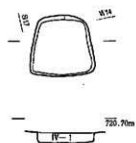
土坑 756



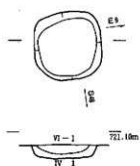
土坑 258



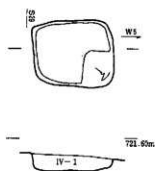
土坑 174



土坑 641



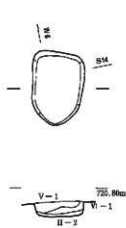
土坑 303



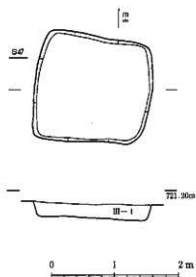
土坑 936



土坑 187

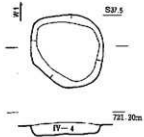


土坑 672

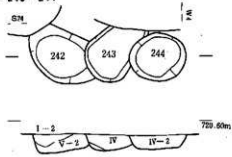


第43圖 土坑(14)

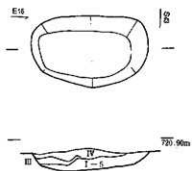
土坑 656



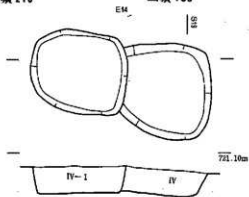
土坑 242・243・244



土坑 632

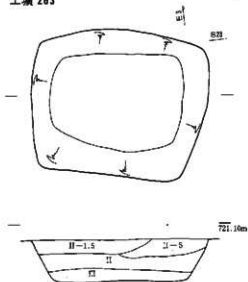


土坑 216

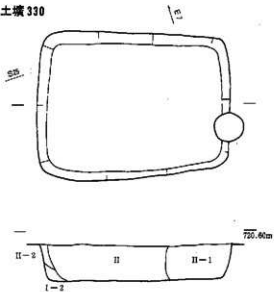


土坑 198

土坑 263

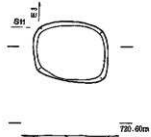


土坑 330

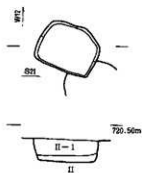


第44图 土坑 19

土坑 145



土坑 232



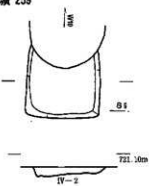
土坑 938



土坑 307



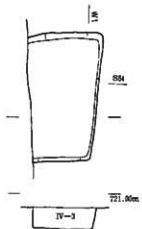
土坑 259



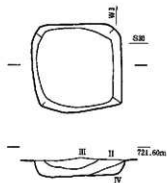
土坑 744



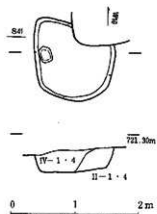
土坑 786



土坑 301

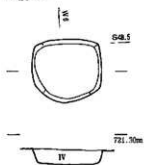


土坑 722

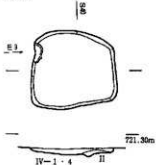


第45图 土坑 ⑩

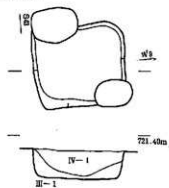
土坑 727



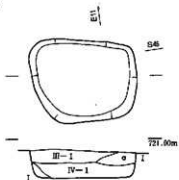
土坑 623



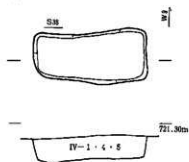
土坑 724



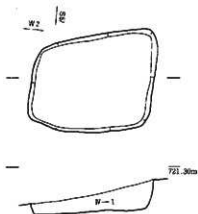
土坑 642



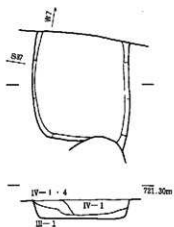
土坑 714



土坑 745

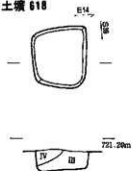


土坑 708

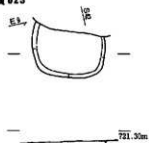


第46图 土坑(10)

土壙 618



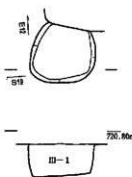
土壙 625



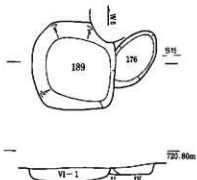
土壙 705



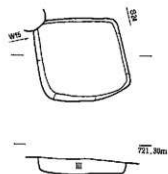
土壙 351



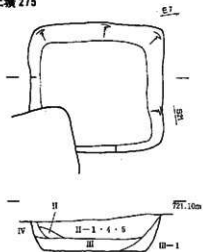
土壙 176・189



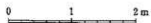
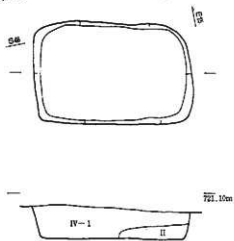
土壙 278



土壙 275

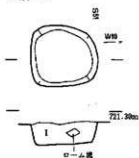


土壙 635

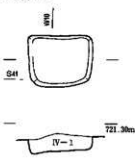


第47図 土壙 00

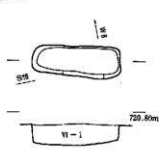
土坑 734



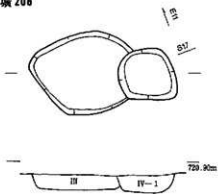
土坑 721



土坑 186

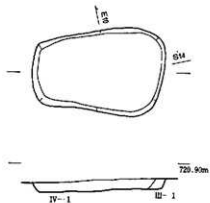


土坑 208

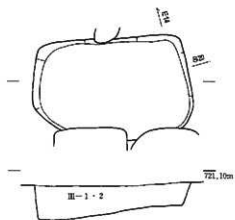


土坑 213

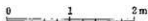
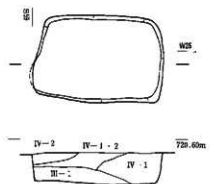
土坑 165



土坑 257

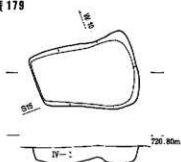


土坑 852

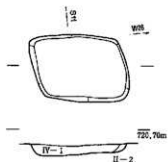


第48圖 土坑(16)

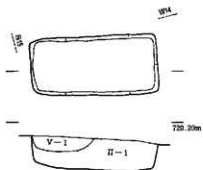
土坑 179



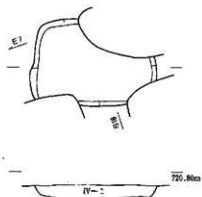
土坑 21



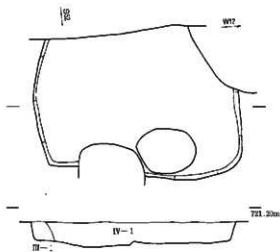
土坑 175



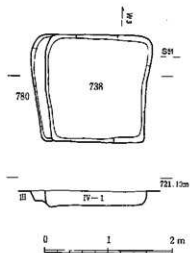
土坑 210



土坑 785

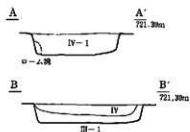
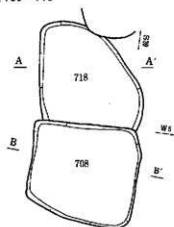


土坑 738・780

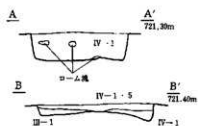
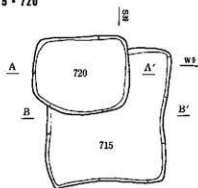


第49圖 土坑(20)

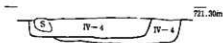
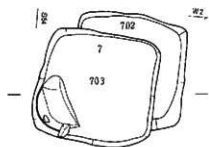
土坑 708・718



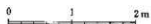
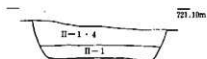
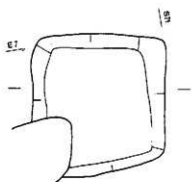
土坑 715・720



土坑 702・703

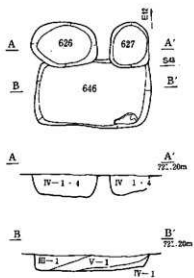


土坑 275

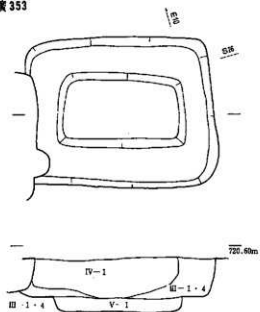


第50図 土坑 2)

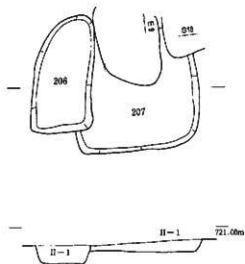
土坑 626・627・646



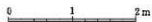
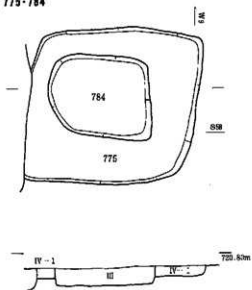
土坑 353



土坑 206・207

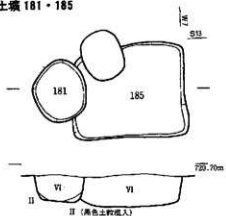


土坑 775・784

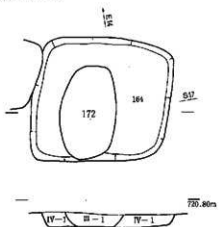


第51圖 土坑 迹

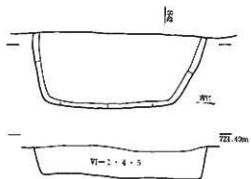
土壤 181・185



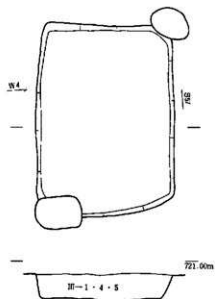
土壤 164・172



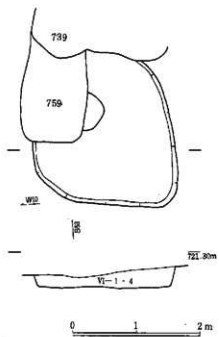
土壤 726



土壤 777



土壤 760



第52図 土壤(2)

表 2

向 畑 II 土 壇 一 覧 表

番号	持主	位 数	平 面 形 状 規模 (cm)	断面形 状 高さ (cm)	覆土の 特 徴	のり 合 い 関 係 >…は切る <…は切られる	備 考
1		S30-W30	隅丸長方形179×108	F20	b		中世以降
2		S30-W30	長方形(234)×124	F20	b		中世以降
3		S30-W30	楕円形:18×62	B30	b		中世以降
4		S24-W30	隅丸方形110×99	B14	b		中世以降
5	30	S24-W30	不整形方形113×107	B36	a		縄文時代
6		S24-W30	方形116×(112)	B18	b		中世以降
7		S24-W30	円形58×53	B30	b		中世以降
8		S24-W30	円形56×51	B12	a		縄文時代
9		S24-W30	円形60×57	E14	a		縄文時代?
10		S18-W24	円形74×74	A36	a		縄文時代
11		S24-W30	不整形方形148×110	B18	b		中世以降
12		S24-W30	方形96×78	B12	b		中世以降
13		S24-W30	不整形方形80×64	B18			
14		S24-W24	不整形方形110×(58)	D24	a		縄文時代
15		S18-W30	方形54×136	B14	b		中世以降
16		S12-W24	不整形方形82×72	10	a		縄文時代
17		S12-W30	長方形(162)×107	B20	b		中世以降
18		S12-W24	不整形(70)×(19)	C46	b		中世以降
19		S12-W24	不整形方形(105)×86	C20	b		中世以降
20		S6-W24	不整形方形(118)×94	E34	b		中世以降
21	49	S6-W24	長方形147×108	B18	b		中世以降
22		S6-W24	不整形方形108×72	C14	b	<P14	中世以降
23	36	S6-W24	楕円形103×64	B21	a		縄文時代
24		S6-W24	楕円形57×35	6	a		縄文時代
25		NS0-W24	楕円形58×47	9			
26		NS0-W28	方形80×71	A18	a		縄文時代
27		N18-W12	隅丸方形73×57	B48	b	>1倍	古墳時代前期
28		N18-W12	隅丸方形89×50	B60	b	>1倍	古墳時代前期
29		N21-W6	不整形方形82×(54)	B10	b		中世以降
30		N12-W12	不整形円形(125)×(33)	B10	a	<1倍	縄文時代
31		N12-W12	楕円形248×100	B20	a	>1倍	古墳時代前期?
32		N12-W12	楕円形86×40	B22	a		縄文時代?
33		N12-W12	円形52×50	C10	a		縄文時代
34		N12-W18	円形68×58	E14	a		縄文時代
35		N6-W18	楕円形163×110	41	a		縄文時代
36		N6-W2	不整形方形119×(112)	72	a		縄文時代
37		N6-W6	隅丸方形78×72	40			古墳時代土器出土
38							
39		S72-W30	楕円形:37×96	E20	a		縄文時代?
40		S78-W30	楕円形143×89	F20	b		中世以降
41		S78-W30	楕円形87×50	E26	b		中世以降
42		S72-W30	隅丸方形98×75	B24	b		中世以降
43		S72-W24	楕円形173×123	B26	a		縄文時代?
44		S78-W24	隅丸方形102×86	B22	b		中世以降

番号	採掘図	位置	平面形 規模(cm)	断面形 高さ(cm)	覆土の 厚さ	切り合い関係 >…は切る <…は切られる	備考
45		S78-W18	楕円形197×68	B12	b		中世以降
46		S72-W12	隅丸長方形186×129	B22	a		縄文時代?
47	32	S78 W 6	不整形円形103×80	F42	a	>土壌48	縄文時代?
48		S78-W 6	楕円形(110)×84	C16	a	<土壌47	縄文時代?
49		S78-W 6	楕円形127×100	E22	b	<土壌50	中世以降
50		S78-W 6	円形92×76	B 8	b	>土壌49	中世以降
51		S78-W18	隅丸方形167×164	21	a		縄文時代
52		S 6-W 6	隅丸方形139×119	B34	b	>土壌259-206, >11住	中世以降
53		S 6 W 6	隅丸方形161×114	F14	a	>11住	古墳時代前期
130		S 6-W 6	楕円形118×89	B24	b	>11住	中世以降
131		S 6-W 6	不整形円形(130)×130	C10		>11住	古墳時代前期?
132		S 6-W 6	円形136×121	B10	a	<P67	縄文時代
133		S 6-EW0	楕円形159×121	C20	a		縄文時代
134	30	S 6-EW 0	長方形102×66	B17			
135	39	NS0 F.W0	隅丸方形329×269	B32	a		縄文時代?
136		S 6-RW0	隅丸方形97×80	F 6	a	>土壌136	縄文時代?
137		S 6-EW0	隅丸方形(120)×98	E16	a	<土壌137	縄文時代?
138		S 6-EW0	楕円形72×62	13			
139		S 6-EW0	隅丸方形(83)×67	C 6	a	<土壌343	縄文時代
140	34	S 6 EW0	隅丸方形95×90	C44	a		縄文時代
141	30	S12-EW0	楕円形105×71	B16	b		中世以降
142	33	S 6-EW0	楕円形88×88	C45	b		中世以降
143	37	S 6-EW0	楕円形108×77	B28	a	>土壌144	縄文時代
144	32	S12-EW0	隅丸方形80×(62)	B02	a	<土壌143	縄文時代
145	45	S 6-E 6	隅丸方形118×98	B26	a	>土壌145	縄文時代
146	39	S12-E 6	不整形(165)×112	F66	a	<土壌146	縄文時代
147	30	S 6-E 6	方形123×100	B38	b		中世以降
148		S 6 R 6	円形85×84	E20	a		縄文時代?
149		S 6-E 6	楕円形75×60	C 8	b		中世以降
150		S 6-E 6	隅丸方形86×65	B 2	a	<土壌152	縄文時代?
151		S 6-E 6	不整形(90)×76	E22		<土壌153	縄文時代?
152		S 6-E 6	楕円形50×(36)	C 4	a	>土壌150	縄文時代?
153		S 6-R 6	楕円形29×50	B12	b	>土壌151	中世以降
154		S 6-E12	楕円形158×121			>12住, >土壌155・157	
155		S 6-E12	楕円形114×101			>12住・土壌157<土壌54	
156		S 6-E12	隅丸方形135×101			>12住	
157		S 6-R12	楕円形(116)×105			>12住, <土壌154・155	
158		NS0-E12	楕円形107×104	C16	a		縄文時代?
159		NS0-E12	方形60×59	C 6			
160		S 6-E12	円形60×44			>12住	
161		S 6-E12	隅丸方形166×97	4		>12住	
162		S 6-E18	長方形230×159	B64	b	>土壌163	中世以降
163		S 6 R18	隅丸方形108×(94)			<土壌162	
164	52	S12-E18	方形208×195	7		<土壌172	

番号	掲載図	位置	平面形 規模(cm)	断面形 高さ(cm)	覆土の 特徴	切り合い関係 >…は切る <…は切られる	備考
165	48	S12-E12	隅丸方形234×139	B19	b	>12位	中世以降
166	40	S12-E12	隅丸方形175×160	B13	a		縄文時代
167		S12-E12	円形75×70	7			縄文時代
168		S12-E12	円形64×57	13			縄文時代
169		S12 E12	楕円形76×70	10			縄文時代
170		S12-E18	円形74×73	C16	a		縄文時代?
171		NS0-E18	楕円形90×74	B24	b		中世以降
172	52	S12-E18	楕円形150×92	B21	a	>土壌164	縄文時代?
173	41	S12-E18	隅丸方形63×52	B36	a		縄文時代?
174	43	S12 W12	方形100×97	A16	b		中世以降
175	49	S12-W12	長方形200×98	A49	b		中世以降
176	47	S12-EW0	楕円形(95)×60	B18	a	<土壌189	縄文時代?
177		S12-W6	隅丸方形119×112	B14	b		中世以降
178	38	S12-W6	隅丸方形150×93	B32	a		縄文時代?
179	49	S12-W6	隅丸方形161×112	B28	b	>土壌184	中世以降
180		S12 W6	楕円形65×38	C6	c		漆器の跡?
181	52	S12-W6	楕円形100×83	B44	a	>土壌185	縄文時代?
182	33	S12-W6	楕円形82×66	A46	a	>土壌185	縄文時代?
183	38	S12-W6	不整形157×88	B38	a		縄文時代?
184		S12-W6	隅丸方形(78)×59	E24	b	<土壌179	中世以降
185	52	S12-W6	方形183×150	B50	b	<土壌181・182	中世以降
186	48	S12-W6	長方形85×47	A42	a		縄文時代?
187	43	S12 EW0	隅丸方形115×100	B28	a		縄文時代?
188		S12-EW0	楕円形85×75	B10	b		中世以降
189	47	S12-W6	不整形138×132	C30	a	>土壌175	縄文時代?
190	30	S6-E6	楕円形92×79	B16	b		縄文時代
191	33	S6-E6	楕円形83×64	F42	a		縄文時代
192		S6-E6	不整形81×77	C8	a		縄文時代
193		S12-W6	円形88×86	B12	b		中世以降
194		S12-EW0	円形70×62	B16	b		縄文時代
195	35	S12-EW0	楕円形136×101	B25	b		中世以降
196		S12-E6	隅丸方形118×60	B6	a		縄文時代
197		S24-E12	楕円形175×99	29		>土壌327	
198		S18-E18	隅丸方形(181)×149	40		<土壌216、>土壌308	
199		S18-EW0	楕円形100×87	B12		>13位	
200		S6-E6	方形140×(44)	22		>11位、<土壌128・259	
201	36	S12-E6	楕円形172×132	B25	a	>19位	古墳時代前期?
202		S18-E6	楕円形201×150	C10	b		中世以降
203		S12-E6	円形92×83	B18	a		縄文時代
204		S12-E12	方形132×102	B24	a	>土壌210・252	縄文時代?
205		S18-E6	方形201×188	B38	b	>土壌210・252	中世以降
206	51	S18-E12	隅丸方形192×93	B20	b	>土壌210	中世以降
207	51	S18 R12	方形(197×196)	B29	b	<土壌206・211・212	縄文時代
208	48	S12-E12	楕円形(185)×136	B23	b	>土壌212、<土壌213	中世以降

番号	掲載図	位 置	平 面 形 規模(cm)	断面形 厚さ(cm)	礎土の 特 徴	切 り 合 い 関 係 >…は出る <…は切られる	備 考
209		S 12-E 12	圆形形68×38	10			
210	49	S 12-E 12	方形202×(120)	R22	b	<土壌204・205・206, >土壌352	中世以降
211	41	S 12-E 12	隅丸方形133×100	B30	b	>土壌207	中世以降
212		S 12-E 12	楕円形113×(100)	26		>土壌207, <土壌208・213	
213	48	S 12-E 12	隅丸方形91×80	B21	b	>土壌212・208	中世以降
214	37	S 18-E 18	楕円形189×111	B22	b	<土壌218	中世以降
215	37	S 18-E 18	隅丸方形115×112	B25	b	>土壌217・219	中世以降
216	45	S 18-E 18	方形158×134	B38	b	>土壌198・308	中世以降
217		S 18-E 18	隅丸方形253×(158)	F48	b	>土壌308, <土壌131・215・218	中世以降
218	35	S 18-E 18	長方形17×78	A50	b	>土壌214・217・219	中世以降
219		S 18-E 18	楕円形(95×65)	42		<土壌215・218・P101	
220	38	S 24-E 12	方形109×96	R28	b		中世以降
221		S 18-W 12	不整形143×57	10		(土壌222に接する)	
222	42	S 18-W 12	隅丸方形116×75	B36	b	(土壌221に接する)	中世以降
223		S 18-W 12	隅丸方形105×89	B22	a	>土壌224	縄文時代
224		S 24-W 12	楕円形(79)×61	B28	a	<土壌223	縄文時代
225		S 18-W 6	方形83×78	20		<土壌226	
226		S 18-W 6	円形94×75	E28	a	>土壌225	縄文時代
227		S 18-W 6	隅丸方形100×90	B22	b	>土壌229	中世以降
228	42	S 18-W 6	方形104×80	B14		>土壌229	
229		S 18-W 6	楕円形125×(110)	B 8	a	<土壌228・227	縄文時代?
230	33	S 12-W 6	隅丸方形78×64	B17	a		縄文時代
231	32	S 18-W 6	楕円形92×82	B 9	b	<土壌232, >土壌233	中世以降
232	45	S 18-W 6	隅丸方形101×82	A36	b	>土壌231	中世以降
233		S 18-W 6	方形146×111	B18	b	<土壌231	中世以降
234	31	S 18-W 6	円形64×61	B18	a		縄文時代
235		S 18-W 6	円形60×50				縄文時代
236		S 18-W 6	隅丸方形50×50	B10	a		縄文時代
237		S 12-W 6	楕円形76×67	R12			
238		S 18-W 6	不整形104×80	14			
239		S 24-W 6	円形74×65	E22	a		縄文時代
240		S 24-W 6	楕円形65×53	A26	a		縄文時代?
241	34	S 18-W 6	円形144×126	B46	a	>土壌241・245	縄文時代?
242	44	S 24-EW 0	楕円形90×77	B25	a	>土壌243	縄文時代?
243	44	S 24-EW 0	隅丸方形(95)×80	B28	a	<13住・土壌242, >土壌244	縄文時代?
244	44	S 24-EW 0	楕円形(125)×80	B30	a	<土壌241・243	縄文時代
245		S 18-W 6	楕円形(64)×57	B16	a	<土壌241	縄文時代
246		S 24-EW 0	円形77×67	5		>13住・土壌247	中世以降
247		S 24-EW 0	楕円形(67)×79			<土壌246	
248		S 24-EW 0	円形66×62				
249	34	S 24-EW 0	円形83×69	B23	a	13住に接する	縄文時代?
250	33	S 18-EW 0	楕円形73×52	A20	b	<13住	古墳時代前期?
251	34	S 18-E 6	隅丸方形143×138	B21	b	>土壌253・254	中世以降
252		S 18-R 6	楕円形(74)×68	D22	b	<土壌263	中世以降

番号	掲載図	位 置	平面形 規模(cm)	断面形 深さ(cm)	瓦土の 特徴	切り合い関係 >…は切る <…は切られる	備考
253	34	S 18-E 6	楕円形90×(88)	B 30	b	<土層251・254・260	中世以降
254		S 18-E 6	隅丸方形132×(117)	B 36	b	<土層251, >土層253	中世以降
255		S 18-EW 0	円形66×60		5	土層256に接する	
256		S 18-E 6	隅丸方形111×104	C 18	a	土層256に接する	縄文時代?
257	48	S 18-E 6	楕円形113×77		9	>土層258	
258	43	S 18-E 6	隅丸方形149×127	B 20	b	<土層257	中世以降
259	45	S 6-W 6	方形118×(78)	B 15	b	>11位・土層200, <土層128	中世以降
260	34	S 18-E 6	方形145×122	B 20	b	>土層253・262	中世以降
261		S 18-E 6	隅丸方形83×(55)	C 30	b	<土層263, 土層262・269に接する	中世以降
262		S 18-E 6	楕円形83×(76)	B 20	b	<土層260・263, 土層261に接する	縄文時代
263	44	S 18-E 6	方形277×231	B 68	b	>土層262・261・262・P 106	中世以降
264		S 24-E 6	方形(98)×69	B 16	a	<P 106	縄文時代?
265	31	S 18-E 6	円形64×46	A 14	a	>土層266	縄文時代
266	31	S 18-E 6	楕円形64×61	22	b	<土層265・267	中世以降
267	31	S 18-E 6	方形105×97	B 24	b	>土層266	中世以降
268	39	S 18-E 6	円形99×91	A 36	b	>土層270	中世以降
269		S 18-E 12	楕円形98×78	D 36	b		中世以降
270	39	S 18-E 6	方形173×167	B 44	b	<土層268	中世以降
271		S 18-E 12	楕円形50×34		5		
272		S 18-E 12	不整形142×138	F 22	b		中世以降
273		S 18-E 12	方形133×123	B 40	b	>土層275, 15位に接する	中世以降
274		S 18-E 12	方形98×97	C 22	b	>土層277	中世以降
275	50	S 18-E 12	方形921×213	B 62	b	<土層273, >土層276	中世以降
276	32	S 18-E 12	楕円形72×60	B 42	b	<土層275	中世以降
277	35	S 18-E 12	楕円形163×106	B 14	b	>15位, <土層274	中世以降
278	47	S 24-W 12	方形137×135	B 27	b	<P 109	縄文時代
279		S 18-W 12	方形122×72		17	区域外にかかる	
280		S 24-W 12	方形78×73	B 24	a		縄文時代
281		S 24-W 12	楕円形93×82			>16位	
282		S 30-W 12	楕円形63×47	B 31		>土層283	
283	35	S 30-W 12	方形185×106	B 21	a	<土層283	縄文時代?
284		S 30-W 12	楕円形83×45		3		
285		S 30-W 12	楕円形85×63	B 22	b	>土層286	中世以降
286		S 30-W 12	円形50×(34)	E 16	a	<土層285・287	縄文時代
287		S 30-W 12	楕円形50×40		5	>土層286	
288	34	S 24-W 12	円形140×129	B 22	a		縄文時代
289		S 24-W 12	隅丸方形67×56	B 12	a	>18位	縄文時代?
290	40	S 24-W 6	隅丸方形166×135	B 53	a	>18位	縄文時代
291		S 12-E 18	楕円形163×(73)		25	>土層351, <土層164・172	
292		S 30-W 6	方形(67)×62			<土層293	
293		S 30-W 6	長方形109×54			>土層292・P 116	
294	35	S 30-W 6	楕円形91×52	B 24	a		縄文時代
295		S 24-W 6	楕円形94×53	B 19	a		縄文時代
296		S 30-W 6	隅丸方形150×147				

番号	掲載図	位 置	平面形 規模(cm)	断面形 高さ(cm)	礎土の 特 徴	切り合い関係 >…は切る <…は切られる	備 考
297		S30-W 6	楕円形60×42	C 6	c		築削の跡か
298		S30-E W0	楕円形157×95				
299		S30-E W0	円形67×65	C10	a	>土壌302	縄文時代
300		S30-E W0	隅丸方形98×87	B10	a	>土壌302	縄文時代
301	45	S30-E W0	方形143×140	B22	a		縄文時代?
302		S30-E W0	方形153×103	20		<土壌299-300	縄文時代
303	43	S24-E W0	方形126×105	B26	b	>土壌304	中世以降
304	40	S24-E W0	隅丸方形187×(144)	C34	b	<土壌303	中世以降
305	37	S24-E W0	楕円形170×150	C36	a		縄文時代
306		S24 E W0	隅丸方形97×87	B16	a		縄文時代
307	45	S24-W 6	方形124×91	B16	a		縄文時代
308		S18-E 18	楕円形(179)×150	B18	a	<土壌198・216・217	縄文時代?
309		S24-W 6	円形65×61	R26	a		縄文時代
310		S24-E W0	方形141×(67)	C16	b	<土壌311, >土壌312-313	中世以降
311		S24 F 6	隅丸方形142×106	C36	b	>土壌310-314・315	中世以降
312		S24-E W0	楕円形(80)×70	B22	a	<土壌310	縄文時代
313		S24-E W0	楕円形(57)×40	E38	a	<土壌315	縄文時代?
314		S24-E 6	円形75×(40)			<土壌311	
315		S24-E 6	円形65×62			<土壌311	
316		S24 E 6	円形73×60	C12	a		縄文時代
317		S24-E 6	円形74×60	C12	b		中世以降
318		S30-E 6	楕円形(61)×38	F14	a	<P118	縄文時代?
319	31	S24-E 6	楕円形131×107	B29	a	>土壌320	縄文時代
320	31	S24-E 6	隅丸方形170×120	B32	a	<土壌319	古墳時代前期
321		S24-E 6	隅丸方形123×88	R14		>土壌321	
322		S30-E 6	楕円形103×58			<土壌321	
323		S30-E 6	楕円形99×52			>土壌324	
324		S30-E 6	楕円形111×84			<土壌323	
325		S30-E 6	隅丸方形154×120	B20	b	>土壌326	中世以降
326		S24-E 6	隅丸方形66×(28)			<土壌325	
327		S24-E 6	方形(172)×156	8	b	<土壌197, >土壌328	中世以降
328		S24-E 6	方形102×(86)	B20	b	<土壌327	中世以降
329		S24 E 6	円形95×95	C16	b		中世以降
330	44	S24-E12	方形287×231	B54	b	>土壌353・P107, P126に接する	中世以降
331		S24-E12	楕円形92×53	B 8	a		縄文時代
332		S24-E12	楕円形100×58	C10	a	土壌334と接する	縄文時代
333		S30-E12	円形77×75	10		>方形基礎1	
334		S24-E12	楕円形70×49	7		土壌332と接する	
335		S30-E12	隅丸方形109×81	C18	a		縄文時代
336		S30-E12	円形148×62	4		区域外にかかる	
337		S30-E12	円形69×57	C 6	c	>方形基礎高1	
338	35	NS0-W 6	長方形154×62	B10	a		縄文時代?
339	38	NS0-W 6	隅丸方形178×140	B31	b		中世以降
340		NS0-W 6	方形267×230	E14	a		縄文時代

番号	緯度	位置	平面形 規模(cm)	断面形 高さ(cm)	覆土の 特徴	切り合い関係 >は切る <は切られる	備考
341	33	N S 0-E W 0	楕円形84×60	B 46	a		縄文時代
342		S 6-E W 0	楕円形82×53	5			
343		S 6-E W 0	楕円形90×60	23		>土壌139	
344		S 6-E W 0	円形55×44	4			
345	39	S 12-W 6	方形74×60	B 44	b		縄文時代土器多量出土
346	34	S 12-W 6	円形105×88	B 33	a		縄文時代
347	39	S 12-W 6	方形(115)×76	B 24	b	< P 73	縄文時代
348		S 12-W 12	楕円形106×42	B 12	b		中世以降
349		S 18-W 12	円形75×63	C 26	a		縄文時代
350	31	S 18-W 12	円形64×48	C 24	a		縄文時代
351	47	S 18-E 18	円形(103×84)	A 48	b	<土壌291-217-131	中世以降
352	35	S 12-E 12	楕円形105×(74)	C 30	b	<土壌204-205-210	古墳時代前期
353	51	S 24-E 12	長方形(283)×238	B 48	b	>14住、<土壌330・P 126	近世以降の人員出土
354	36	S 30-E 18	楕円形166×93	B 26	b	>14生・土壌359	中世以降
355		S 30-E 12	楕円形122×69	B 16	b		中世以降
356	32	S 30-E 18	円形111×98	B 32	b	>土壌357・358	中世以降
357	32	S 30-E 18	隅丸方形114×88	B 42	b	<土壌356、>土壌358	古墳時代前期
358	32	S 30-E 18	長方形157×(93)	B 28	b	<土壌356-357	古墳時代前期?
359		S 30-E 18	円形88×76	B 16	b	<土壌354	古墳時代前期?
360		S 24-E 12	円形75×55	B 22	b		中世以降
361	38	S 6-E 6	隅丸方形131×99	B 18	b		縄文時代
362	41	S 6-W 12	隅丸方形188×121	B 23	a		縄文時代
363		S 18-W 12	隅丸方形156×120	B 32	a		縄文時代
364		S 6-W 6	円形100×89	22			縄文時代
367		N 6-E W 0	円形203×159	7			
368		N 6-E 6	円形180×151	5			
369		N 6-E 6	楕円形108×73	24			縄文時代
370		N 6-E 6	方形102×94	13		<土壌371	
371		N 6-E 6	方形100×97	20		>土壌370・土壌372・P 192	
372		N 6-E 6	円形83×(63)	26		>土壌371・P 192	
373		N 6-E 12	長方形211×129	7		>土壌374・375	
374		N 6-E 12	楕円形(162)×113	14		<土壌373・375、>21住	
375		N 6-E 12	方形(145×82)	8		<土壌373・374・P 199、>21住	
607	35	S 36-E 24	楕円形153×108	B 26	b		中世以降
608		S 42-E 24	楕円形102×64	C 2	a		縄文時代
609		S 42-E 24	楕円形176×116	C 12	b		中世以降
610		S 42-E 24	隅丸方形72×57	F 14	a	P 315と繋がる	縄文時代
611		S 42-E 24	円形115×107	E 24	a	>土壌612	縄文時代
612		S 42-E 24	円形130×105	C 20	a	<土壌611	縄文時代
613		S 48-E 24	円形129×118	C 18	a		縄文時代?
614		S 48-E 24	楕円形138×109	F 10	a	>土壌615	縄文時代
615		S 48-E 24	円形85×(67)	C 6	a	<土壌614	縄文時代
616		S 48-E 24	円形72×65	9		区域外にかかる	縄文時代
617	42	S 36-E 18	隅丸方形135×105	B 20	b		中世以降

番号	花巻園	位 置	平 面 形 規模(cm)	断面形 規模(cm)	覆土の 特徴	切 り 合 い 関 係 >…は切る <…は切られる	備 考
618	47	S36-E18	方形108×99	B32	b	>土塙787・23件	中世以降
619		S42-E18	円形150×120	A22	b	<土塙630, >土塙631	中世以降
620		S36-E18	円形111×92	B8	a	>42位・土塙787	縄文時代?
621		S36-E18	方形152×140	B8	b	<土塙622・774, >42位	中世以降
622		S36-E12	方形140×140	A26	b	<土塙626・627, >土塙621	中世以降
623	46	S36-E12	方形144×124	B13	b	>土塙624・663	中世以降
		S36-E12	円形113×96	E18	a	<土塙623	縄文時代?
625	47	S42-E12	方形118×(76)	B18	b	<土塙667	中世以降
626	51	S42-E12	楕円形105×73	B38	b	>土塙622・646	中世以降
627	51	S42-E12	隅丸方形72×62	A34	b	>土塙622・646	中世以降
628		S42-E18	隅丸方形76×68	C18	a	<土塙629	縄文時代?
629		S42-E18	方形73×65	E26	a	>土塙628	縄文時代?
630		S42-E18	楕円形101×61	B6	a	>土塙619・631	縄文時代?
631		S42-E18	円形(62)×58	B6	a	<土塙630・619	縄文時代
632	45	S42-E18	隅丸方形186×114	C35	b		中世以降
633		S42-E18	楕円形(78)×63	A46	b	<土塙634	中世以降
634		S42-E18	方形158×115	23		>土塙633	
635	47	S42-E18	長方形253×169	B53	b	>土塙636・P310	中世以降
636		S48-E18	方形280×203	R30	b	<土塙635・637・639・708・P313, >土塙640	中世以降
637	37	S48-E18	楕円形244×160	F35	b	>土塙636・638	中世以降
638		S48-E18	隅丸方形161×(154)	7		<土塙637・638	
639		S48-E18	隅丸方形258×155	C18	b	>土塙636・638	中世以降
640		S42-E12	方形230×(195)	C12	a	<土塙642・638・641・P312	縄文時代?
641	43	S48-E12	方形112×105	B23	b	>土塙640・P312	中世以降
642	46	S42-E12	円形170×130	A46	b	>土塙643・640	中世以降
643	41	S42-E12	不整形; 48×(140)	F41	a	>土塙642, <土塙645・679・692・644	縄文時代
644	37	S42-E12	楕円形105×81	B9	b	>土塙643・645	中世以降
645		S42-E12	円形129×97	F40	a	<土塙644, >土塙643	縄文時代
646	51	S42-E12	長方形183×110	B25	b	<土塙626・627	中世以降
647		S36-E12	円形68×66	C8	b	>P298・土塙648	中世以降
648		S36-E12	方形106×72	E20	b	<土塙647	中世以降
649	34	S36-E6	円形139×(120)	C19	b	<土塙650・651	中世以降
650		S36-E6	円形90×75	C12	b	>土塙649・651	中世以降
651		S36-E6	楕円形(86)×75	B10	b	<土塙650・652	中世以降
652		S36-E6	隅丸方形(121)×97	E14	b	<土塙653, >土塙651	中世以降
653		S36-E6	楕円形86×62	C14	b	>土塙652	中世以降
654	30	S36-E6	隅丸方形99×83	B18	b	>土塙655	中世以降
655	42	S36-E6	楕円形97×76	F18	b	<土塙654	中世以降
656	44	S36-EW0	円形130×112	B13	b		中世以降
657	33	S36-EW0	隅丸方形142×111	A44	b		中世以降
658		S36-E6	隅丸方形184×105	B48	b	>P293・294・295, <土塙660	中世以降
659	40	S36-E6	方形87×65	B16	b		中世以降
660		S36-E6	隅丸方形69×114	B14	b	<P292, >土塙658	中世以降
661	35	S36-E6	円形82×61	B24	b	>土塙662	中世以降

番号	種別	位置	平面形 数値(cm)	断面形 数値(cm)	覆土の 特徴	切り合い関係 >…は切る <…は切られる	備考
662	29	S36-E 6	方形194×136	B13	b	<土壌661	中世以降
663		S36-E12	方形(118)×98	B30	b	<土壌623・664・665	中世以降
664		S36-E12	円形65×47	25		<土壌665, >土壌663	
665		S36-E12	円形97×97	B40	b	>土壌664・663・666	中世以降
666		S36-E12	隅丸方形108×62	B28	b	<土壌665, >土壌667	中世以降
667	38	S36-E12	方形231×193	B27	b	<土壌666, >土壌625・668	中世以降
668		S42-E12	円形100×(55)	C16	b	<土壌667・678	中世以降
669		S42-EW0	円形62×62	B38	a		縄文時代
670		S42-EW0	円形90×80	A30	b	>24位	中世以降
671		S42-EW0	隅丸方形92×70	C4	c		深井の麓か
672	43	S42-EW0	方形184×171	B25	b		中世以降
673		S48-EW0	円形87×78	B16	b	>24位	中世以降
674		S48-EW0	方形140×94	B20	b	>土壌675・767・P281	中世以降
675		S48-EW0	方形(71)×66	B14	b	<土壌674・P281	中世以降
676		S42-W 6	楕円形170×98	B14	b	<P275・P271, >土壌781	中世以降
677		S42-W 6	円形85×61	E18	a	>P274, P273と接する	縄文時代
678		S42-E12	円形162×127	E20	b	>土壌668	中世以降
679		S42-E12	円形137×96	E22	a	>土壌643	縄文時代?
680		S42-E12	円形163×117	B24	b		中世以降
681	41	S42-E12	方形108×80	B16	b		中世以降
682	38	S42-E 6	隅丸方形207×(178)	B36	b	<土壌683・684, >土壌687	中世以降
683		S42-E 6	楕円形179×123	28	b	>土壌682・687	中世以降
684	42	S42-E 6	方形189×(144)	A30	b	>土壌682・687, <土壌685・686	中世以降
685	40	S42-E 6	円形188×150	B45	b	>土壌684・686・687	中世以降
686	30	S42-E 6	方形186×(136)	B44	b	>土壌684・687, <土壌685・689・696	中世以降
687		S42-E 6	方形(336×74)	B50	b	>土壌771, <土壌682・683・684・686・683・688・689	中世以降
688	38	S42-E 6	隅丸方形165×118	B40	b	>土壌687・771・690・24位, <土壌689, 土壌691と接する	中世以降
689	33	S42-E 6	円形102×96	B42	a	>土壌688・687・686・690	縄文時代?
690		S48-E 6	方形(249×215)	B40	b	<土壌689・688・691, <土壌695	中世以降
691	42	S48-E 6	方形148×125	B35	b	>土壌690・24位, <P288, 土壌688と接する	中世以降
692		S48-E12	円形121×104	B10	a		縄文時代?
693		S48-E12	円形72×49	C16	a		縄文時代
694		S48-E 6	円形85×59	B7	a		縄文時代
695		S48-E 6	方形298×(185)	40		<土壌690・P288, >土壌697, 区域外へ 広がる	
696		S42-E12	円形71×64	B16	a	>土壌686	縄文時代?
697		S48-E 6	方形(114×107)	B20	b	<土壌695, 区域外にかかる	中世以降
698		S48-E 6	円形77×55	C5	b		中世以降
699		S48-EW0	方形90×(74)	E16	b	<土壌700	中世以降
700		S48-EW0	楕円形210×137	C14	b	>土壌699・63位, <土壌701	中世以降
701		S48-EW0	隅丸方形206×127	B20		<土壌700, >土壌703	
702	50	S48-EW0	方形137×175	39		<土壌703	
703	50	S48-EW0	方形191×188	B40	b	>土壌702	中世以降
704	31	S36-EW0	円形75×64	B23	b	>土壌706	中世以降
705	47	S36-EW0	方形104×103	B25	b	<土壌705	中世以降

番号	掲載区	位置	平面形 規模(cm)	断面形 尺目(cm)	覆土の 特徴	切り合い関係 >…は切る <…は切られる	備考
706		S36-EW0	方形77×130	B48	b	<土壇707・717, 区域外にかかる	中世以降
707	38	S36-EW0	方形107×98	A45	b	>土壇706	中世以降
708	50	S36-EW0	方形78×161	B32	b	>土壇718-717	中世以降
709	46	S36-W6	長方形(229×168)	B32	b	<土壇711・710・716, 区域外にかかる	中世以降
710		S36-W6	円形115×(68)	B10	b	<土壇711・712, 区域外にかかる	中世以降
711	41	S36-W6	方形152×82	B42	b	>土壇712・709・710, <土壇715	中世以降
712	41	S36-W6	方形(121×65)	B34	b	<土壇711・715, >土壇710, P255に接する	中世以降
713		S36-W6	方形(460×335)	B42	b	<土壇714・721・722・726, 区域外にかかる	中世以降
714	46	S36-W6	長方形196×83	B40	b	>土壇713	中世以降
715	50	S36-W6	方形215×206	B30	h	<土壇730, >土壇711・712・719	中世以降
716		S36-EW0	円形115×97	B20	b	>土壇709	中世以降
717		S36-EW0	方形93×(64)	E12	b	<土壇708, >土壇706	中世以降
718	50	S36-EW0	方形170×(168)	B34	b	<土壇708-719	中世以降
719		S36-W6	円形117×(72)	B16	b	<土壇715, >土壇718	中世以降
720	50	S36-W6	方形167×124	A45	b	>土壇715	中世以降
721	48	S36-W6	方形103×83	B23	b	>土壇713・722	中世以降
722	45	S36-W6	隅丸方形134×119	B39	b	<土壇721, >土壇713	中世以降
723		S54-EW0	方形(325)×214	23		<土壇745・777-755・P265, 区域外にかかる	
724	46	S42-W6	方形147×128	B44	b	<土壇725・P256, >P268	中世以降
725	36	S42-W6	円形75×56	C44	b	>土壇724	中世以降
726	52	S42-W6	方形276×(125)	B52	b	>土壇713, 区域外にかかる	中世以降
727	46	S36-EW0	円形120×104	C30	a	<P259・P266・P262	縄文時代
728		S36-EW0	楕円形107×80	B20	a		縄文時代
729		S48-EW0	隅丸方形112×102	B25	b		中世以降
730		S48-W6	円形113×92	F22	a	<P278	縄文時代
731		S42-W6	隅丸方形(79)×75	B22	b	<土壇732	中世以降
732	41	S48-W6	方形221×(121)	B42	b	>土壇731・785, 区域外にかかる	中世以降
733	31	S48-W6	円形99×71	B39	b	>土壇785	中世以降
734	48	S48-W6	隅丸方形107×95	B40	h	>土壇785	中世以降
735		S48-W6	楕円形134×100	C18	b		中世以降
736		S48-EW0	隅丸方形133×126	10		>土壇737	
737		S48-EW0	隅丸方形177×(113)			<土壇736	
738	49	S48-EW0	方形171×179	B27	b	>土壇780-740	中世以降
739		S48-W6	方形273×226	B36	b	>土壇742・750-760, <土壇763	中世以降
740		S48-EW0	方形166×(93)	E56	b	<土壇738-780-765-741, >土壇742	中世以降
741	43	S54-EW0	方形223×191	B4	a	>土壇740-742	縄文時代?
742		S48-EW0	楕円形(117)×91	B44	b	<土壇739-741-740	中世以降
743		S54-EW0	円形67×60	C16	b		中世以降
744	45	S54-E6	方形123×89	B42	b	>土壇782, 区域外にかかる	中世以降
745	46	S54-EW0	方形190×173	B46	b	>土壇723	中世以降
746		S54-EW0	方形207×143	B29	b	>土壇747・779-777	中世以降
747		S54-W6	方形216×200	B20	b	<土壇746・745-779-748	中世以降
748		S54-W6	円形91×73	B16	b	>土壇747	中世以降
749		S54-W6	方形108×(106)	A38	b	>土壇747・750, <土壇775	中世以降
750		S54-W6	方形(143)×67	B30	b	<土壇749・773	中世以降

番号	掲載図	位 置	平面形 規模 (cm)	断面形 厚さ (cm) : 特徴	覆土の 特徴	切り合い関係 >…は切る <…は切られる	備 考
751		S 60-W 6	方形(184)×168	B24	b	<土壌732・P282	中世以降
752		S 60-W 6	長方形175×128	B12	b	<P282, >土壌751	中世以降
753		S 60-W 6	不整形:74×68	B18	b	<土壌783	中世以降
754		S 60-E W0	方形127×99	F14	a	>土壌778	縄文時代?
755		S 58-E W0	円形139×137	B20	a	>土壌723	縄文時代?
756	43	S 60-E 6	方形94×(70)	A96	b	区域外にかかる	中世以降
757		S 60-E W0	円形120×92	B28	a	>25位・26位	縄文時代?
758		S 60-W 6	方砂(132×95)	59		<27位	
759		S 48-W 6	長方形(163)×105	B30	b	<土壌739, >土壌760-761	中世以降
760	52	S 54-W 6	方形245×230	B32	b	<土壌759-761	中世以降
761		S 48-W 6	円形58×(30)	B24	b	<土壌739, >土壌760	中世以降
762		S 42-W 6	円形55×(41)	C22		<P272, >土壌781	
763		S 54-W 6	円形88×70	B14	b	>土壌739	中世以降
764		S 54-W 6	円形(164×46)	B30	b	<土壌786	中世以降
765		S 48-E W0	円形53×48	11		>土壌740	
767		S 48-E W0	円形(86×49)	C 4		<土壌674	
768		S 48-E 18	円形79×67	C18	a	>土壌636	縄文時代?
769		S 48-E 24	円形87×70	C12	b		中世以降
770		S 42-E 18	楕円形98×56	C 6	a		縄文時代
771		S 42-E 6	方形(229×39)	27		<土壌687-688, >24位	
772		S 36-E 18	円形77×70	B22	b	>土壌787・23位	中世以降
773		S 36-E 12	楕円形115×70	C12	b	>土壌787・23位	中世以降
774		S 36-E 2	円形85×67	B12	b	>土壌621・23位	中世以降
775	51	S 54-W 6	方形(270)×248	A32	b	>土壌784・27位・28位	中世以降
776		S 60-W 6	円形(89)×80	C18		<25位	
777	52	S 54-E W0	方形301×217	B42	a	<土壌746・P283・P285, >土壌723・779-783	縄文時代?
778		S 60-E W0	不整方形160×125	F22	b	<土壌754	中世以降
779		S 54-E W0	方形148×(70)	19		<土壌777-746・P283, >土壌747	
780	49	S 48-E W0	方形170×(23)	15		<土壌738, >740	
781		S 42-W 6	円形200×(96)	F 8		<土壌676-762・P272・P272, >P270	
782	42	S 54-E 6	円形(83)×56	B50	b	<土壌744, 区域外にかかる	中世以降
783		S 60-W 6	方形(201)×160	22		<27位	
784	51	S 54-W 6	隅丸方形185×130	18		<土壌775-28位	
785	49	S 48-W 6	方形326×(247)	B40	b	<土壌733-734-732, 区域外にかかる	中世以降
786	45	S 54-W 6	方形206×(127)	A36	b	>土壌764, 区域外にかかる	中世以降
787	40	S 36-W18	小整形223×202	B31	b	<土壌678-772-820, >23位	中世以降
788	36	S 36-W18	楕円形100×48	B22	b	>23位	中世以降
789		S 36-W18	円形73×45	C38	b	>23位	中世以降
792	36	N12-W18	楕円形155×91	B22	a	>土壌797-814	縄文時代?
793	37	N12-W24	楕円形218×105	C24	b		中世以降
794		N12-W24	円形97×80	B20	a	<土壌795	縄文時代
795	30	N12-W24	円形94×70	C16	a	>土壌794・597・P241	縄文時代
796		N12-W24	円形65×64	12	a		縄文時代
797		N12-W18	楕円形94×70	19		<土壌792	!
798		N12-W18	円形65×53	21			縄文時代

番号	掲載期	位置	平面形 規模(cm)	断面形 厚さ(cm)	夏土の 特徴	切り合い関係 >…は切る <…は切られる	備考
799		N12-W24	円形63×59	C16	a		縄文時代
800	32	N24-W24	円形77×74	B18	a	<土溝803, 区域外にかかる	縄文時代
801	32	N18-W24	隅丸方形105×97	B27	a		縄文時代
802		N18-W24	楕円形121×70	C14	b	>土溝816	中世以降
803	32	N24-W24	円形78×75	B21	a	>土溝800	縄文時代
804	32	N24-W18	円形65×55	C14	a	<P207	縄文時代
805		N24-W24	円形105×98	C18	a	>7号墳南端	古墳時代?
806	30	N24-EW0	円形79×69	E26	a		縄文時代?
808		N30-EW0	方形93×71	C8	a	>土溝809	縄文時代?
809		N24-EW0	円形131×103	14		<土溝808	
810	41	N24-EW0	楕円形148×66	F46	a	>溝14	古墳時代前期
811		N24-E6	楕円形(93×50)	B36	a	区域外にかかる	縄文時代?
812	31	N24-EW0	楕円形113×90	B41	a	>溝14	古墳時代前期
813		N24-W12	円形58×50	C10	a		縄文時代
814		N12-W18	方形289×220	F16		<土溝792, 区域外にかかる	
815		N6-W24	円形98×90	24			縄文時代
816		N18-W24	円形97×(84)	E14	a	<土溝802, >P2:3	縄文時代?
817		N24-W18	円形92×89		a	<2:住	縄文時代?
818		S90-W18	楕円形226×59	C25			
841		S90-W18	円形84×73	B12	c		漆棺の跡か
842		S90-W18	円形65×62	C9	c		漆棺の跡か
843		S90-W12	楕円形167×100	E23	c	>溝22	漆棺の跡か
844		S102-W36	隅丸方形100×98	B31	a or b		
845		S114-W30	長方形297×130	E12	c		漆棺の跡か
846		S144-W30	楕円形175×113	F12	c		漆棺の跡か
847		S108-W24	円形62×62	C4	c	<P327	漆棺の跡か
848		S96-W36	円形66×55	C15	a		縄文時代?
851		S60-W48	円形65×54	B5	b		漆道にかかる
854	40	S54-W54	円形103×90	B23	a		縄文時代
855		S54-W54	円形81×80	B16	a		縄文時代
856	30	S66-W54	楕円形106×72	F20	a		縄文時代?
857	33	S60-W54	円形99×88	B34	a		縄文時代
858	35	S54-W60	円形130×(93)	D66	a	区域外にかかる	縄文時代
859	31	S60-W54	円形78×71	B20	a		縄文時代
860		S66-W48	円形64×60	A18	a		縄文時代
861		S66-W54	円形61×47	E10	b		縄文時代
862	39	S54-W60	円形98×81	B40	a		縄文時代
863	37	S66-W54	円形65×57	F23	a		縄文時代
864		S66-W54	円形60×44	B54	b		縄文時代
865	35	S66-W60	楕円形109×71	B28	a		縄文時代
866	39	S54-W60	隅丸方形147×115	B42	a		縄文時代
867	33	S60-W60	円形72×60	B24	a		縄文時代
868	33	S66-W60	円形91×50	B30	a		縄文時代
869	31	S66-W60	円形58×58	B28	a		縄文時代?
870		S66-W60	方形187×168	E76	b		中世以降

番号	種類	位置	平面形 規模(cm)	断面形 高さ(cm)	土の 特徴	切り合い関係 >は切る <は切られる	備考
871	31	S 54-W66	円形70×63	B 37	a		縄文時代
872	31	S 54-W86	円形73×61	B 25	a	>土層873	古墳時代前期
873	42	S 69-W66	隅丸方形267×167	B 78		<土層872・874, >44住	古墳時代前期
874		S 69-W66	円形63×44	38		>土層873	古墳時代前期
875		S 69-W66	円形70×65	E 66	a		縄文時代
876		S 69-W66	円形115×100	19			
877		S 69-W54	円形65×52	B 36		> P 339	縄文時代
878		S 66-W72	円形74×60	24			縄文時代
879		S 72-W78	円形37×36	10			縄文時代
880		S 72-W78	円形78×61	B 12	a	>土層884	縄文時代?
881		S 72-W78	円形86×80	B 60	a	>土層884・883・887, < P 335	縄文時代
882		S 72-W78	円形84×47	B 22	a	>土層883, 区域外にかかる	縄文時代
883		S 72-W78	台形141×(125)	B 16		<土層881・887・882, 区域外にかかる	縄文時代
884		S 72-W78	不整形76×(66)	15		<土層880・881・P 335	縄文時代
885	30	S 72-W78	台形133×(84)	B 22	b	区域外にかかる	縄文時代
887		S 72-W78	楕円形93×73	F 45		<土層881, >土層883	縄文時代
890	33	S 69-W78	楕円形(132)×116	B 22	j	<土層958, 区域外にかかる	中世以降
906		S 48-W30	円形77×53				古墳時代前期
932		S 48-W24	楕円形103×75	14			縄文時代
933	43	S 48-W24	方形114×90	B 17	b	>土層934	中世以降
934		S 48-W24	方形101×(43)	B 10	a	<土層933	縄文時代?
935		S 48-W24	円形103×88	59			縄文時代
936	43	S 48-W24	楕円形209×76	B 12	a		縄文時代?
937		S 48-W24	楕円形79×42	10	a		縄文時代?
938	43	S 48-W24	長方形121×74	B 20	a		縄文時代?
939		S 48-W24	円形89×89	F 38	a		縄文時代
940	34	S 48-W24	円形111×95	B 36	a		縄文時代
941		S 48-W24	円形62×54	15			縄文時代
942		S 48-W30	円形72×69	12			
943		S 48-W18	長方形103×70	18		>土層944	
944		S 48-W18	方形(164)×130	42		<土層943, 区域外にかかる	
945		S 54-W78	長方形250×145	41			
946		S 48-W30	楕円形100×75	C 14	a		古墳時代前期
947		S 54-W24	円形72×68	F 58		>47住	
948	33	S 54-W24	円形94×76	F 53	a	>土層950	縄文時代
949		S 54-W24	円形66×55	C 42	a	>土層950	縄文時代
950		S 54-W24	隅丸方形140×130	B 28	a	<土層948・949, >土層951	縄文時代
951		S 54-W24	円形51×(30)	F 12		<土層950	縄文時代
952	48	S 54-W74	長方形122×148	A 49	a		縄文時代?
953		S 54-W18	円形69×63	10		>土層954	縄文時代
954		S 54-W18	円形68×60	7		<土層953	縄文時代
955		S 54-W18	隅丸方形154×116	19		>土層956	縄文時代
956		S 54-W18	方形(106)×(130)	45		<土層955, >土層957, 区域外にかかる	縄文時代
957		S 54-W18	方形(73)×(35)	7		<土層956, 区域外にかかる	縄文時代
958	30	S 54-W18	隅丸方形112×95	A 44	a	<土層980	縄文時代

5. 溝

今回の調査で確認された溝は、8区1基、9区2基、10区2基、12区1基、14区6基の計12基である。調査地南側の9・14区に集中が見られるが、9区の溝4以外は他の溝とは区別されるものである。次に代表的な溝址について簡単に触れたい。

溝2 8区北側S5～6、W24～26に位置し、東側は調査区域外にかかる。幅は最大120cm、深さは20cmを測り、底面はほぼ平坦であった。断面形は台形を呈し、覆土の褐色土には焼土粒が混入していたが砂粒、小礫等は確認されなかった。遺物は覆土下層に古墳時代前期の土師器片少量が見られた(第76図)。本溝址の所属時期もそこに求めたい。

溝4 9区南端S81～82、W15～29に位置し、第2・5号住居址を貼り、溝5に貼られる。長さは1414cmで、東西に延び、最大幅で74cmを測る。ほぼ中央で直角に枝分かれして南側に延びてゆくと調査区域外にかかり、全形は知り得ない。底面の傾斜は東西方向には認められないが、南へ延びる部分では自然地形に沿って北から南へと傾斜している。断面形は台形を呈し、暗褐色～黒褐色土が堆積していた。覆土には砂、小礫等は混入していなかった。遺物は古墳時代前期に比定される土師器片(第76図)等が少量出土しており、本址の時期もそこに求める。

溝7 10区南端S30～34、W1～3に位置する。南北に延びる長さは380cmで、最大幅は74cmを測る。断面は台形を呈し覆土には暗褐色土が堆積していたが水を伴っていた様相は窺えなかった。底面の傾斜は南から北へ傾いているが自然地形は僅かだが南に向かって傾斜を持つ。本址からは遺物の出土はなく所属時期は不明である。

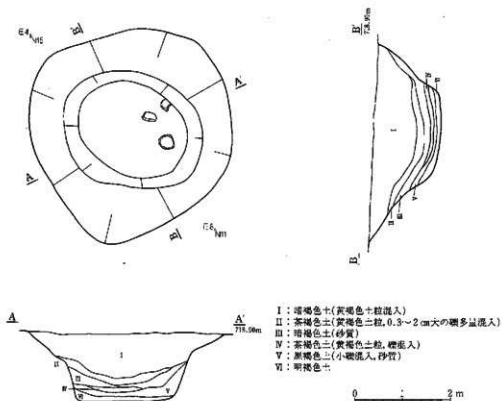
溝13 12区北側N20～26、W14～16に位置し、南側は区域外にかかっている。長さは510cm、幅は最大で150cmを測る。東壁はほぼ直に掘り込まれているが、西壁は2段掘りになっている。覆土の暗褐色土、黒褐色土は自然堆積の様相を呈し、また水を伴っていた状況は認められなかった。底面には起伏はなく、平坦であった。遺物は少ないが、底面より古墳時代前期に比定される土師器が出土しており本溝址の所属時期もそこに求めたい。

溝19 14区S94～113、W20～40に位置する。今回の調査では最大の規模をもつ溝址で、長さ2610cm、最大幅283cmを測り、自然地形の傾斜に沿って北東への方向を持つ。昨年度刊行した向畑遺跡Iの池形、地質の節で詳しく記述されている様に暗渠排水路と考えられるものである。

以上、代表的なものについて概観してみたが、多様なあり方を示していた。これらの所属時期は古墳時代から近代に亘るものである。その中で溝7は中世以降の土壌集中区内にあり、それらとの切り合い関係もないことから、あるいは何らかの関連も考えられるが推測の域を脱し得ない。

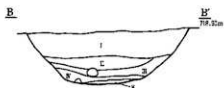
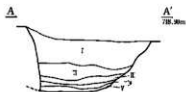
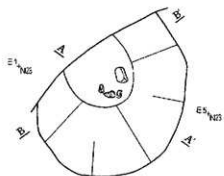
6. 竪穴状遺構

今回の調査で3基確認され、いずれも11区北部にあり、竪2、竪4は調査区域外にかかる。3基とも非常に酷似しており、ここでは竪3をとりあげて報告したい。N10～E16、E4～E9に位置し直径4mの不整形形を呈する。壁高は1.2mとかなり深く、すり鉢状に二段に掘り込まれており、壁、底面ともに二次堆積砂質ロームで、底面に関しては砂質が強く軟質であった。覆土から底面にかけては10～30cm程の大きさの礫がみられた。出土遺物としては、覆土中に古墳時代前期の土器、底面に平安時代の土器片が少々あった。よって竪3は平安時代の遺構と判明できた。竪2、竪3も、この土器片を根拠に平安時代に限られたものと断定したい。



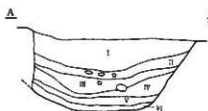
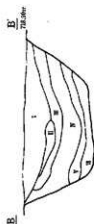
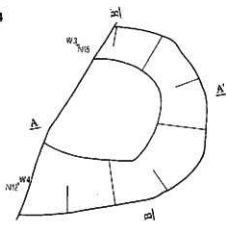
第53図 竪穴状遺構3

竪穴状遺構 2



- I : 黄褐色土(ローム粒, 硬多量混入)
- II : 黒褐色土(硬少量混入)
- III : 暗褐色土
- IV : 黒褐色土
- V : 黒褐色土(ローム粒混入)

竪穴状遺構 4



- I : 暗褐色土(30cm大の礫混入)
- II : 暗褐色土(5~7.0cm大の礫混入)
- III : 暗黄褐色土
- IV : 黒褐色土(3~8cm大の礫混入)
- V : 暗褐色土(炭化物, 0.3~0.5cm大の焼土塊混入, 粘質)
- VI : 明褐色土(炭化物, 焼土, 1cm大のローム塊混入)

0 1 2 m

第34図 竪穴状遺構 2・4

第3節 遺物

1 土器・陶磁器

(1) 縄文時代の土器 (第55～57図)

今回の調査において出土した縄文土器は、遺構に帰属するものも含め、その大半が小破片であった。従って実測図および拓影により出来るだけ多くを図示するよう努めたが、その数は全体の半数程にとどまっている。以下、時期毎に群別、類別を行う。

第1群 早期末～前期初頭の土器

23点を図示した。遺構に伴うものは見られない。以下の2類に分類される。

第1類 (17～19) 胎土に多量の繊維を含み絡縄体圧痕の付されるもので、早期末に位置付けられる。いずれも口縁部の破片で、若干外反気球に開く器形を呈する。17は厚唇する口唇部に直交して、口縁部外面には横位に右巻きの原体を押圧する。18・19は口縁部断面に横走する隆帯を有する。隆帯上には直交して絡縄体を押圧するが、磨滅により原体は不明である。さらに口唇部にも押圧を行っており、19は深い圧痕を残す。これらは胎土に繊維を含む他、石英・長石粒が顕著に観察される。

第2類 (21～33) 前期初頭に含まれ、繊維を含んだ胎土、縄文を特徴とする。24は唯一口縁部の破片で、端部は薄くおさめが被打っている。20～26は外面に縄文の施文が観察される。器面荒れにより原体の判読は難しいが、20はR ℓ 、21はRL、22はRL(直前段多糸)をそれぞれ横位に施文し、また23・24はLRを縦位に回転するようである。この型、27～31は内外又は外面に擦痕が観察される。

第2群 前期中葉の土器

副部片2点を図示した。両者胎土に砂粒を含むが、繊維の混入は認められない。34はLR(前々段多糸)の原体を横位に、35はLR、RL原体を横位に施文し羽状縄文としている。

第3群 中期初頭の土器

本群は出土した縄文土器の7割以上を占めている。実測図16点、拓影図129点を呈示したが、拓影図の大半は縄文時代以外の遺構ないしは検出面の出土である。尚縄文中期初頭に属し、実測図・拓影図を掲載し得た遺構は11住、土壌10・132・226・230・294・295・309・320・345・347・857・859・860・866・885・887である。そのうち11住・土壌10等からは復原可能な個体がまとまって出土している。

呈示資料は全体に小破片が多く、全形が窺い知れるものは少ない。従って全体を一括して、口縁部文様帯のあり方により分類を行った。器形はほぼ深鉢に限られる。

第1類 地文に細縄文や縄文を多用する、所謂「細縄文系」土器を一括する。本類は量的に第3群の主体を占め、文様帯のあり方により以下に細分される。

A (10・61・79・89・90・94・99・101・102・104・124・146・168)

口縁部の地文に主として細線文が用いられる一群である。器形は1段ないし2段に膨らむキャリパー形の口縁部に、直ないしはやや裾の張る胴部が取り付け（2段に膨らむキャリパー形の場合、下段の膨らみはむしろ胴部といえる）ものと、円筒形を呈するものが存在する。文様帯は口縁部文様帯と胴上部文様帯に分かれ、口縁部文様帯はさらに幅の狭い上段と、下段により構成される。

上段は縦位の細線文（61・99）の他、格子状に細線を付すもの（101・102）、無文のもの（104）、縄文を付すもの（10）が見られる。上下段の区画は普通1～2条の平行沈線によるが、101・102は結紮平行沈線で行う。下段は細線文を施した後平行沈線や沈線による施文を行うもの（61・99・104・124）、瓦状押引文（ないしは竹管腹部による刺突文）を充填するもの（10）がみられる。前者には三角印刻文が伴う場合が多いが、本遺跡では出土していない。尚104・124は推定4単位の突起を右している。104は突起上にも細線文を付す。

胴上部文様帯も横位に展開される。口縁部との区画は平行沈線により行い、橋状把手が4単位付されるようである。10は縄文を施す隆帯で区画をしている。区画線下にはY字状文（137）の他、平行沈線による構図（10・89）も見られる。胴部の地文は縦位の帯縄文で、一帯ずつやや間隔をおいて施す。両端に結節をもつ単節縄文が多いが、94・146の様に羽状縄文も存在する。89は細線文を地文としており、また79・168は細線文による格子目文と三角印刻文が施される。

B（1・2・4・7・13・40～42・48～55・58・59・65・67・68・76～78・80～88・91・93・98・100・103・105～120・123・125～136・138～139）

口縁部の地文が縄文となる一群である。器形はAと同様である。文様帯もAと同様口縁部2段、胴上部1段であるが、口縁部下段は41・81・113を除き無文が圧倒的に多く、本類の特徴として挙げられる。上段の縄文は横位に施す。上下段の分割は1～2条の平行沈線ないし単沈線によるが、下ないし上に接して刻目を入れるものが多い（1・2・41・67・84・98・100・105）。明瞭な三角印刻文も少数存在している（40・108）。この他、口唇部に刻目を施すもの（67・68・84・103・106・107）、小突起を付すもの（83・105・112）、爪形文を付すもの（4・120）がある。口縁部下段に少数見られる地文は瓦状押引文（41）、平行沈線による山形、円、菱形等の構図（81・113・126）等で、他に橋状把手や突起を施すものも多く見られる（2・4・103）。

口縁部、胴部の区画は隆帯によるものが多い。隆帯上には縄文（1・42・50・54・105・126）の他、三角印刻文（4）、細線文（53）が施され、また橋状把手（53・54）も見られる。胴部文様帯はAと同様Y字状文をもつもの（3・52・53・76・80）や、他にY字状文の変化したと考えられる弧線文（4・138・139）、平行沈線や単沈線により横帯区画を行い、玉抱き三叉文（1・135・136）、U字形・菱形・円等のモチーフを縦位に連ねたもの（48・73・78）、弧線（54・55）等を描出するものが見られる。105は鍵状に平行沈線を引く。又、6はミニチュア上器であるが、胴部に玉抱き三叉文ないしは円形・菱形のモチーフを横位に連続させている。尚胴部は地文としてA同様縦位の縄文を施すが、縄文の間隔が狭く、接したり重なるものが見られる。

C (14・92・121・142・143)

4片のみ抽出された。全形は不明であるが、器形はキャリバー形、口縁部のやや外反する円筒形が存在する。文様帯は、口縁部上段はBと同様、横位の縄文を施し、口縁部下段は巾広の単沈線による弧線文が横位に展開される。胴部は隆帯又は沈線により4単位に縦分割される。各区画は無文が多いようである。地文は口縁部横位、胴部縦位に行うが、雑なものが多く、施文されないものも見られる。

121は波状口縁となるもので、単沈線により波状部に三角形の区画を行い、下抱き三叉文を施す。地文は省略されている。143は胴部の懸垂隆帯で、上端がY字状となる。14は懸垂隆帯に沿って単沈線、印刻により三角形の構図を描く。142は懸垂文に沿って刻目を施している。

第2類 主として平行沈線文により加飾される一群で、縄文は基本的に用いられない。量的には第1類より少ない。以下のように細分されるが、細片が多いため分別困難なものが多い。

A (11・43~45・47・56・57・60・62・63・66・69~72・74・75・95・140・141・149~167)

大きく外開する頸部に、くの字形に内折する口縁部が取り付く器形を基本とする。胴部は筒状となる。口縁部の内折部分が省略され、キャリバー状になるものも見られる(43・44・156)。

文様帯は口縁部・頸部・胴部の3段に分けられ、横位の構図を展開する。口縁部文様帯はさらに上(端部)下段に分かれる。上段は爪形文(44・45・150・151・154)を施すものが多く、無文となるもの(43・69・128・156)は少数である。下段は平行沈線により格子目文(45・47・62・149~153)、結節平行沈線文(3・294・295・154)を施す。

頸部文様帯は口縁部および胴部文様帯と平行沈線により分離されるが、隆帯によるものが少数ある(47・151・155)。文様帯内は縦位の平行沈線で満たされるが、密に行うもの(151・157・158)と間隔をおくもの(3・44・57・71・149・156)の2者が存在する。後者は地文に縄文が施される比率が高い。

胴部文様帯は多段になるものと、1~2段のものがあるが、細片が多く識別できない。各段には平行沈線により格子目文(5・56・137・160~162)、斜線文(163)、瓦状押引文ないし結節平行沈線文(57・66・75・165~167)が施され、最下段には縦位の施文を行うものも見られる(5・11・60・140・141)。縦位施文は平行沈線により山形文、直線文が描かれ、5は胴上位近くまで占めている。

B (96・122)

Aの規格に合致しない2点を挙げる。96は口縁部破片で、キャリバー形の口頸部である。平行沈線により逆U字形の区画をし、格子目文で埋めている。122は頸部に縦位の平行沈線文を充填するが、口縁部には横位に5条の角状押引文を施している。

第3類 第1類と第2類の特徴を兼ね備える、折衷された一群である。折衷は文様帯の交換、器形の交換、地文の交換によりなされている。今回呈示した資料では、第1類Bと第2類Aの折衷形態が見られる。(3・5・137)

3は器形および口縁部下段～頸部の文様帯は第2類Aの特徴を示すが、地文として縄文を施し、胴上部にY字状文を施文する点は第1類Bの特徴と言える。5は口縁部の屈折が省略されているが、基本的には第2類Aの器形として捉えられる。第2類Aと異なる点は、地文および口頸部の刻目を付した弧線文帯であり、これらは第1類Bの要素である。

その他、地文として縄文を施している第2類土器(11・44・57・60・71・140・141・149・156)も折衷形態とすることが出来る。

第4類 外来系の要素をもつものである。46は口縁部に突起を有し、肩部側面および横走隆帯上に爪形文を施す。胎土に白色粒子を多量に含み、器肉が薄く、硬い焼きである点他と識別される。東海地方の北義CⅠ式に類似するものと捉えられる。147は縦位の木目状燃糸文が観察され、胎土は在地の特徴を示す。北陸地方との関連を示すものである。5は直前段反燃および前々段反燃の縄を用いるようであり、これらも北陸地方等との関連を考えるべきかも知れない。

第4群 中期後葉の土器

土壙14出土の2個体3片を拓影で示した。いずれも唐草文系土器の深鉢で、169・170は同一個体である。169・170は隆帯により頸部に頸帯区画を、胴部には大柄の渦巻文を施文する樽形の深鉢である。区画内は交互刺突で埋め、胴部渦巻文の余白には沈線を充填させる。171は縦位に条線を施した後、沈線により渦巻文を描くものである。

まとめ ここでは縄文土器の主体である第3群土器⁽⁴⁰⁾について簡単にまとめておく。今回中期初頭土器の分類に当たっては、三上徹也氏の研究成果に従った。氏の編年観によれば、本遺跡第3群第1類AはⅠ段階、第1類BはⅡa段階、第1類CはⅡb・c段階、第2類土器はAがⅠ・Ⅱ段階となる。氏はこれら縄文系(第1類)および沈線文系(第2類)の並行関係については、文様要素の共通・類似点、梨久保遺跡での共存関係、折衷土器の3点をもって説明されている。本遺跡では、破片中心の資料ながら11住、土壙10、土壙295からまとめて出土しており、三上氏の編年観と本遺跡資料の適合性について確認しておく。

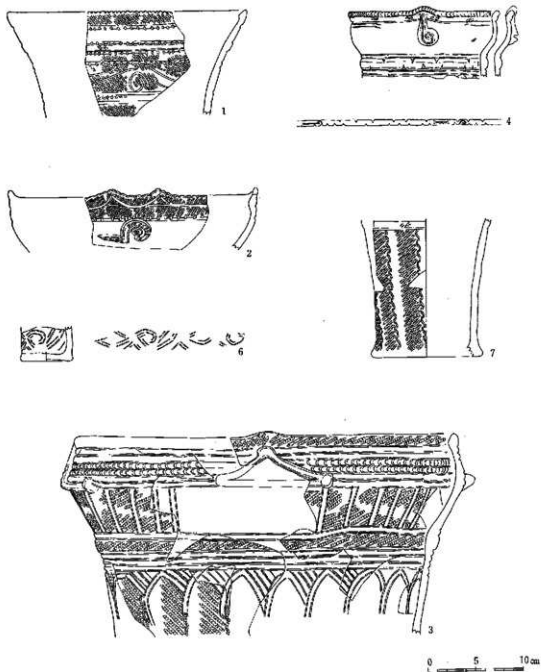
11住1・2等は縄文系2a段階の特徴を備え、3・45は沈線文系Ⅰ～Ⅱa段階の口頸部のあり方を示す。

土壙10 5の胴部は沈線文系Ⅱa段階の特徴を示す。口縁部の弧線文及び刻目のあり方は縄文系Ⅱa段階、共存する4も同様である。

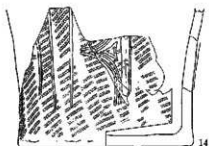
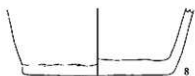
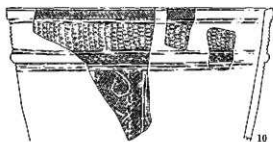
土壙295 縄文系の67はⅡa段階の特徴を良く表し、沈線文系69・71・75はⅡb・cまでは下らない。

以上の伴出関係は、乏しいながらも、三上氏の捉えたⅠ・Ⅱa段階の並行関係と矛盾しない。Ⅱb・c段階については資料が少なく不明である。向畑遺跡出土土器は、上記の遺構も含め、「梨久保式」Ⅱa段階に主体をおくものとまとめられよう。

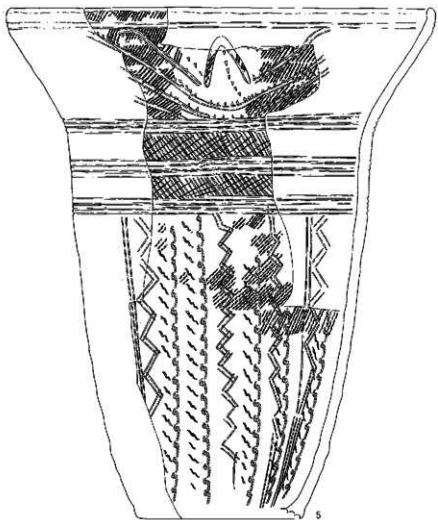
注 三上徹也 1987「梨久保式土器 再考」『集野県埋蔵文化財センター 紀要 1』



第55圖 縄文時代出土土器(1)

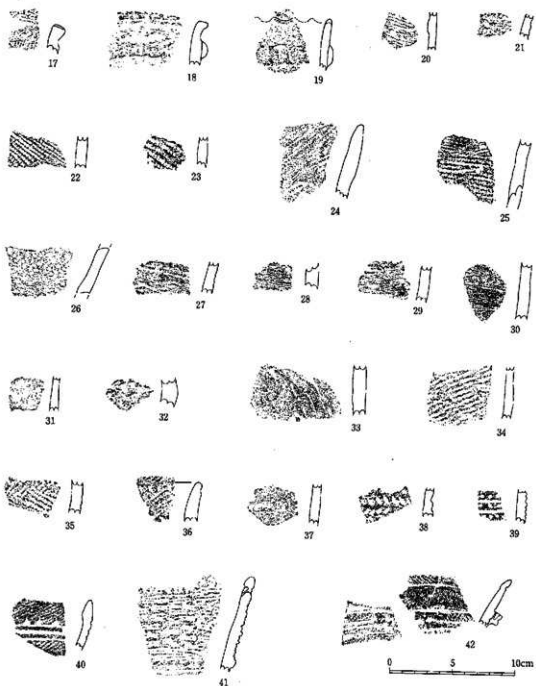


第56圖 縄文時代出土土器(2)

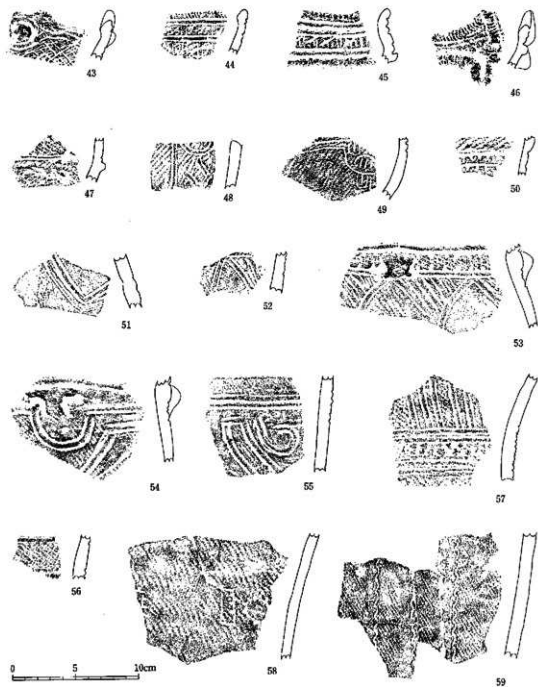


0 5 10cm

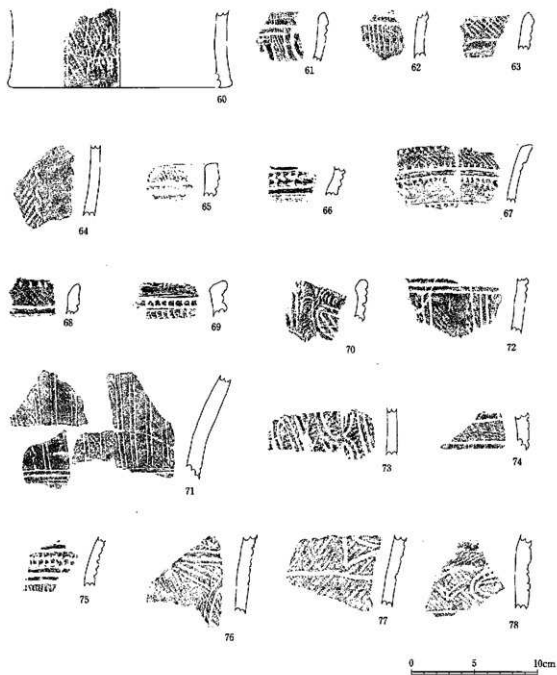
第37圖 縄文時代出土土器(3)



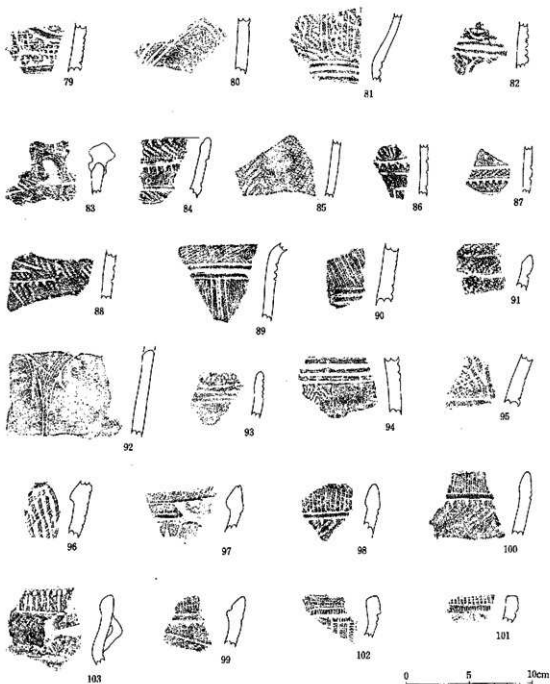
第58圖 縄文時代出土土器拓影(1)



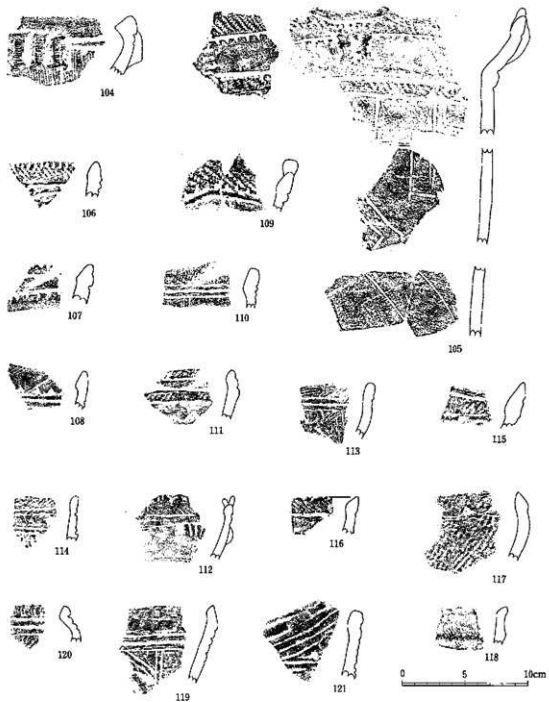
第59圖 縄文時代出土土器拓影(2)



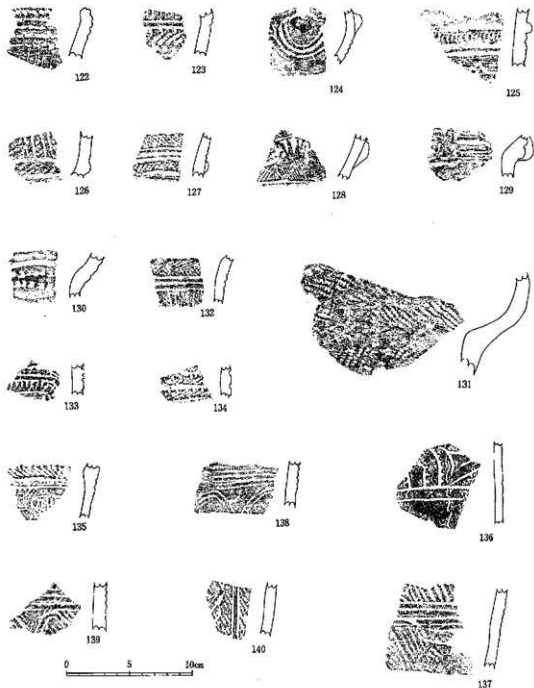
第60圖 縄文時代出土土器拓影(3)



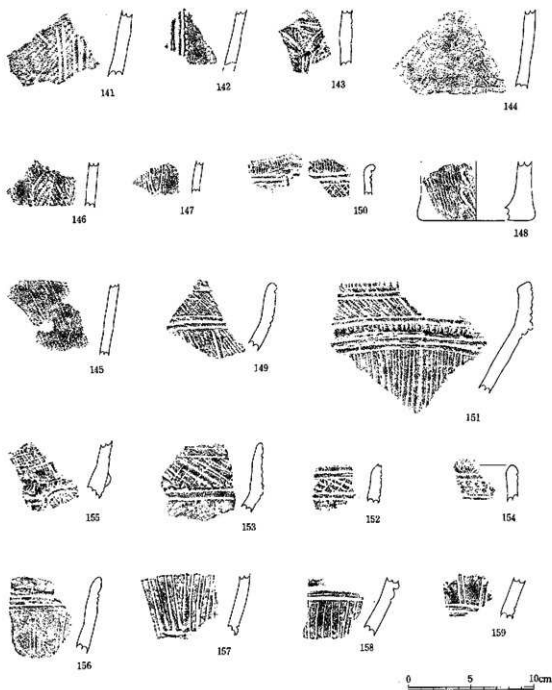
第61圖 縄文時代出土土器拓影(4)



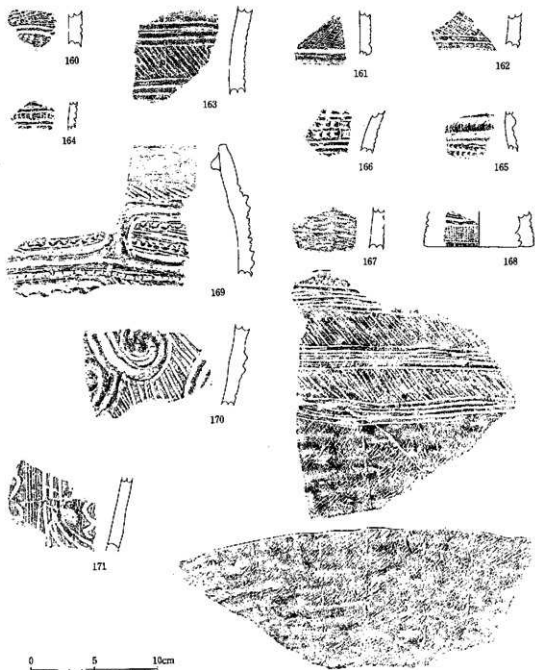
第62図 縄文時代出土土器拓影(5)



第63圖 縄文時代出土土器拓影(6)



第84圖 縄文時代出土土器拓影(7)



第85圖 縄文時代出土土器拓影(8)

(2) 古墳時代の土器

本報告で扱った古墳時代の遺構より出土した土器は、第1次報告⁽⁴⁾に準ずるものである。第1次報告と同様、各遺構から、少量の弥生土器片と数点の須恵器片が認められた他は、土師器が出土している。さらに、その大半は、前期に属するものと考えられる土器群である。ただ、第15号住居より出土した土器群は、前期土器群と横相を異にし、次時期のものと考えられる。

器種は、壺、甕、台付甕、高坏、小形高坏、埴、小型丸底土器、器台、鉢、手捏ね土器があげられる。なかでも甕が多く、高坏がこれに次ぐ。

壺、壺形土器は、完形土器が2点であり、口縁、底部破片がほとんどであった。これらは、器形から、口縁径が小さく、胴に明確な肩部をもち、球形の胴となるもの、広口の口縁となり、肩部が緩やかな器形となるもの(18, 32)の2つに分類される。さらに、前者は、口縁部の形態から、折り返し口縁をもつもの(15)、有段口縁をもつもの(10, 23)、逆ハの字状に開く口縁をもつもの(119)、棒状貼付を施すもの(31)の4つに分類される。広口壺形土器(32)は、在地の櫛描文が施される土器群の器形に類似するものであり、器面全面に磨きが施されることから壺と考えた。本遺跡から数多く出土している輪台状の上げ底をもつ底部破片は、大半が、この形態に属する土器と考えられる(54, 143他)。逆ハの字状に開く口縁をもつものは、胴部が球形となり、器面全面に磨きが施される。16は、この形態に属するものと考えられ、この時期の壺形土器を示す器形となるであろう。31は、222、223と同様、東海地方に采譜をもつ土器群と考えられる。粗雑な作りであるが、口縁部に棒状の貼付を3条で1組として、4ヵ所に付している。この他に、第14、15号住において、弘法山古墳より出土したパレススタイル壺の口縁部と類似した破片が出土している。

甕、台付甕は、出土土器の中で最も数量が多く、器形、口縁部形態、器面調整においていくつか分類が可能であるが、全貌を引き出せる資料は数点に限られる。よって、器形と口縁部形態から分類を行なう。器形よりみると、平底甕と台付甕に分けられる。

平底の甕は、103のごとく、単純口縁をもち、肩部に櫛描波状文を施すものと、184等、数多く破片で出土している叩き甕に分類される。前者は、球形に近い胴部となり、逆ハの字状の口縁部をもつ壺形土器に近い器形となる。調整も、胴下端は削り、他は磨きを施しており、櫛描波状文だけが、在地の采譜をひくものとして残っていると考えられる。後者は、全て口縁部を欠損しているため、口縁部の形状は不明である。叩きは、全て左下がりととなり、叩き目をハケにより潰す調整が加えられている。これらは、畿内系の土器群の流入を示す資料といえる。

台付甕は、口縁部の形状から、単純口縁のもの、「S」字状の口縁をもつものにと分類される。前者は、頸部が巾をもち、緩やかに外反するもの(12, 93, 183)、くの字状に開くもの(8, 113, 43, 148)等に分類される。これらは、器面全面にハケで調整を行ない、口縁部または、口唇部がヨコナデされるものが大半である。小形の甕類は、ほぼこの器形に属すると考えられる。後者については、全様を知る資料はないが、口唇部が緩やかに外反し、胴部に斜位のハケを施すものである

(147)。これらは、東海地方に広く分布する土器であり、系譜は、東海地方に求められよう。

この他に器形は明らかでないが、頸部がくの字状に強く外反し、短かい口縁部となり、口唇部をつまみ上げ、面を作り強いナデを施す上器群がある。これには、41、42、49、100、172が該当し、北陸地方の系譜を引くものと考えられる。

高杯、小形高杯、大半が坏部あるいは胴部のみ出土であり、器種の判別ができない胴部破片も多い。坏部の形態より3種類に分類される。

坏部の底部と口縁部との境界に弱い稜を形成し、口縁部が外上方へ外反するもので、坏部は比較的浅くなる形態。これには、4、118、166が該当する。緻密な磨きに加えられているもので、これらには直線的に広がりをもつ胴部が付くと考えられる。

坏部に明瞭な稜をもち、口縁部が外上方へ強く外反するものには、第15号住居址出土土器が該当する。72、81、82は、放射状に磨かれ口唇部が尖る形態となる。これらには、柱状部にふくらみをもち裾部がハの字状に開く脚部(75)が接合するものと考えられる。

坏部の底部に稜をもち、直立気味に立ち上がった坏部中段より口縁部が強く開く形態のもの(73、149)もある。高杯の形態から後述二者は、中期段階の様相といえよう。

小形高杯は胴部底径が坏部口径より大きなもので、坏部に稜をもち、丸く内弯して立ち上がる形態をもつものである。第1号住居址出土土器がこれに該当する。小形高杯は、畿内庄内式期に分布することが知られており、畿内地方あるいは東海地方の系譜を引くものと考えられる。

埴、小型丸底土器、これらの土器群は完形に近い形で出土したものが多かった。埴形土器は、胴部は球形となり、口縁部は内弯気味に立ち上がるもので、底部は突出せずにやや凹む形態である。13、14は口縁部が短かく全体的に扁平となる。ハケによる調整が加えられている。88、132は、口縁部が長く、調整は磨きが施されている。

小型丸底土器は、いずれも胴部に比して、大きく開く口縁部をもつので、胴部が球形を呈するものに、21、38、55、56がある。この内、38、55、56は、直線的に開く口縁部となり、ハケ調整が残されている。21は器面調整が緻密で口縁部が胴部より狭かい形態となる。134は扁平気味の胴部に短かい口縁部をもつ形態、135は、長い口縁部をもつものである。いずれも磨減により調整は不明である。

鉢、器台、ミニチュア 鉢形土器は、平底の底部が直線的に開く口縁部をもち、逆台形を呈するもの(22)、同形態を取りながらも底部が上げ底状になるもの(36)、半球形の形状となり口縁部が内弯して立ち上がるもの(133)が出土した。

器台は、4個体それぞれ異なる形態のものが確認された。いずれも貫通孔をもつものである。25は大形のもので、粗雑な作りである。109は器受部は不明であるが、短い貫通孔をもち、緩やかに脚部が開くものとする。158は器受部に稜を有するもので小形器台に属するであろう。44はやや疑問もあるが器台と考えられよう。

ミニチュア土器は平底の容器形を模したものが90、91、127、128と高環を模したものと考えられる37、86が出土している。

その他の土器としては、137にみる底部を焼成前に穿孔した壘形土器、185にみる孔を有する蓋が出土している。

土器以外の土製品としては、線刻文のある紡錘車(47)、勾玉(30)の出土があり古墳との結びつきを示唆するものである。

まとめ

本遺跡出土の古墳時代の土器は、第15号住居址を除くと、ほぼ4世紀代に属する土器群と考えらるよう。土器群に関する詳細な分析、検討は、第1次報告と第3次調査報告から総合的になされるべきところなので、昭和63年度調査の結果をもってまとめとしたい。ここでは、本報告からいえる課題を取り上げることとする。

住居址個々にみるといくつか器種の欠落が指摘されるが⁶³⁾、これらを時期差以外の要因とし、ほぼ同時期に遺構が存在していたと考えたい。出土土器群から時間的変遷を導き出せる資料は、第15号住居址出土の高平、小型丸底土器と他群土器との形態変化にみい出せるのみである。器形形態の違いは、在地系土器群と外来系土器群との影響によるものと考えられよう。古墳時代前期、当地域に広範囲域から土器が流入されていることが報告されている⁶⁴⁾。本遺跡にも同様のことが認められた。東海、北陸、畿内の各地域に主体をもつ土器群が、弥生時代から継続してきた在地土器と融合したと解釈できる。外来系、在地系土器の判別の慎重さと、詳細な分析が必要となるであろう。

遺構の時期を4世紀代と前述したが、出土土器群の編年的位置づけが必要となるであろう。当地域ではいままでも古墳前期、中期の良好な資料に乏しく、標榜土器群からの経緯が明確でなかった。編年的位置づけを、東海、北陸、畿内系の土器をもってすることは、十分な検討が必要となるであろう。

住居址内よりバレススタイル壺と思われる破片が2点(199、208)出土し、文様構成が弘法山36号古墳のものと近似することがいえる。また第13号住居址内出土の棒状貼付をもった壺(31)は中山36号古墳出土の壺口縁部形態の変化を思わせるものである。出土遺物とともに集落全体の分析を行ない周辺古墳との結びつきが考察されよう。

前期出土遺物と同様、全国的に斉一性をもつ第15号住居址等から出土した中期土器群がある。

中期初頭の資料は、県内でも稀薄なものであり、住居址出土遺物として資料価値も高い。集落、古墳とともにこれらの検討も必要である。

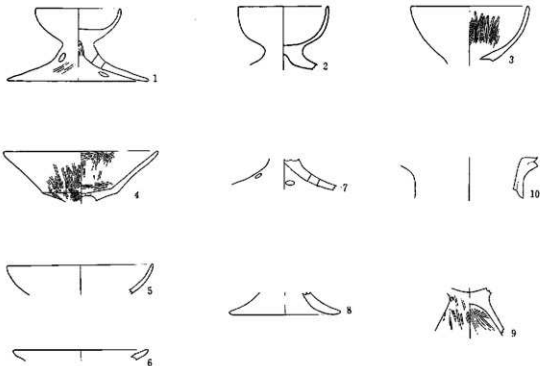
詳細な分析、検討が十分になされなかったが、今後いくつかの課題をもって結論が導き出されよう。

註1) 松本市内湖沼跡1、1988、松本市教育委員会

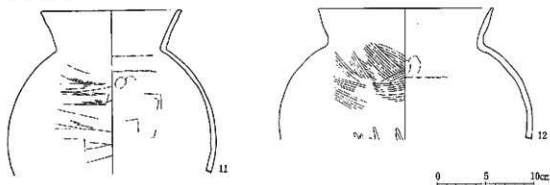
註2) 同上書

註3) 中央自動車道長野緑地環境文化財発掘調査報告書2、1988、長野県教育委員会

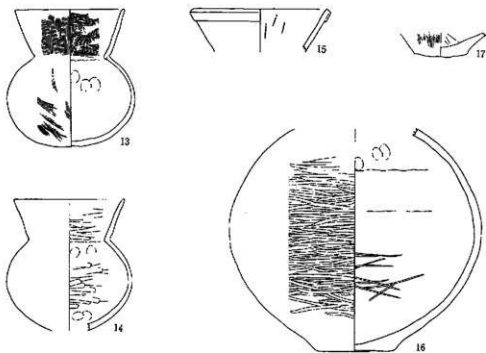
第1号住居址



第2号住居址



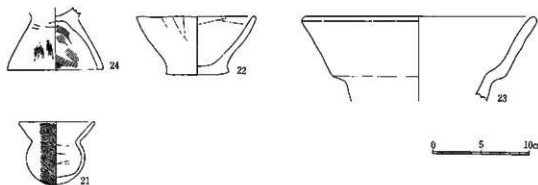
第68图 古墳時代出土土器(1)



第3号住居址

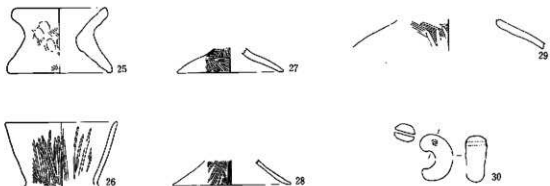


第4号住居址

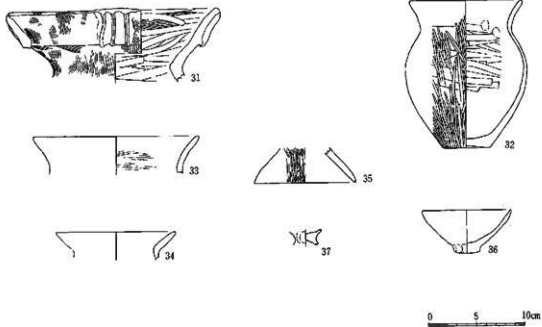


第67图 古墳時代出土土器(2)

第12号住居址

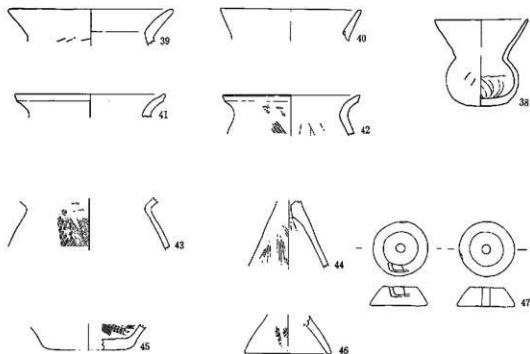


第13号住居址

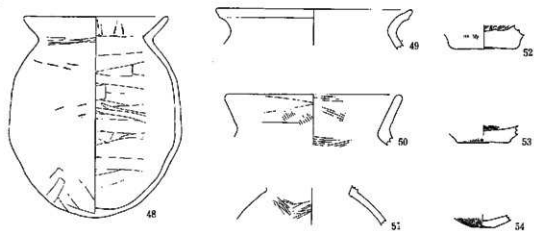


第68图 古墳時代出土土器(3)

第14号住居址

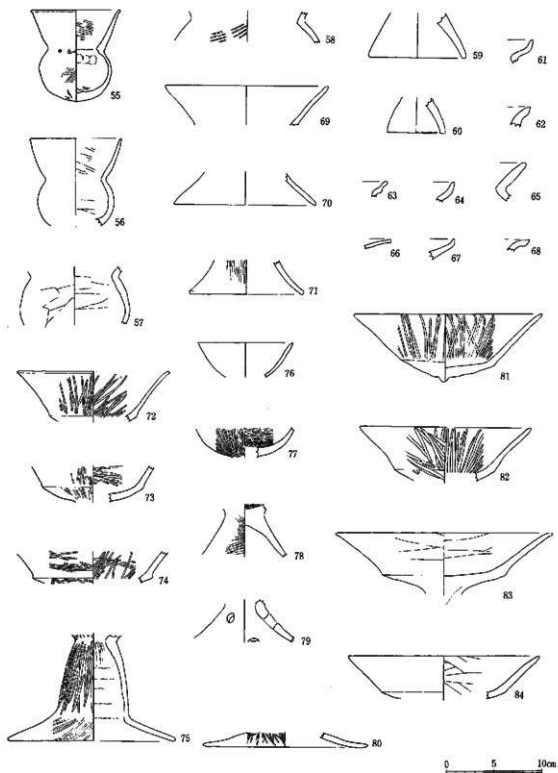


第15号住居址



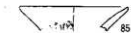
0 5 10cm

第69图 古墳時代出土土器(4)

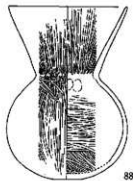
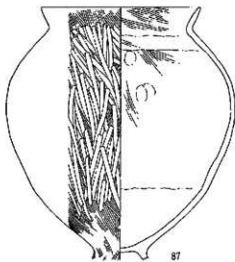


第70圖 古墳時代出土土器(5)

第16号住居址



第18号住居址

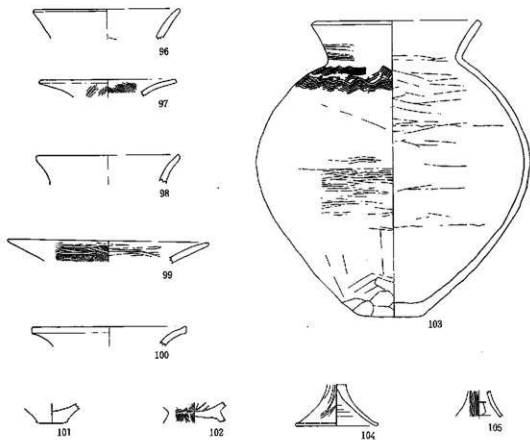


第21号住居址

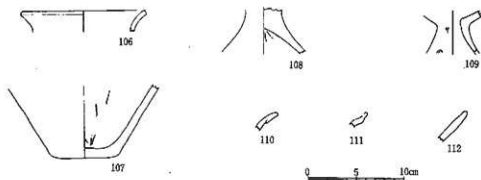


第71图 古墳時代出土土器(6)

第22号住居址

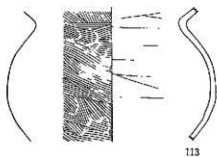


第23号住居址



第72图 古墳時代出土土器(7)

第24号住居址



113



114



115



116

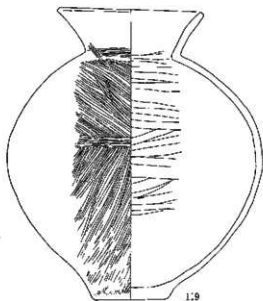


117



118

第29号住居址



119



120

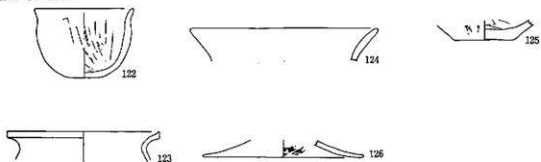


121

0 5 10cm

第73图 古墳時出土土器(8)

第30号住居址



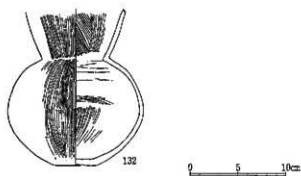
第44号住居址



第47号住居址



方形周溝墓1



第74圖 古墳時代出土土器(9)

土器



133-±37



134-±37



135-±97



136-±139



137-±139



138-±165



139-±165



141-±202



140-±199



142-±216



143-±216



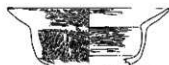
144-±216



145-±218



148-±291



149-±291



146-±275



147-±280



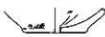
150-±296



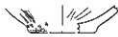
151-±300



152-±327



153-±330



154-±330



155-±330

0 5 10cm

第75图 古墳時代出土土器(10)



156-±609



157 ± 635



158-±642



159-±663



160-±722



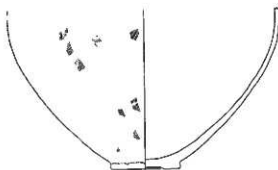
161-±726



162-±740



163-±810



164-±812



165-±812



166-±812

溝



167-溝2



168-溝2



169-溝14

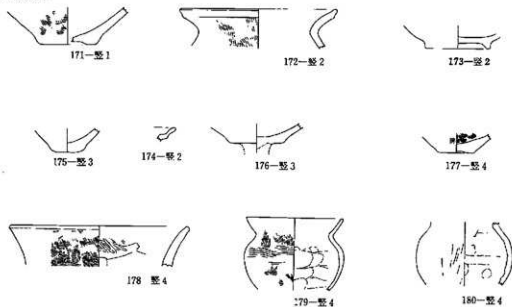


170-溝4

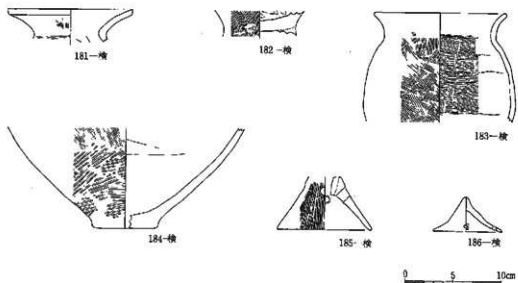
0 5 10cm

第78図 古墳時代出土土器(11)

竪穴状遺構



検出面



第77図 古墳時代出土土器⑫



187-1 住



188-1 住



189-1 住



190-1 住



191-1 住



192-1 住



193-2 住



194-11 住



195-12 住



196-14 住



197-14 住



198-14 住



199-14 住



200-14 住



201-14 住



202-14 住



203-14 住



204-14 住



205-14 住



206-15 住



207-15 住



208-15 住



209-21 住



210-21 住



211-21 住



212-23 住



213-24 住



214-24 住



215-30 住



216-47 住



217-47 住



218-47 住



第78图 古墳時代出土土器(3)



219—137



220—139



221—151



222—175



223—179



224—223



225—275



226—339



227—752



228—810



229—1810



230—857



231—14



232—14



233—2



234—2



235—3



236—3



237—3



238—IV区

0 5 10cm

第79图 古墳時代出土土器04

古墳時代土器一覽表

表3

番号	器種	残存度	法電	色要説成	胎土	胴	轆	備考
住居址			器高	色 調		外面		
土 器			口徑	底 成		内面		
尺			底徑					
1	高 灰	坏部欠 胴部欠破片	7.6 (8.8) (14.8)	灰褐色 灰色細粒多量混入	白色、赤褐色	口唇部ヨコナテ	胴部ミガキ(?)	胴部への穿孔は6孔、上、下段各3孔と考えられる。器面著しく摩滅
66						口唇部ヨコナテ		
1	高 牙	坏部欠 胴部接合破片	(9.2)	灰褐色 底 成	白色、石英細粒多量混入			器面著しく摩滅 内面割断
2								
66								
1	高 灰	坏部完全	12.0	暗褐色 やや堅緻	白色、雲母・石英細粒多量混入	口唇部ヨコナテ		
3						口唇部ヨコナテ	牙部ハケのちミガキ	
66								
1	高 灰	坏部完全	16.2	淡褐色 やや堅緻	白色、灰色細粒多量混入	口唇部ヨコナテ	口縁部ハケ(假位)・ミガキ 縁線上位にハケ目残存	擦痕を写する。内面やや摩滅。胴部との接合のためか下部に径0.5cmの穿孔あり
4						口唇部ヨコナテ		
66								
1	高 灰	坏部欠破片	(15.2)	明褐色 やや堅緻	灰色、赤褐色 大粒多量混入			器面著しく摩滅 内外側の割断あり
5								
66								
1	高 牙(?)	坏部欠	(14.2)	淡褐色 底 成	白色、灰色・石英細粒混入 雲母少量混入	ヨコナテ		器面著しく摩滅
6								
66								
1	高 灰	胴部欠破片		淡褐色 やや堅緻	白色・赤褐色・灰色・石英細粒多量混入			胴部への穿孔は5孔、器面著しく摩滅
7								
66								
1	高 牙	胴部欠破片	(11.8)	淡褐色 やや軟質	赤褐色、灰色 細粒多量混入	胴部ヨコナテ		器面著しく摩滅
8						同上		
66								
1	内付 甕	胴部欠破片		淡褐色 やや堅緻	白色、灰色細粒少量混入	ハケ(假位)		
9						ハケ(假位)		
66								
1	有段口 壺	胴部欠		茶褐色 底 成	白色、灰色細粒少量、雲母少量混入			器面著しく摩滅
10								
66								
2	壺	口縁口完全	14.2	暗茶褐色 底 成	白色・赤褐色・石英細粒少量混入	口唇部ヨコナテ	胴部ヘラ状工具によるナテ	外側スス付石、口縁内面黒斑
11						同上	胴部指痕おさえ	
66								
2	壺	口縁口破片	(18.0)	暗茶褐色 底 成	白色、灰色・石英細粒多量混入	口唇部ヨコナテ	胴上部ハケ(斜位→假位)胴下部ヘラ状工具によるナテ	口縁部から胴部にかけてスス付着
12						口唇部ヨコナテ	胴部指痕おさえ・ナテ	
66								
2	壺	完全	14.4 11.2	黄褐色 底 成	白色、灰色・石英・長石類粒少量混入	口唇部ハケ(假位)→口唇部ヨコナテ	胴部ハケ(斜位)	口縁部は内弯気味に開く
13						口唇部ハケ(假位)	胴部指痕おさえ 底部ナテ	
67								
2	壺	底部欠損	11.4	暗褐色 底 成	白色、灰色細粒少量混入	ミガキ(?)		外面摩滅・底割による需要あり。口縁部は直線的に開く
14						口唇部ヘラ状工具によるナテ	胴部指痕おさえ	
67						胴部ヘラ状工具によるナテ	胴部指痕おさえ	

番号	器種	残存度	注	色調	胎土	調査	備考
住所 二 国				器高 口径 底径	色 黄 底 灰	外面 内面	
2	壺	口縁部は完 存	(14.0)	黄白色	白色・灰色・ 赤褐色・長石 粒多量混入	口縁部ヨコナテ 口縁部 板状工具によるナテ	外面厚減、被熱に よる黒斑あり 二重口縁
2	壺	胴部片欠損 底部完存		黄褐色	白色・灰色・ 石英・長石粒 粒少量混入	胴部棒状工具によるミガキ(縦位) 胴部指環おさへ→ナテ 底部へウ状工具による 縦状表	外面スス付着
2	甕	底部完存		黄褐色	口石・灰色粒 粒多量混入	ハケ(縦位) 底部ナテ(?) ナテ	外面スス付着、被 熱による黒斑
3	壺		(10.0)	黄褐色	白色・赤褐色 細粒少量、微 砂多量混入	口縁部ハケ・棒状工具によるミガキ(縦位) 胴部ミガキ(縦位) 口縁部ミガキ(斜位) 胴部ハケ(斜位)	
3	壺	口縁片破片	(11.8)	赤褐色	白色・石英・ 長石粒粒少量 混入	口縁部・胴部ハケ(縦位) →口縁部ヨコナテ 口縁部・胴部ハケ(縦位) →口縁部ヨコナテ	胴部内面に輪積み 痕
3	壺	口縁片破片	(17.2)	黄褐色	白色・灰色粗 粒多量混入	口縁部ハケ(縦位) →口縁部ヨコナテ 口縁部ハケ(斜位)	
4	小形丸底甕	完存	6.5 8.0	黄褐色	白色・灰色粗 粒、長石、密 粒多量混入	口縁部ヨコナテ、口縁部ハケ(縦位)・ミガキ 胴部ミガキ(斜位) 口縁部板状工具によるナテ(?) 胴部へウ状工具によるナテ(ケズリ)	口縁部縦積的に開 く、胴部半面黒斑 あり
4	鉢	底部中央欠損	6.2 12.2 6.5	赤褐色	白色粗粒多量 混入	口縁部板状工具によるナテ(縦位) 指環もしくは板状工具によるナテ	器厚の強いでなく 凹凸著しい、粗雑 な作り
4	有段口縁壺	口縁部片破片	(24.0)	赤褐色	白色・灰色粗 粒、長石粒粒 多量混入	ナテ(?) ナテ(?)	器面著しく磨滅
4	白付壺	胴部完存		黄褐色	白色粗粒、石 英粒粒少量混 入	ハケ(縦位) ハケ(斜位)	
25	古	口縁部片欠損	(9.3) 10.7	黄褐色	白色・灰色・ 赤褐色粗粒多 量混入	受部下から胴部ハケ(斜位)・指環によるナテ	内面著しい厚減 磨損に円凸あり
2	甕	口縁部片破片	(11.4)	黄褐色	白色粗多量混 入	口縁部ヨコナテ 口縁部ハケ(縦位) →ミガキ(縦位) 同上	
27	高 杯	胴部片破片	(11.2)	赤褐色	白色・石英粗 粒少量、密 粒多量混入	胴部ハケ(縦位) →ミガキ(縦位一横位) 胴部ナテ ナテ	
28	高 杯	胴部片破片	(12.2)	赤褐色	長石粒多量混 入	胴部ミガキ(縦位) 一横部ヨコナテ へウ状工具によるナテ	

番号	器種	残存度	決量	色調構成	胎土	調査	備考
住居址			器高	色調		外面	
土器			口径	構成		内面	
22			底径				
12	壺	胴部破片		黄褐色	灰色・赤褐色	ハケ(斜位)→へう状工具によるナデ	
29				細粒・石灰粒	多量混入	ナデ	
68				やや軟質			
12	土製勾玉			茶褐色	白色・灰色類		
30					粒微量混入		
68					堅緻		
13	壺	口縁部破片	(22.8)	黄褐色	白色・石灰粒	粗雑なハケ(斜位)→棒状削付→ヨコナデ	全体的に粗雑な作り、口縁部は平接に取付、棒状削付又は平接、その別に施付けられる
31				やや堅緻	粒多量混入	ハケ(横位)→へう状工具によるナデ	
68							
13	壺	口縁部欠片類	15.6	暗茶褐色	白色・石灰粒	口縁部ヨコナデ 胴部へう状工具によるナデ	底部ドーナツ状上げ底。口縁部の器厚大きい
32			(11.6)	藍灰	粒多量混入	(横位)→棒状工具によるミダキ(横位)	
68			4.8			胴部造りおさえ 胴部板状工具によるナデ	
13	壺	口縁部破片	(17.4)	茶褐色	白色・石灰粒	口唇部ヨコナデ	
33				やや軟質	粒少量混入	口縁部ハケ(横位)→口唇部ヨコナデ	
68							
13	壺(?)	口縁部破片	(12.6)	黄褐色	白色・赤褐色		器面滑しく厚底
34				やや軟質	粗粒多量混入		
68							
13	高 杯	胴部破片		黄褐色	白色・石灰粒	胴部ミダキ→胴部ヨコナデ	内面厚底
35				堅緻	粒多量混入	樽部ヨコナデ	
68			(10.8)				
13	鉢	口縁部破片 底部残存	4.5	黄褐色	白色細粒少量混入	造りおさえ ナデ	器厚の明白が著しい、やや粗雑な作り
36			(9.2)	やや堅緻		へう状工具によるナデ	
68			2.6				
13	ミニチュア	杯部と脚部接合部破片		黄褐色	白色細粒少量混入	造りおさえ ナデ	
37				堅緻		杯部指によるナデ 脚部整形痕ナシ	
68							
14	小形丸底埴	ほぼ全存	9.2	黄褐色	白色・石灰・密母類粒微量混入	口縁部ヨコナデ 胴部板状工具指痕によるナデ	口縁部は意図的に割く。外面炭化物付着
38			9.4	堅緻		胴部板状工具によるナデ板状痕→ナデ	
69							
14	壺	口縁部破片	(16.8)	茶褐色	白色粗粒、石灰・長石類粒多量混入	胴部ハケ(?)→口唇部ヨコナデ	外面スス付着
39				堅緻		同上	
69							
14	壺	口縁部破片	(14.4)	黄褐色	白色・灰色・石灰粒多量混入	口縁部板状工具によるナデ→口唇部ヨコナデ	
40				やや軟質		同上	
69							
14	壺	口縁部破片	(15.4)	黄褐色	石灰・長石類	口唇部強いヨコナデ	外面スス付着
41				堅緻	粒微量混入	ナデ	
69							
14	壺	口縁部破片	(14.2)	黄褐色	白色・灰色・石灰・長石類	口唇部強いヨコナデ 口縁部ハケ(斜位)	
42				堅緻	粒少量混入	胴部板状工具によるナデ→ヨコナデ	
69							

番号	器種	残存度	法票	色調/成分	胎土	器	整	保	考
住居跡			跡	色調		外面			
土器			口縁	成分		内面			
14			底片						
13	甕	胴部/破片		茶褐色 白色・灰色・ 石英・長石類 少量混入		胴部ハケ(縦位)→胴部ヨコナデ			
69				藍 緑		胴部ナデ			
14				黄褐色		胴部ミクネナデ			
44	鉢	白 胴部		白色細粒 微量混入		ナデ			高坪の胴部の可能性もある
69				藍 緑		ナデ			
14				黄褐色		ハケ(縦位)→ナデ			
45	甕	底部/破片		白色・灰色 細粒、石英類 多量混入		ナデ			胴底部平坦面を作る
69			(8.2)	藍 緑		ナデ			
14				黄褐色		ナデ			
46	白付 甕	胴部/破片		白色・赤褐色 粗粒多量混入		ハケ			
69			(8.4)	藍 緑		ハケ			
14				黄褐色		ナデ			
47	特殊 草	完存	2.9	灰色細粒、石 英粒少量混入		ナデ	ヘラ状二具による直線文		径1.0cmの穿孔
69			3.6						
			5.8						
15			21.2	黄褐色		口縁胴部ナデ→胴部ヘラ状工具によるヨコナデ 底部ヘラ削り			
48	甕	胴部/欠損	(15.1)	中や藍緑		口縁部ヘラ状工具によるナデ隆状痕 胴部板状 工具によるナデ			
69									
15				黄褐色		口唇部強いヨコナデ			口唇部面を作る 器型美しい家産
49	甕	口縁部/破片	(29.6)	白色・赤褐色 粗粒多量混入					
69				中や藍緑					
15				黄褐色		口縁部、縦状工具による強いナデ→ハケ(斜位)			
50	甕	口縁部/破片	(18.0)	白色・石英・ 長石粗粒多量 混入		ハケ(横位)			
69				藍 緑		ハケ(横位)			
16				茶褐色		胴部ナデ 胴部ミクネ			
51	甕	胴部/半欠破片		白色・灰色 細粒少量混入		胴部ナデ 胴部板状工具によるナデ			
69				藍 緑					
16				黄褐色		胴部ハケ(縦位) 底部ナデ			
52	甕	底部/完存		白色・赤褐色 石英・長石類 粗粒多量混入		強いハケ			
69			7.4	藍 緑					
15				黄褐色		ハケ(縦位)			
53	甕(?)	底部/完存		白色・赤褐色 石英類少量 混入		ハケ			
69			5.6	藍 緑					
15				茶褐色		底部ミクネ(縦位)			
54	甕	底部/完存		石英・長石類 量混入		ナデ			
69			2.4	藍 緑					
15				茶褐色		口縁部ヨコナデ 胴部胴部接合部二具により 強いナデ→ヘラ状工具によるナデ			口縁部直線的に 強く、全体的に粗粒 な作り。外側面
55	小形丸底壇	完存	9.6	赤褐色粗粒、 白色細粒少量 混入		口縁部ハケ(横位) 胴部指頭おさえ 底部分板状工具によるナデ			
70			9.2	藍 緑					
15				黄褐色		口縁部ヨコナデ 胴部胴部接合部板状工具によるナデ			
56	小形丸底壇	口縁部/胴部	(9.4)	白色・赤褐色 細粒少量混入		口縁部ハケ(斜位)→ヨコナデ 胴部指頭おさえナデ 底部板状工具によるナデ			
70				イイ軟質					

番号	部 組	現 在 産	注 意	色調組成	粘 土	調 整	備 考
住居址			器高	色 調		外面	
土 器			山徑	泥 成		内面	
15			高径				
57	裏	胴部破片		橙褐色	白色・灰色 細粒、石英・長 石粒少量混入	板状工具によるナデ	内・外面とも黒炭 附着あり
70				紫 緑		同上	
15				暗茶褐色	白色・灰色 石英・長石類 粒少量混入	胴部可き目 胴部ナデ	
58	裏	胴部破片				ナデ	
70				紫 緑			
15				黄褐色	白色・赤褐色 粗粒、灰色類 粒少量混入	胴部ヨコナデ	粘り著しい摩滅
59	白付 装	胴部破片				同上	
70			(9.6)	紫 緑			
15				明褐色	白色粗粒、灰 色細粒少量混 入	ナデ	胴底部平出溝を作 る
60	白付 装	胴部破片				同上	
70			(6.1)	紫 緑			
15				明黄赤褐色	灰色細粒、石 英粒少量混入	口縁部ヨコナデ 体部ハケ	
61	裏	口縁部破片				体部ハケ	
70				紫 緑			
15				黄褐色 茶褐色	白色・石英粒 少量混入	口縁部ナデ	
62	裏	口縁部破片		やや厚縁			
70				紫 緑			
15				黒褐色 淡褐色	白色・石英粒 少量混入	口縁部ヨコナデ 体部ハケ	
63	S字 装	口縁部破片					
70				紫 緑			
15				暗茶褐色 橙褐色	白色・灰色粒 少量混入	口縁部ヨコナデ	
64	小形 装	口縁部破片					
70				紫 緑			
15				淡黄褐色 淡茶褐色	白色・石英粒 少量混入	口縁部ナデ (?)	
65	裏	口縁部破片				口縁部ハケ 体部ナデ	
70				紫 緑			
15				明橙褐色	白色粗粒少量 混入	口唇部ヨコナデ→両取り 口縁部ミガキ(低位)	
66	豆	口縁部破片				口縁部ミガキ(高位)	
70				紫 緑			
15				橙黄褐色	赤褐色粗粒少 量混入	口唇部ヨコナデ 口縁部ナデ	
67	器 台	口縁部破片				口縁部ミガキ(放射状)	
70				紫 緑			
15				淡黄褐色 淡茶褐色	白色・石英粒 少量混入	口縁部ミガキ	
68	裏	口縁部破片					
70				紫 緑			
15				橙褐色	白色・赤褐色 粗粒少量、灰 色細粒少量混 入	板状工具によるナデ 口唇部ヨコナデ	
69	高 坏	口縁部破片	(17.1)			同上	
70				紫 緑			
15				橙褐色	白色・灰色類 粗粒、石英粒多 量混入	ミガキ (?)	器主要しく摩滅
70	高 坏	胴部破片					
70			(13.0)	やや軟質			

番号	部 種	残 存 度	注 記	色調	成 成	土 質	測 量	備 考
15	高 環	脚部片破片	彩	茶褐色	白色・灰色 粒少量混入	外区		
71						内区		
70				(11.4)	磁 磁			
15	高 環	環部片破片	藍	藍褐色	白色・灰色 細粒、石英粒 少量混入	口縁部ミガキ(縦位)→ヨコナデ 環下部ナデ	環部に横を有する	
72				(15.8)	磁 磁			
70								
15	高 環	環部破片	青	青褐色	白色、赤褐色 粗粒、石英粒 多量混入	縁部ヨコナデ→棒状工具によるミガキ(縦位) 脚部全部ヨコナデ	環部に横を有する	
73								
70								
15	高 環	環部破片	明	明褐色	赤褐色、石英 細粒少量混入	棒状工具によるミガキ(縦位)	環に横を有する	
74								
70								
15	高 環	脚部完存	藍	藍褐色	白色、灰色・ 赤褐色細粒少 量混入	棒状工具によるミガキ(縦位)		
75								
70				16.6	中や磁		脚部指状ナデ 脚部板状工具によるナデ	
15	高 環	口縁部片破片	明	明褐色	白色、赤褐色 粒少量混入	口唇部ヨコナデ	部面著しい摩滅	
76				(10.0)	中や磁			
70								
15	高 環	環部破片	藍	藍褐色	白色、石英・ 長石細粒少量 混入	ミガキ(縦位)		
77								
70								
15	高 環	環部部組合 部片破片	茶	茶褐色	白色、赤褐色 石英、長石細 粒多量混入	縁部ミガキ(縦位→斜位) 接合部ナデ		
78								
70								
15	高 環	脚部破片	明	明褐色	白色、赤褐色 細粒少量混入		脚部穿孔は上・下 段各3カ所の6カ 所に残る。器加 著しく摩滅	
79								
70								
15	高 環	底部片破片	黄	黄褐色	白色、灰色 粗粒少量混入	ミガキ		
80								
70				(17.5)	中や磁		ヨコナデ	
15	高 環	環部完存	藍	藍褐色	赤褐色粗粒多 量、白色・灰色 細粒少量混入	棒状工具によるミガキ(縦位)→口唇部ヨコナデ	環部に弱い横を有 する。口縁部平面 形状凹凸形となる	
81				19.7	中や磁		棒状工具によるミガキ(放射状)→口唇部ヨコナデ	
70								
15	高 環	環部片破片	青	青褐色	白色、赤褐色 粗粒、石英粒 少量混入	棒状工具によるミガキ	環部に横を有する	
82				(18.0)	磁 磁			
70								
15	高 環	環部完存	橙	橙褐色	白色、灰色 粗粒少量混入	棒状工具・指によるナデ・ミガキ(?) 口唇部ヨコナデ	口唇部黒変層所有 り	
83				22.8	中や磁		棒状工具によるナデ	
70								
15	高 環	口縁部片破片	黄	黄褐色	白色、赤褐色 粗粒、雲母粒 少量混入	棒状工具・指によるナデ		
84				(20.1)	磁 磁			
70								

番号	器種	残存度	注釈	色調	胎土	特徴	備考		
住居正			器高	色調		外面			
土器			口徑	胎土		外面			
16	甕(?)	口縁部片破片	(11.4)	黄褐色	灰色粗粒、石英・雲母・炭母粒多量混入	ハケ(縦位)→ヨコナデ	内面黒染		
85						ヨコナデ			
71									
16	ミニチュア	脚部完全	2.8	灰褐色	白色粗粒混入		全体的に粗粒な作り		
86									
71									
18	白付甕	脚部欠損 口縁部完全	16.4	暗褐色	白色・灰色・石英・炭石・炭母粒多量混入	口縁部ハケ(縦位)→脚部ハケ(斜位)→ヘラ状工具によるナデ(縦位)	口縁部「く」の字状に外反。外面黒部中心に全体的にスス付着		
87									
71									
18	甕	口縁部欠損 胴部完全	18.25 (12.4)	黄褐色	白色・灰色・石英・炭石	口縁部捺状工具によるミガキ(縦位)	口縁部直線的に開く。胴部やや平底となる		
88									
71					3.0	暗褐色		炭多量混入	
18						茶褐色		白色・赤褐色	ミガキ
89	小形甕(?)	胴部完全	3.7	暗褐色	粗粒少量混入	ヘラ状工具によるミガキ			
71									
18					2.5	灰褐色	白色粗粒少量混入	指頭おさえ 胴部捺状	器形にゆがみがあり 手触
90	ミニチュア	口縁部欠損	2.1						
71					2.4	やや暗褐色	指頭おさえ		
18	ミニチュア	底部完全	3.6	暗褐色	白色粗粒多量混入	指部指頭おさしナデ 指部ヘラ状工具によるナデ			
91									
71						やや暗褐色	白色・灰色・石英粗粒多量混入	口唇部ヨコナデ ミガキ(?) 口唇部ヨコナデ	断面新しく摩滅
18	高 甕	口縁部片破片	(18.4)	黄褐色	白色・灰色・石英粗粒多量混入	口唇部ヨコナデ	断面新しく摩滅		
92									
71									
21	甕	口縁部欠	(18.4)	暗褐色	白色・雲母・石英粗粒多量混入	胴部ハケ(斜位)→ヨコナデ 口唇部ナデ			
93									
71						暗褐色		炭状工具によるケズリ状ナデ	
21	甕	口縁部破片		褐色	白色粗粒、炭母少量混入	口唇部ナデ 口縁部指頭捺状	弥生中葉土器片		
94									
71						暗褐色			
21	甕	口縁部片		暗褐色	白色・石英粗粒、炭母混入	口唇部ミガキ→口唇部ヨコナデ	口唇部に底をつくる		
95									
71						暗褐色			ヨコナデ
22	甕	口縁部片破片	(15.2)	灰褐色	白色・灰色粗粒少量混入	ヨコナデ	外面一部黒染		
96									
71						暗褐色		板状工具によるナデ	
22	甕	口縁部片破片	(14.0)	暗褐色	白色・灰色粗粒、石英粒微量混入	ミガキ 口唇部ヨコナデ			
97									
71						暗褐色		ハケ(斜位)→口唇部ヨコナデ	
22	甕	口縁部片破片	(14.7)	茶褐色	白色・赤褐色炭石粗粒混入	ヨコナデ			
98									
71						暗褐色		指ナデ	

番号	器種	残存度	法量	色調組成	粘 土	調 整	備 考	
10	土 器			褐色 灰 緑		外面		
				口徑 灰 緑		内面		
22	甕	口縁部/破片	(21.2)	明褐色	白色・灰色・赤褐色・石英細粒多量混入	口縁部ハケ(縦位)→ミガキ(横位)	縁部の凸凹著しい	
99						ミガキ		
72								
22	甕	口縁部/破片	(15.8)	明褐色	白色・灰色・石英細粒多量混入	口縁部ヨコナテ	口唇部面を作る 外面・頸部底	
100						同上		
72								
22	壺	底部欠存		茶褐色	白色・灰色・石英・長石細粒多量混入		外面摩滅	
101						縦状工具によるナテ 摩滅痕		
72								
22	白 土 袋	胴部/破片		灰褐色	白色・灰色・石英・長石細粒多量混入	ハケ		
102						胴部板状工具によるナテ摩滅痕 胴部指ナテ		
72								
22	甕	4315欠存	31.25	暗褐色	白色・灰色・細粒少量混入	口唇部ヨコナテ→他部底一部取る 胴上部板状工具によるナテ→他部底状文 胴下部ミガキ(縦位) 底部へテ割リ	底部縁部により側面一部黒化。口唇部面を作る	
103					17.0			
72					6.5			
22	高 杯	胴部欠存	(8.4)	明褐色	白色・赤褐色 細粒少量混入	ミガキ	外面摩滅	
104						板状工具によるナテ		
72								
22	高 杯	胴部破片		暗褐色	白色・灰色・石英細粒少量混入	ミガキ(部)		
105						ベニ軟質 混入		ケスリ
72								
23	甕	口縁部/破片	(12.8)	暗褐色	白色・灰色・石英細粒多量混入		唇部著しく摩滅 口唇部面を作る	
106								
72								
23	甕	底部/破片	(6.4)	茶褐色	白色・灰色・石英・長石細粒多量混入		底部大黒化 外面著しく摩滅	
107						板状工具によるナテ		
72								
23	高 杯	胴部		暗褐色	白色・灰色・石英細粒細粒多量混入		外底著しく摩滅	
108						板状工具による縦状痕現る		
72								
23	部 台			黄褐色	白色・赤褐色 粗粒少量混入	ハケ(縦位)	唇部摩滅。胴部穿孔1ヶ所確認	
109								
72								
23	S 字 型	口縁部破片		茶褐色	白色・灰色 細粒多量混入	ヨコナテ	唇部摩滅	
110								
72								
23	甕	口縁部破片		褐色	石英・長石細粒多量混入	口縁部ハケ(縦位)→口唇部ヨコナテ		
111						同上		
72								
23	壺	口縁部破片		暗褐色	石英・長石細粒多量混入	口唇部指刺おさえナテ	折り返し口縁	
112								
72								

番号	器種	残存度	流量	色調組成	粘土	調査	備考
住居址				器色調		外面	
土器				口径		内面	
24				底径			
24	壺	胴部		茶褐色	白色細粒多量混入	胴部ハケ(縦位)→胴部ハケ(斜位)	外面黒染により胴部一部黒染
113							底径
73				藍緑			底径
24				橙褐色	赤褐色粗粒、白色細粒少量	口縁部ミガキ→口唇部ナデ	
114	高	杯	口縁部欠破片 (10.8)				
73				藍緑	混入	口縁部ミガキ	
24				明褐色	白色粗粒、赤褐色細粒多量混入	ミガキ(縦位)	脚部穿孔、口所種
115	高	杯(?)	胴部欠破片				ナデ
73				藍緑			
24				暗褐色	白色、灰色	杯部ミガキ(縦位)	
116	高	杯	杯部欠破片				
73				藍緑	粗粒多量混入	杯部ミガキ(縦位)	
24				淡黄灰色、黄褐色	白色細粒多量混入	ミガキ(縦位) 底部ナデ	外至黒染
117	壺	底部欠存					
73			3.9	やや軟質		胴部ミガキ(横位) 底部ミガキ(縦位)	
24				茶褐色	白色細粒少量混入	口縁部ミガキ(縦位)、口唇部ミガキ(横位)	口縁部や口凹状となる、杯底部に小穿孔あり
118	高	杯	杯部欠存	21.2			
73				藍緑		杯部ミガキ(縦位)、口唇部ミガキ(横位)	
29				30.5	橙褐色	白色、灰色、石英粗粒少量混入	口縁部ヨコナデ 胴部ミガキ(斜位)→胴部中央部部ミガキ(横位)
119	壺	胴部欠残		14.9			口唇部に面を作る
73				7.4	藍緑	混入	口縁部ヨコナデ 胴部攪拌工具によるナデ
29				黄褐色	白色、灰色	口縁部ヨコナデ 胴部細いハケ(縦位)	
120	小形壺	口縁部欠	口縁部欠 (5.7)				
73				藍緑	粗粒少量混入	口縁部ヨコナデ	
29				橙褐色	白色、灰色	胴部ハケ(縦位) 胴部ハケ→ケズリナデ	器壁が薄くS字壁の胴部の可能性あり
121	古付壺	胴・基部接合部			粗粒、金雲母多量混入	ナデ	
73				藍緑			
30				7.3	暗褐色	白色粗粒、石英粗粒多量混入	口唇部ヨコナデ 胴部攪拌工具によるナデ
122	小形壺	口縁部欠	口縁部欠 (10.2)				
74		底部欠存		3.4	藍緑		ヨコナデ→棒状工具によるミガキ状のナデ
30				橙褐色	白色、灰色、石英粗粒多量混入	口唇部ヨコナデ	口縁部外反し口唇部に面を作る 器面著しく磨減
123	壺	口縁部欠破片	口縁部欠破片 (15.8)				
74				やや軟質		ヨコナデ	
30				橙褐色	白色、灰色	ヨコナデ(?)	器面著しく磨減
124	壺	口縁部欠破片	口縁部欠破片 (19.8)				
74				藍緑			
30				黄褐色	白色、石英粗粒多量混入	ハケ(縦位)	器面著しく磨減
125	壺	底部					
74			6.0	藍緑		棒状工具によるナデ	
30				橙褐色	白色、赤褐色	ミガキ(?)	外面磨減
126	高	杯	胴部欠破片				
74				(17.9)	やや藍緑	細かいハケ(斜位)	

番 号	器 種	残 存 度	法 費	色 調 混 成	粘 土	調 整 備 考	
住持社	土 器		器高	色 調		外面	
土 器			口径	混 成		内面	
器 底			底径				
44	ミニチュア	依存	3.35	暗 色	白色・灰色	手彫 ミヤ部指でつまみ出す	内外面に黒塗あり
127			4.1		緑粒少量混入		
74			3.0	堅 緻			
44	ミニチュア	口縁部欠片 類	3.15	黒 濁 色	白色細粒、石 灰粒少量混入	手彫	器形は不整形で器 面の凹凸多い
128			3.6			新部修整工具によるナデ	
74			2.9	堅 緻			
44	白 付 甕	胴部接合部 破片		暗 濁 色	白色・灰色細 粒、石灰粒少 量混入	ナデ	
129						胴部へラ状工具による縁伏紙 胴部ハケ	
74				堅 緻			
47	壺	口縁部欠 片		暗 濁 色	白色・石灰・ 長石細粒少量 混入	口縁部ハケ(刷位)、口唇部ヨコナデ	外面一部にスス付 着
130			(14.8)			口縁部ハケ(斜位)→修整工具によるミガキ、口 唇部ヨコナデ	
74				堅 緻			
47	ミニチュア	底部欠		黄 濁 色	白色・赤褐色	ナデ 底部ナデ	
131					緑粒少量混入	ナデ	
74			3.15	堅 緻			
加部編	甕	胴部欠 口縁部欠 片	15.9	明黄灰色 暗灰褐色	白色・石灰細 粒少量混入	口縁部ミガキ(刷位) 体部ミガキ(刷位)	
132						口縁部ミガキ(刷位) 体部ミガキ(刷位、刷位)	
74			4.0	堅 緻			
土37	鉢	口縁部欠片欠 損	4.1	暗 濁 色	白色細粒、石 灰粒混入	口唇部ヨコナデ 胴部ミガキ(刷位)	外面一部スス付着
133			9.7			ヘラ状工具によるナデ	
75			2.5	堅 緻			
土37	小形丸底甕	口縁部欠片欠 損	6.6	黄 濁 色	白色・灰色・ 石灰細粒多量 混入	口唇部ナデ	底部上げ底。器面 著しく厚化。口縁 部直線的に開く。 内面黒塗
134			11.2			同上	
75			3.0	堅 緻			
土37	小形丸底甕	口縁部胴部欠 片	11.9	暗 濁 色	白色・石灰細 粒混入		器面著しく厚化 内外面黒塗あり
135					やや軟質		
75							
+139	壺	底面欠破片		黄 濁 色	白色・石灰・ 長石細粒多量 混入	胴部修整工具によるミガキ 底部修整工具に よるナデ	
136						ナデ	
75			(5.2)	堅 緻			
土139	壺	底部欠破片		暗 濁 色	白色・灰色・ 長石細粒多量 混入	ハケ 底部ナデ	底部中央穿孔
137						ハケ	
75			(6.0)	堅 緻			
土165	甕	底部欠破片		暗 濁 色	白色・赤褐色	ナデ	
138					緑粒多量混入	ナデ	
75			(7.6)	堅 緻			
土165	壺	底部欠破片		黒 濁 色	白色・灰色粗 粒、褐色緑粒 混入	ミガキ	外面黒塗
139						ハケ→板状工具によるナデ	
75			(7.6)	堅 緻			
土199	S 字 壺	口縁部破片		暗 濁 色	石灰細粒混入	ヨコナデ	
140						ヨコナデ	
75				堅 緻			

番号	種類	残存度	法量	色調形成	粘土	調 整	備 考
住居社			厚薄	色 調		外面	
土 器			口径	泥 状		内面	
器			底径				
±202				暗褐色	白色細粒、ナ	新接合体ハケ	器面著しく摩滅
141	台 付 甕	胴部片破片			ヤート・石英		
75				藍 灰	粒多量混入		
±216				橙褐色		環部との接合体ハケ状工具の線状痕 ミガキ	胴部穿孔3カ所不規則に穿孔
142	高 杯	脚上部環部との接合体			白色・赤褐色	ナデ	
75				藍 灰	粒多量混入		
±216				暗褐色	白色・長石粒	胴部へラ状工具によるミガキ 底部ナデ	底部ドーナツ状上げ底
143	壺	胴部欠損			多量混入	棒状工具によるミガキ	内面黒変
75		底部欠存	8				
±216				橙褐色		底部ナデ	器面著しく摩滅
144	壺(7)	底部片破片			白色・灰色		
75			(4.7)	やや膨脹	細粒多量混入		
±218				黄褐色	白色・赤褐色		底部ドーナツ状上げ底。器面著しく摩滅
145	壺	底部片破片			長石細粒多量混入		
75			(5.2)	やや膨脹			
±275				暗褐色	白色細粒少量混入	へけ状工具による横線	胴部穿孔4カ所内面摩滅
146	高 杯	脚上部					
75				藍 灰			
±280				暗褐色	白色細粒、金	口唇部ヨコナデ 胴部棒状工具による沈線	外面スス付着
147	S 半 甕	口唇部片破片	(15.0)		雲母微量混入	胴部ハケ(斜位)→ナデ	口唇部外周気味に開く
75				藍 灰		口唇部ヨコナデ 胴部指痕おきエナデ	
±291				暗褐色	灰色細粒少量混入	口唇部ヨコナデ 口唇部ハケ(斜位) 胴部板状工具によるナデ	外面一部黒変
148	壺	口唇部片破片	(17.6)			口唇部ハケ(横位) 胴部へラ工具によるケズリ	口唇部外周気味に開く。環部に線をもつ
75				藍 灰			
±291				黄褐色	白色細粒少量混入	口唇部ヨコナデ 口唇部ミガキ(横位) 環部ミガキ(横位)	外面一部黒変
149	高 杯	杯部片破片	(17.2)			口唇部ミガキ(横位) 環部ミガキ(横位)	口唇部外周気味に開く。環部に線をもつ
75				藍 灰			
±296				暗褐色	白色・褐色・長石細粒多量混入	底部ナデ	
150	壺(7)	底部片破片				線状痕	
75			(5.0)	やや膨脹			
±300				黒褐色	白色・長石細粒混入		器面著しく摩滅
151	壺	底部片破片					
75			(4.8)	藍 灰			
+327				暗褐色	白色・茶褐色	ヨコナデ→ミガキ(横位)	
152	高 杯	杯部破片			粗粒混入	ヨコナデ→ミガキ	
75				藍 灰			
±330				暗褐色	白色細粒多量混入	棒状工具によるミガキ(縦位)	
153	壺	底部片破片				へけ状工具による線状痕	
75			(6.5)	藍 灰			
±330				暗褐色	白色・褐色	底部接合体ハケ→ナデ	底部本葉痕
154	壺	底部片破片			細粒多量混入	棒状痕	
75			(6.7)	藍 灰			

番号	器種	残存度	注量	色調	成分	調査	備考
作製地				緑褐色		外面	
土器				底底		内面	
±330				明褐色	石灰・雲母少量混入	口唇部のみ 口縁部ヨコナテ	
155	S字型	口縁部破片				口縁部ヨコナテ	
75				底底			
±609				褐色	白色・赤褐色		器面著しく摩滅
155	台付甕	胴部			石灰細粒多量混入	ヘラ状工具の摩滅痕	
76		底底					
+635				暗赤褐色	白色・灰色・赤褐色細粒・石灰粒少量混入	口縁部ハケ(横位)→口唇部ヨコナテ	外面スス付着
157	甕	口縁部片破片	(12.6)			棒状工具によるミガキ	
76				底底			
±642				黄褐色	白色・石灰細粒少量混入	ミガキ・ナテ	
158	小形器台	底部片破片	(9.7)			環状放射状のミガキ 胴部ヨコナテ	
76				底底			
±663				黄褐色	白色・灰色・石灰細粒少量混入	ミガキ(横位)	内面黑色結着
159	埴	口縁部破片	(12.8)			ミガキ(横位・斜位)	
76				底底			
±722				暗灰色	白色・砂粒混入	胴部ナテ 底部団転へく削り	外面の一部に自然釉が付着
150	須志器	胴部破片					
76	牙			底底			
±726				明褐色	白色・灰色・赤褐色細粒少量混入	ミガキ	外面一部黒変 底面上げ形状となる
151	甕	底底				底面ハケ→ヘラ状工具によるナテ	
76			3.2	底底			
±740				黄褐色	白色・赤褐色 石灰細粒多量混入	口縁部ハケ(横位)→口唇部ヨコナテ	口唇部下面を作る。口縁「く」の字状に開く
162	甕	口縁部片破片	(21.0)			口縁部ハケ(横位)→口唇部ヨコナテ	
76				底底			
±810				黄褐色	白色・赤褐色 細粒・石灰・雲母粒多量混入	ナテ(?)	器面著しく摩滅
163	甕	底部片破片					
76			(11.8)	底底			
±812				黄褐色	白色・褐色 粗粒多量混入	胴部ハケ(斜位)	器面著しく(赤褐色)の剥離している。表面ドーナツ状に凹
164	甕	胴部下半底面片					
76			7.4	底底			
±812				黄褐色	白色・赤褐色 石灰細粒多量混入	ハケ(横位)	器面著しく
165	甕(?)	底部片				ナテ	
76			(7.6)	底底			
±812				暗褐色	白色・赤褐色 石灰細粒少量混入	ミガキ	外面一部黒変 内面摩滅 粒をもつ
166	高環	環部片破片	(16.8)				
76				底底			
透2				暗褐色	白色・赤褐色 石灰細粒少量混入	胴部ヨコナテ	器面著しく摩滅
167	高環	脚部片破片					
76			13.8	底底			
透2				明褐色	白色・石灰粒子少量混入		器面著しく摩滅
168	鉢	底部片					
76			3.4	底底			

番号	器種	残存度	法線	色調状況	胎土	調	整	備考	
位置座 土器 区			器高 口徑 底径	色調 構成		外面 内面			
14	壺	口縁部片破片	(12.4)	明褐色	白色粗粒多量混入			器面著しく摩滅	
169									
76				藍緑					
170	小形甕	底部完存	4.8	暗褐色	白色粗粒多量混入	ナデ		器面著しく摩滅	
76				やや軟質		ナデ			
171									
177	甕	底部片破片	(6.0)	暗褐色	白色・灰色・赤褐色粗粒・石英粗粒多量混入	ハケ(縦位)		底部ドーナツ状上底・外面一部黒変・内面摩滅	
172	甕	口縁部片破片	(16.6)	褐色	白色・灰色・赤褐色・石英粗粒少量混入	コ縁部ハケ(縦位)・口唇部ヨコナデ		口唇部曲をつくり	
77				藍緑		ヨコナデ			
77									
173	黒色土器	底部完存	6.8	褐色	白色・灰色・赤褐色粗粒・石英粗粒多量混入	胴部ロクロナデ 底部回転糸切痕→付け高台			
77				やや硬質		黒色結晶ミガキ			
174	S字壺	口縁部破片	77	黄褐色	白色・赤褐色粗粒・管母粒少量混入	ヨコナデ		器面著しく摩滅	
77				やや堅硬					
175	壺	底部片破片	(3.0)	明褐色	白色・赤褐色粗粒・石英粗粒多量混入	ナデ(?)		器面著しく摩滅	
77				藍緑					
176	妻杯	杯部下半	77	黄褐色	白色・灰色・赤褐色粗粒・石英粗粒多量混入	ミガキ(?)		器面著しく摩滅	
77				やや硬質					
177	壺	底部完存	3.8	黄褐色	白色・赤褐色石英粗粒少量混入	ハケ(縦位)		底部ドーナツ状上底	
77				やや軟質		ハケ	内面黒変		
178	甕	口縁部片破片	(18.6)	暗褐色	白色・赤褐色石英粗粒少量混入	胴部ハケ(斜位)→口縁部ヨコナデ			
77				藍緑		胴部ヘラ状工具によるナデ一部ミガキ状となる			
179	甕	口縁・胴部片破片	(10.2)	暗褐色	灰色・赤褐色粗粒・石英・管母粒少量混入	胴部ハケ(縦位)→胴部ハケ(横位) 口縁部ヨコナデ		器厚全体に薄い口唇部平出周を作る	
77				藍緑		胴部指環おさえ→胴部ヘラ削り 口縁部ヨコナデ			
180	甕	胴部片破片	77	褐色	白色・石英粗粒少量混入	胴部ハケ		器面著しく摩滅	
77				藍緑		胴部指環おさえ ナデ		器厚の凹凸著しい	
181	壺	口縁部片破片	(13.0)	明黄褐色	白色・石英・赤褐色粗粒少量混入	口唇部ヨコナデ 口縁部ハケ		器面著しく摩滅	
77				やや軟質					
182	白代壺	接合部破片	77	灰黄褐色	白色・灰色・石英粗粒多量混入	ハケ			
77				やや硬質		ヘラナデ			

番号	器種	残存度	法量	色調焼成	胎土	調整	備考
住所址				緑褐色調		外面	
土器				口徑		内面	
				底径			
検出箇	甕	口縁部1/6破片	(14.0)	橙黄褐色	白色・灰色	口縁部ヨコナデ 胴部ハケ	粉山塚城
183					細粒少量混入	口縁部ヨコナデ 胴部ハケ	
77							
検出箇	甕	底部片破片	(6.8)	黄褐色	白色・灰色	下部タキキ→上部ハケ	
184					暗褐色	黒粒多量混入	
77							
検出箇	器	白	胴部片破片	暗褐色	白色・黒粒少量混入	ミガキ 胴部ナデ(横方向)	4カ所穿孔あり
185					暗褐色	混入	
77			(10.0)	今や堅緻			
検出箇	甕	胴部片破片	(3.6)	淡黄褐色	白色・石英粒多量混入		器面著しく摩滅
186						軟質	
77							
1	甕	胴部(拓本)		橙褐色	白色・黒粒混入	叩き目	
187							
78				今や堅緻			
1	甕	胴部(拓本)		橙褐色	白色・黒粒混入	叩き目	内面著しく摩滅
188							
78				今や堅緻			
1	甕	胴部(拓本)		茶褐色	白色・黒粒混入	叩き目	
189							
78				堅緻			
1	甕	胴部(拓本)		茶褐色	白色・黒粒少量混入	帯縞波状文	
190							
78				今や堅緻			
1	甕	胴部(拓本)		灰褐色	白色・黒粒少量混入	叩き目	
191							
78				今や軟質			
1	甕	口縁→胴接合部(拓本)		灰褐色	白色・褐色	胴部からの接合部ナデ 胴部叩き目	
192						細粒少量混入	
78				堅緻			
2	甕	口縁部(拓本)		橙褐色	白色・黒粒混入	帯縞波状文 口唇部ナデ	
193							
78				堅緻			
11	甕	口縁部(拓本)		褐色	白色・赤褐色	帯縞波状文	
194						石英細粒少量混入	
78				堅緻			
12	甕	口縁部(拓本)		橙褐色	白色・石英微粒少量混入	帯縞波状文	
195							
78				堅緻			
14	甕	口縁部破片		明灰褐色	砂粒少量混入	帯縞波状文	炭化物付着
196						暗灰褐色	
78				堅緻			

番 号	器 種	残 存 度	法 量	色調状況	胎 土	図 案	備 考	
住居址			器底	白色		外底		
十 番			口径	褐色		内面		
民			底径	褐色				
14	壺	口縁部(拓本)		白色細粒少量	混入	帯線状文→縹状文		
197						ワコナテ 頸部ハケーナテ		
78				藍 緑				
14	壺	口縁部(拓本)		褐色	白色・褐色	帯線状文	器底半底	
198				細粒少量混入		口縁部ヨコナテ		
78				やや藍緑				
14	壺	口縁部(拓本)		褐色			パレススタイル七 器口縁部	
199						頸刺突文羽状		
78				藍 緑				
14	壺	胴部(拓本)		明褐色	白色・灰色	帯線状文 下半部ハケ		
200						細粒多量混入		
78				藍 緑				
14	壺	胴部(拓本)		灰褐色	白色・褐色	甲き目		
201						細粒多量混入	ハケ	
78				藍 緑				
14	壺	口縁部(拓本)		褐色	白色細粒混入	帯線状文 口唇部ヨコナテ	外面スス付着	
202						ミダキー口唇部ヨコナテ		
78				藍 緑				
14	壺	胴部(拓本)		明褐色	白色・灰色	甲き目		
203						石英細粒多量	ハケ	
78				藍 緑		混入		
14	壺	胴部(拓本)		灰褐色	石英粒多量、	甲き目	内面スス付着	
204						白色・灰色細		ナテ
78				藍 緑		粒少量混入		
14	壺	胴部(拓本)		灰褐色	白色・灰色・	帯線状文		
205						褐色細粒少量	ハケ	
78				藍 緑		混入		
15	壺	胴部(拓本)		黄褐色	白色微粒、石	甲き目		
206						英粒少量混入	ナテ	
78				藍 緑				
15	壺	胴部(拓本)		褐色	白色・赤褐色	甲き目		
207						石英細粒少量	工具によるナテ	
78				藍 緑		混入		
15	壺	口縁部(拓本)		褐色		ハケ	パレススタイル七 器口縁部	
208						頸刺突文羽状に2段帯線		
78				藍 緑				
21	S 字 壺	口縁部(拓本)		淡黄白色	白色・灰色細	帯線状文		
209						粒、透明石灰	ナテ	
78				藍 緑		・出得多量混入		
21	壺	胴部(拓本)		灰褐色	白色・灰色	甲き目		
210						細粒少量混入	ヨコナテ	
78				藍 緑				

番号	器種	規寸度	注量	色調規成	胎土	調 整	備 考
住居址			器高	色 調		外面	
土 部			口径	規 成		内面	
區			底径	底 成			
21	壺	胴部 (拓本)	明褐色	白色・灰色・褐色粒/少量混入	印き目		
211					ヨコナデ		
78			藍 緑				
23	壺	胴部 (拓本)	灰褐色	白色細粒少量混入	印き目		
212					ナデ		
78			藍 緑				
24	壺	胴部 (拓本)	明褐色	白色・灰色・緑粒少量混入	印き目		
213					ヨコナデ		
78			藍 緑				
24	壺	胴部 (拓本)	暗灰褐色	白色・褐色・緑粒少量混入	縦線状文		
214					ヨコナデ		
78			藍 緑				
30	壺	胴部 (拓本)	灰褐色	白色・灰色・緑粒少量混入	縦線状文		外面やや厚成
215					ヨコナデ		
78			やや軟黄				
47	壺	胴部 (拓本)	暗褐色	白色・赤褐色・石英細粒少量混入	印き目		
216					ヨコナデ		
78			藍 緑				
47	壺	胴部 (拓本)	明褐色	白色・石英細粒少量混入	縦線状文		
217					ヨコナデ		
78			藍 緑				
47	壺	胴部 (拓本)	明褐色	白色・灰色・石英細粒少量混入	縦線状文		
218					ヨコナデ		
78			藍 緑				
±37	壺	胴部 (拓本)	褐色	白色・灰色・粗粒混入	印き目		
219					ナデ		
79			藍 緑				
±139	壺	胴部 (拓本)	暗灰色	白色・灰色粗粒混入	印き目・クオイ目 (叩きを潰す)		
220					ナデ		
79			藍 緑				
±151	壺	胴部 (拓本)	灰褐色	白色・灰色粗粒混入	印き目		
221					ナデ		
79			藍 緑				
±175	壺	胴部 (拓本)	暗褐色	白色・灰色細粒少量混入	ボタン状貼付		器面著しく厚成
222							
79			やや軟黄				
±179	壺	胴部 (拓本)	暗褐色	白色細粒少量混入	ナデ ボタン状貼付		
223					ミヅキ(?)		
79			藍 緑				
±223	壺	胴部 (拓本)	暗褐色	白色・赤褐色・粗粒多量混入	印き目		成部付近
224					ナデ		
79			藍 緑				

番号	器種	残存度	法量	色調構成	胎土	調	整	備考
住野辻			器底	色調		外面		
十 器			口内	焼成		内面		
室			底産					
±275	甕	胴部(拓本)		赤褐色	白色・赤褐色 緑粒少量混入	叩き目		底形付近
225				緑褐色		ナテ		
79				藍 緑				
±339	甕	口縁部(拓本)		褐色	灰色・赤褐色 石灰粒微量混入	縞縞状文		
226				藍 緑		ミガキ		
79				藍 緑				
±752	甕	胴部(拓本)		明褐色	白色・石英・ 黒石粒微量混入	縞縞状文		
227				藍 緑		ナテ		
79				藍 緑				
±810	甕	胴部(拓本)		暗褐色	白色・灰色・ 赤褐色細粒少 量混入	叩き目→カキ目(叩きを潰す)		
228				藍 緑		ハケ		
79				藍 緑				
±810	甕	胴部(拓本)		暗褐色	白色細粒・石 英粒少量混入	叩き目		内面学減
225				藍 緑				
79				藍 緑				
±857	甕	胴部(拓本)		赤褐色	白色・赤褐色 細粒少量混入	叩き目		底形付近 内面学減
230				藍 緑				
79				藍 緑				
品:4	甕	胴部(拓本)		黄褐色	白色・石英細 粒少量混入	叩き目		
231				藍 緑		ナテ		
76				藍 緑				
源14	甕	胴部(拓本)		明褐色	白色細粒微量 混入	叩き目		内面学減
232				藍 緑				
76				藍 緑				
整 2	甕	胴部(拓本)		黄褐色	白色・灰色細 粒少量混入	叩き目→ハケ(叩きを潰す)		
233				中々堅緻		ナテ		
79				中々軟質				
整 2	甕	胴部(拓本)		黄褐色	赤褐色・石英 細粒少量混入	叩き目		
234				中々軟質		ナテ		
79				中々軟質				
整 3	甕	胴部(拓本)		黄褐色	白色・灰色 細粒少量混入	叩き目		
235				中々軟質		ナテ		
79				中々軟質				
整 3	甕	胴部(拓本)		黄褐色	白色・灰色・ 赤褐色細粒・ 石英粒少量混 入	叩き目		
236				藍 緑		ヨコナテ		
79				藍 緑				
整 3	甕	胴部(拓本)		黄褐色	白色・赤褐色 石英細粒少量 混入	叩き目		内面学減
237				藍 緑				
79				藍 緑				
横出田	甕	胴部(拓本)		赤褐色	白色細粒微量 混入	縞縞状文 縞縞曲線文		
238				藍 緑		ハケ		
79				藍 緑				

(3)陶磁器

中近世の土器・陶磁器は土師質土器1点を含めて24点である。そのうち測図可能なものを9点図示したが、遺物の量は少ない。1は土師質の皿で口縁部は小さく立ち上がり、内側に調整痕がある。中世後半のものか。土壌775出土である。2・3は東海系の埴輪である。2は直線的に立ち上がり、口縁は上端部に浅い凹線をもって肥厚している。胎土にはかなり砂粒を含み、内面下部は磨耗している。3は底部で高台は横ナデにより貼り付けられている。内面は強く磨耗している。この他図示しなかったが埴輪胴部破片が1点ある。これらは13C後半から14C前半のものと思われる。出土遺構は2は土壌339、3は7区検出面である。4は無釉の壺底部であるが、内外ともに明るい褐色を呈している。内面はヨコナデ、外面は斜めに工具をはしらせている。土壌368出土。5は焼締の壺らしいが底部には糸切痕があり、底部外側は削りにより調整している。内面には灰釉が付いているが、外面は無釉である。土壌785出土。ほかに常滑壺片2点が出ている。これらは中世後半のものと思われる。6は折縁深皿である。口縁部は直に立ち上がり、強く外側に折れる。灰釉は薄黄緑色で内外上半に厚くかかる。胎土は灰白色で焼成はよい。瀬戸美濃系の15C頃のものである。土壌657出土。7は鉄靴の皿で釉が内外上部にしかかかっていない。口縁部はくの字状に開いている。瀬戸美濃系と思われるが時期は不明。土壌179出土。図以外のものでは瀬戸系の瓶子破片、灰釉の碗の破片、鉄釉の徳利破片などがある。

8・9は磁器である。8は黒ゴスで草状の文様が描かれ、高台内には字が書かれている碗である。12区検出面出土。9は杯で内面に金文字で『五(十)』と『皇』が書かれているらしい。松本五十連隊の杯ではないか。13区検出面出土。8・9とも大正・昭和のものと思われる。

2. 石器・石製品

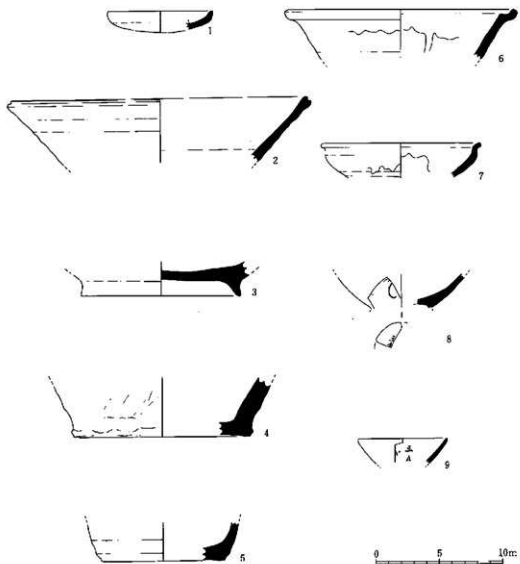
今回報告する石器は1987(昭和62)年の発掘調査のうち、果嘗は場整備事業予定地内出土の石器である。石器は定形的な石器のほか、2次加工のある剥片・使用痕のある剥片・剥片・砕片が多数出土している。このうち今回は定形的な石器に限って報告する。向畑遺跡では1988(昭和63)年にも継続して発掘調査が行われ、来年度に報告書が刊行される予定なので、向畑遺跡の石器群全体についてはそれに譲りたい。

整理にあたっては実測できるものはすべて図化し、掲載することにした。また、すべての石器について出土地点・法量・石質・欠損状況などを一覧表に登載している。

今回の調査では縄文時代の石鏃、古墳時代の砥石、それから石製品として硯1点が出土している。このうち特徴的なものとして、前同様に縄文時代早期後半に多くみられる特殊磨石1点が出土している。また、石鏃のなかに有茎鏃3点があり、そのうち1点はいわゆる飛行機鏃である。このことから付近には後・晩期の遺構の存在が推測される。

1) 石鏃(1~17)

17点出土している。石鏃は基部の形態と茎の有無から分類できる。本遺跡では凹茎・無茎鏃、凹



第60圖 陶磁器

基・有茎鏃、円基鏃、平基鏃が出土している。円基・有茎鏃は3点(1・4・15)出土している。有茎鏃はこの地域では縄文時代後期後半以降に出現する。また、4については両側縁に張り出しをもつ、晩期に特徴的な飛行鏃の一種である。調査地周辺に該期の遺構があるかもしれない。なお、1は片側に整形の剥離がみられないこと、主要剥離面側から基部を作り出すための剥離が粗いことから未製品と考えられる。円基鏃(2)はシンメトリーだが、先端が尖らないこと、整形剥離が粗くて横断面が厚いことから未製品の可能性がある。平基鏃は2点(12・16)出土している。このうち12は左右非対称、整形剥離が粗く横断面が厚いことから未製品と考えている。

円基・無茎鏃は11点出土している。このうち、9は整形剥離が粗いことから未製品と考えている。11は先端からの加撃で上半を失っている。破損面に不純物が見えていることから、これが原因で破損してしまったと考えられる。

石材については、1がチャート製で、他は黒曜石である。

2) 石錐(18~21)

調整剥離によって先端部を作り出している石器で、石鏃以外のものを石錐として扱った。4点出土している。18は棒状を呈するチャート製である。19~21はつまみ部をもつ黒曜石製のものである。19は片側面に軋離を加えて錐部を作り出す途中の未製品と考えている。19~21にはポジティブなバルブ・バルブ・スカーを一部に残していることから、軋片のバルブのふくらみを利用してつまみを作り出していることがうかがえる。また、いずれも片側縁の片面にのみ軋離を加えて錐部を作り出している点が共通している。

3) 石匙(22・23)

楕形・直刃タイプが2点出土している。22はつまみに接続する側縁部につぶれがある。着柄または紐等を縛った際にできた痕跡と考えられる。黒曜石製。23は縦長軋片を素材にする石匙である。つまみは剥離方向に対して直角に取り付けられている。刃部は両面加工である。しかし、背面側が斜度の急な軋離であるのに対し、腹面側は浅い剥離であるため、断面で見ると片刃状を呈している。

4) ピース・エスキュー(24~30)

7点出土している。すべて黒曜石である。このうち25・27・28は上・下端につぶれが生じている。いずれも上からの加撃によると思われるが、平坦な打面は伴っていない。また、加撃の結果生じた剥離面はネガティブである。なお、28の片側縁には2次加工が行われている。24・30は截断面をもつもので、30の上端にはつぶれが観察される。

5) スクレイパー(31~38)

8点出土している。石材・素材の軋片・刃部の形態等にバラエティーがある。31はチャートの横長軋片を素材にしている。2側面に両面加工の刃部をもつが、石匙の製作途中で失敗したものかもしれない。32は軋片の薄い縁辺を利用して刃部としている。整形のための剥離は両側に行われてい

るが、背に当たる部分は背面のみ剥離が集中している。33は打面・ポジティブなバルブをもつ剥片の末端に両面加工により刃部を作り出している。背面側は急斜度の剥離なので、断面では片刃を呈している。35は縦長剥片を素材にしている。打面側の厚い側面に両面から粗い剥離が行われている。36は黒曜石の縦長剥片を素材にしている。背面の片側面に急斜度の剥離を行って刃部としている。37はチャートの縦長剥片を素材にしている。片側面に両側から浅い剥離を行っているが、背面側の調整のほうが丁寧な剥離を行っている。38は縦長剥片を素材にしている。刃部加工は片側面に両面から行われている。

6) 打製石斧 (39~53)

15点出土している。平面・刃部の形態から分類することができる。内訳は平面形態では撥形10・短筒形3・不明2点、刃部の形態では凹刃7・偏刃2・不明6点である。また、ほとんどの石器には使用痕が観察されている。使用痕には着柄痕と考えられる側縁部のつぶれ、実際の使用でできる刃部の摩耗があった。欠損状況を見ると完形品はなく、頭~胴部を残すものが多い。頭部だけのものは5点(43・48・49・51・52)あるが、刃部のみ・下半部が残っているものはない。

次に特徴的なものについて述べる。40は頭頂部からの加撃で頭~胴部の一部が縦長剥片状に剥離しているため、刃部に比べて胴部が薄くなっている。この剥離された面にも側縁調整のための剥離が行われている。着柄のために頭~胴部の厚さを減じる例はないので特殊なものである。45は側縁~刃部にかけて丁寧な剥離を行って整形している。ところが、刃部の末端には平坦面(おそらくは礫の表皮~自然面)があり、V字状の刃部を呈していない。使用には不向きなため未製品かと思われたが平坦面と体部が作り出す稜のところが摩耗している。また、側縁部にはつぶれが見られる。このことから、実際に使用されていたことが考えられる。

7) 磨製石斧 (54・55)

5点出土している。いずれも小片で頭~胴部の一部と考えられるが、石斧の形状・刃部は全くわからない。ほとんどのものが使用の際に破損してしまったものと考えられる。

8) 敲・磨・凹石 (56~63)

9点出土し、実測可能な8点を図示している。一般に敲石・磨石・凹石と呼ばれるものは、それぞれ単独で敲打痕・磨面・凹部をもつものは少ない。多くは複数の使用痕をもっている。そのため、個々の名称は付けず、敲・磨・凹石として扱った。これらの石器は自然礫をそのまま、あるいは積極的に加工することなく使用されるので認定が難しい。使用頻度が多い石器は礫の表面が平滑になったり、色調が変わったり、非使用部分との境に稜が生じてくるので識別は可能である。しかし、使用頻度の少ないものについては自然礫との区別が難しい。したがって、今回の調査では9点が出土しているが、実際はもっと多いのかも知れない。

実測図については、磨面を———(平面)・◁— ▷(断面)、敲打痕は———(平面)・←— →(断面)で表現している。個々の石器の使用痕・寸法等については一覽表を参照されたい。以

下、特徴的なものに付いて述べる。

60は扁平な円礫を素材にしている。そして、この側縁部は円周に沿って敲打されている。また、両面の平坦部には磨面がみられる。さらに、片面の中央には敲打痕も残されている。ただし、この敲打痕は、側縁部の敲打痕とは異なり、台石としてつかわれたものと考えている。61は特殊磨石である。⁽¹⁾本石器では機能磨面2面のほかに、上・下縁に敲打痕、胴部凹面には凹部を伴っている。一般に特殊磨石の機能磨面と呼ばれているものはザラザラとしていて、機能磨面と調整磨面との境に小剝離痕が観察されるものが多い。これらのことから機能磨面は磨(す)る以外に敲(たた)くことに近い動作が行われていたことが考えられている。61では機能磨面と敲打痕の2種類の使用痕があるが、敲打痕のほうが機能磨面よりもザラつきが粗く、両者は明確に区別される。この2つの使用痕が1つの目的の中で使い分けられていたのか、それぞれ別の用途があったのかは今後の検討課題である。

なお、被熱により赤色化・表面の剥落がみられるものが5点ある。このうち、57・62は破損部分にも被熱による赤色化がみられた。

9) 砥石 (64~68)

7点出土し、実測可能な5点を図示している。65~67は大きさ・重量から置き砥石と考えられる。65は被熱により赤色化と煤の付着がみられるが、底面と研磨面にはほとんど及んでいない。66は砥石を置きやすくするために、礫を削って底部としている。67は砥面が4面もあるが、手で保持するには重すぎるので置き砥石と考えられる。64・68は手持ちの砥石である。ともに、よく使い込まれている。このほかに、研磨痕をもつ小破片が2点出土している。

10) 硯 (69)

ビット123から1点出土している。製作時の研磨痕や使用時の墨痕はよく残っている。特に、研磨痕については、側面部分に長軸に直交する非常に粗い研磨痕と長軸に平行する仕上げの細かい研磨痕が観察される。硯面は花介様の輪郭に作られている。また、上面には沈線で硯面を長方形に囲んで、さらに文様を四隅に彫り込んでいる。

註1 特殊磨石の各部の名称については、

八木光則「いわゆる「特殊磨石」について—中郡地方における縄文早期の石器研究への関関誌別—」、『信濃』第28巻第4号1976を参考にした。

なお、実測図では機能磨面をスクリーントーンで表現している。

石 鏃

表 4 石 器 一 覧 表

No.	図 No.	分 類	注 記	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石 質	欠 損 状 況	備 考
1	1	凹茎・有茎	1住No.3	(3.77)	1.87	0.35	(2.12)	チャート	先端部欠	未製品
2	2	凹茎・無茎	1住覆土	1.72	1.86	0.54	1.75	黒曜石	完形	未製品か
3	3	凹茎・無茎	2住北西	(1.29)	(1.38)	0.29	(0.45)	黒曜石	上半・片脚端欠	
4	4	凹茎・有茎	2住北東	(2.64)	1.43	0.49	(1.49)	黒曜石	基部欠	飛行機痕
5	5	凹茎・無茎	2住検出面	1.95	(1.15)	0.32	(0.44)	黒曜石	片脚欠	
6	6	凹茎・有茎	11住No.42	2.23	(1.37)	0.31	(0.51)	黒曜石	片脚端部欠	
7	7	凹茎・無茎	11住北西	(2.32)	(1.33)	0.42	(0.82)	黒曜石	両脚欠	
8	8	凹茎・無茎	11住北西	(1.52)	(1.23)	0.32	(0.52)	黒曜石	先端・両脚欠	
9	9	凹茎・有茎	土層12	1.88	2.06	0.62	1.66	黒曜石	完形	未製品
10	10	凹茎・無茎	土層21	(1.26)	(1.39)	0.25	(0.39)	黒曜石	上半・片脚欠	
11	11	凹茎・無茎	土層26	(1.91)	1.81	0.49	(1.24)	黒曜石	上半欠	未製品か
12	12	平茎・無茎	土層216	1.99	1.48	0.47	1.26	黒曜石	完形	未製品か
13	13	凹茎・無茎	土層216	1.39	1.07	0.38	0.42	黒曜石	完形	
14	14	凹茎・無茎	9区検出面	(1.83)	1.52	0.29	(0.69)	黒曜石	両脚欠	
15	15	凹茎・有茎	9区検出面	1.93	(1.34)	0.50	(0.65)	黒曜石	片脚欠	
16	16	平茎・無茎	10区検出面	2.02	(1.09)	0.40	(0.93)	黒曜石	片脚端欠	
17	17	凹茎・無茎	13区検出面	2.01	1.08	0.27	0.46	黒曜石	完形	

石 鏃

No.	図 No.	分 類	注 記	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石 質	欠 損 状 況	備 考
1	18	棒 状	5住No.1	3.03	1.23	0.54	1.99	チャート	完形	
2	19	つまみ	11住No.45	(3.01)	1.49	0.49	(1.55)	黒曜石	基部端欠	
3	20	つまみ	11住No.45	1.56	1.14	0.36	0.35	黒曜石	完形	
4	21	つまみ	11住床面	2.26	1.12	0.41	0.73	黒曜石	完形	

石 匙

No.	図 No.	分 類	注 記	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石 質	欠 損 状 況	備 考
1	22	楕形・五刃	11住覆土	(2.23)	(2.16)	(0.57)	(1.98)	黒曜石	両端欠	削 削 部 つぶれ
2	23	楕形・五刃	7区検出面	3.55	4.39	0.87	12.58	チャート	完形	

ピエス・エスキュー

No.	図 No.	注 記	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石 質	欠損状況	備 考
1	24	土壌14	2.35	1.22	0.82	1.94	黒曜石	完形	
2	25	土壌231	2.21	1.37	0.76	1.96	黒曜石	完形	
3	26	土壌339	2.21	1.35	0.65	1.63	黒曜石	完形	
4	27	土壌866	1.63	1.49	0.69	1.56	黒曜石	完形	
5	28	ビット11	3.42	2.12	0.73	4.59	黒曜石	完形	
6	29	1区検出面	2.41	1.55	0.66	2.09	黒曜石	完形	2次加工あり
7	30	9区検出面	2.81	1.45	0.68	2.19	黒曜石	完形	

スクレイパー

No.	図 No.	注 記	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石 質	欠損状況	備 考
1	31	1住覆上	(2.16)	(2.77)	(0.33)	(2.05)	チャート	片側刃欠	
2	32	11住No.44	5.18	7.26	0.99	49.65	砂 岩	完形	
3	33	土壌128	3.13	3.23	0.75	9.12	チャート		
4	34	土壌177	(4.86)	(5.53)	(1.27)	(37.92)	砂質泥岩	両側刃欠	
5	35	土壌584	3.88	7.77	0.75	25.85	砂質泥岩	完形	
6	36	土壌871	4.86	2.03	0.82	6.45	黒曜石	完形	
7	37	9区検出面	3.56	5.62	0.82	22.89	チャート	完形	片側に欠りあり
8	38	9区検出面	(3.71)	(4.42)	(0.53)	(12.29)	砂質泥岩	両側刃欠	

打製石斧

No.	図 No.	分 類	注 記	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石 質	欠損状況	備 考
1	39	撥・円刃	2住	(9.35)	7.40	1.85	(186.98)	硬 砂 岩	上半欠	
2	40	撥・円刃	11住No.35	(11.24)	(4.24)	(2.04)	96.81	緑色凝灰岩	頭～胴部欠	側縁・刃縁部つぶれ
3	41	短冊・円刃	11住	(9.34)	3.64	1.42	(56.44)	緑色凝灰岩	上端欠	側縁部つぶれ・胴部摩耗
4	42	短冊・不明	11住	(8.32)	(4.28)	(1.73)	(99.10)	千 夜 岩	下半欠	側縁部つぶれ
5	43	撥?・不明	14住	(6.55)	(4.70)	(0.87)	(29.83)	砂質泥岩	上端・下半欠	
6	44	短冊・偏刃	14住	(12.71)	3.74	1.30	(79.30)	砂岩(ホルンヘルス)	頭部欠	側縁部つぶれ・刃部摩耗
7	45	撥・円刃?	土壌132	(9.36)	(4.13)	1.14	(72.54)	硬 砂 岩	頭部欠	側縁・刃部摩耗
8	46	撥・円刃	土壌203	(9.22)	(4.63)	(2.00)	(105.50)	硬 砂 岩	刃部欠	側縁部つぶれ・刃部摩耗
9	47	撥・偏刃	土壌320	(7.95)	4.33	1.42	(55.91)	硬 砂 岩	頭部欠	刃部摩耗
10	48	不 明	土壌584	(8.35)	(3.87)	(1.48)	(48.74)	硬 砂 岩	胴～刃部欠	
11	49	撥・不明	7区検出面	(10.69)	(9.37)	(2.41)	(37.80)	安 山 岩	胴～刃部欠	側縁部つぶれ
12	50	撥・円刃	9区検出面	(14.40)	7.25	2.89	(278.12)	砂岩(ホルンヘルス)	刃部端欠	側縁部つぶれ・胴部摩耗
13	51	不明・円刃	9区検出面	(7.08)	(5.49)	(1.67)	(91.49)	硬 砂 岩	上半・刃端部欠	側縁部つぶれ
14	52	撥・不明	9区検出面	(7.69)	(4.43)	(2.12)	(87.39)	硬 砂 岩	下半欠	側縁部つぶれ
15	53	撥・不明	15区検出面	(9.14)	(4.61)	(1.79)	(95.83)	硬 砂 岩	刃部欠	側縁部つぶれ

磨製石斧

No.	図 No.	注 記	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石 質	欠損状況	備 考
1		13住	(2.83)	(3.20)	(0.41)	(3.21)	砂質泥岩	一部残	
2	54	14住南東	(4.45)	(5.10)	(1.99)	(14.78)	砂質花崗	一部残	
3		15住	(5.59)	(3.94)	(0.91)	(23.01)	砂岩(細粒)	一部残	
4		土境755	(5.97)	(3.77)	(0.93)	(14.78)	砂 岩	一部残	
5	55	16区横出面	(7.30)	(2.53)	(1.34)	(33.92)	砂質泥岩	一部残	

凹・鼓・磨石

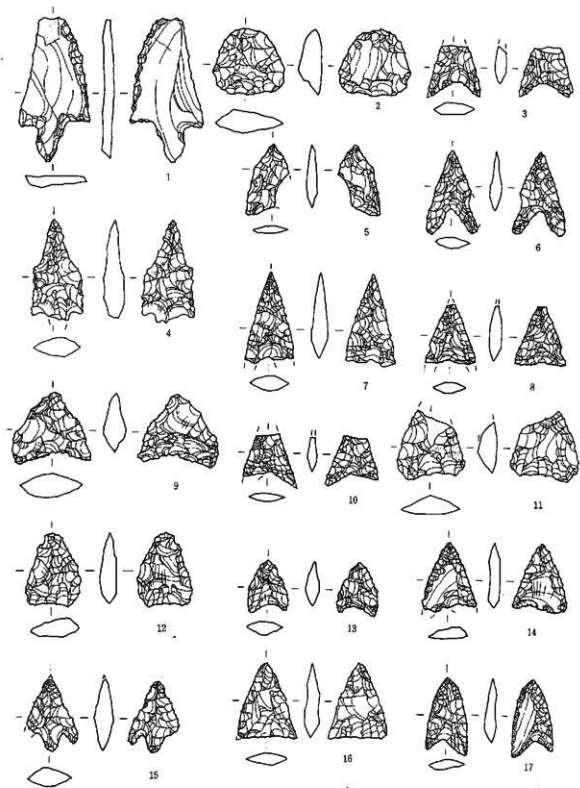
No.	図 No.	凹 部	鼓 形	磨面	注 記	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石 質	欠損状況	備 考
1				○	11住横出面	(3.54)	(4.43)	(1.93)	(34.61)	安山岩	一部残	被熱、石棒
2	56		○	○	11住No.43	(9.49)	(7.31)	(4.30)	(354.50)	安山岩	1/2欠	被熱
3	57			○	土境205	(12.53)	(10.66)	2.89	(464.80)	石英閃石	1/2欠	被熱
4	58		○	○	土境205	(9.33)	(4.84)	(3.18)	(169.23)	硬砂岩	1/2欠	
5	59			○	土境275	6.85	6.60	2.17	139.05	砂 岩	完 形	
6	60		○	○	ビット80No.1	13.01	9.75	4.32	849	砂 岩	完 形	
7	61	○(2+1)	○	○	ビット134	13.85	7.33	5.49	926	石英閃石	完 形	被熱、特種磨石
8	62	○(2+2)	○	○	10区跡土	(9.67)	(6.01)	(4.25)	(314.80)	安山岩	1/2欠	被熱
9	63			○	10区跡土	11.63	8.44	2.33	282.82	砂 岩	完 形	

砥 石

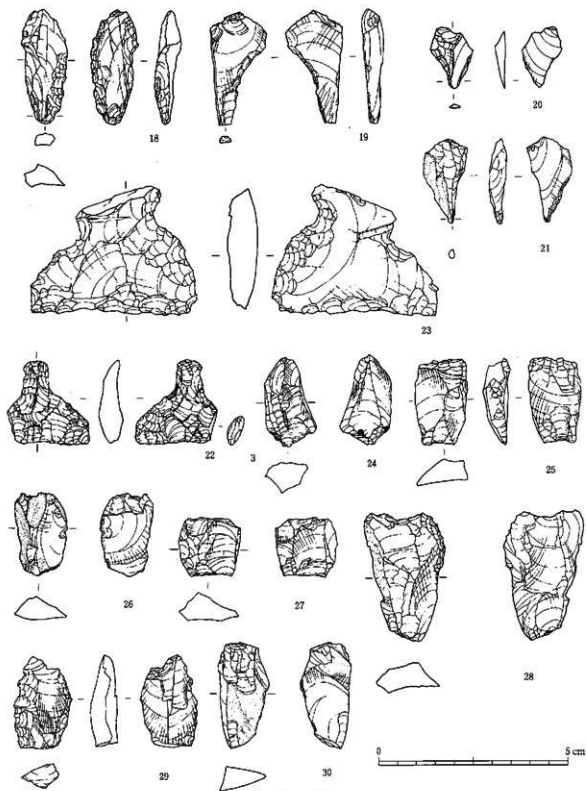
No.	図 No.	注 記	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石 質	欠損状況	備 考
1	64	14住	5.90	1.06	1.57	28.13	泥 岩	完形	砥面4
2		14住北西床面	(6.30)	(4.88)	(1.02)	(31.55)	砂 岩	一部残	(砥面1)
3	65	24住	(34.20)	(20.10)	(8.35)	(7250)	石英閃石	断面欠	砥面1、置き砥
4	66	30住ビット14	32.30	9.85	8.15	3680	硬砂岩	完形	砥面1、置き砥
5	67	土境810	(24.95)	(12.05)	(6.85)	(3250)	硬砂岩	下部欠	砥面4、置き砥か
6	68	11区横出面	(5.01)	2.11	1.93	(44.91)	凝灰岩	両端欠	(砥面4)
7		13区横出面	(4.79)	(3.66)	(1.02)	(9.25)	砂 岩	一部残	(砥面1)

砥

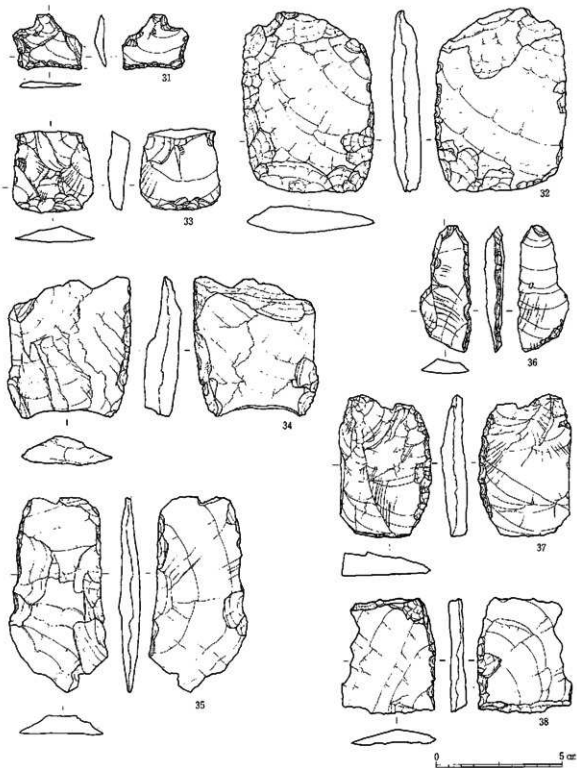
No.	図 No.	注 記	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石 質	欠損状況	備 考
1	69	ビット123	9.92	4.51	1.61	24.86	粘板岩	完形	



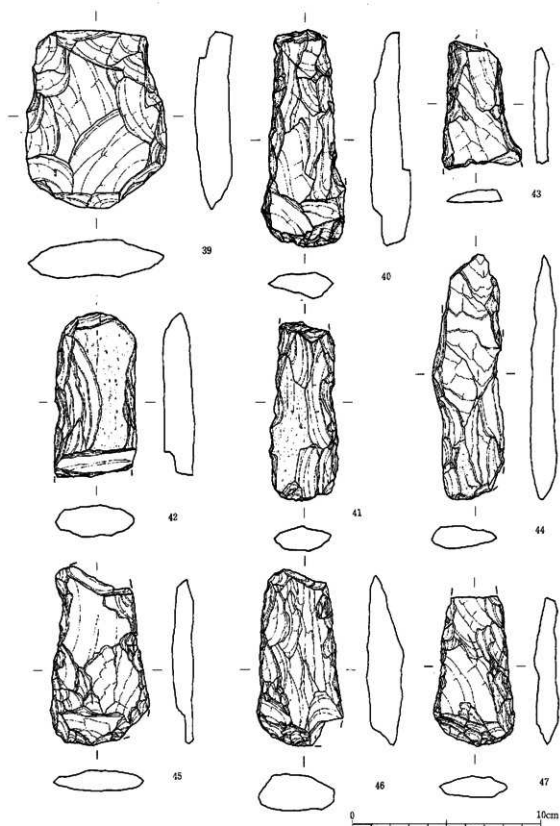
第01圖 石器(1)



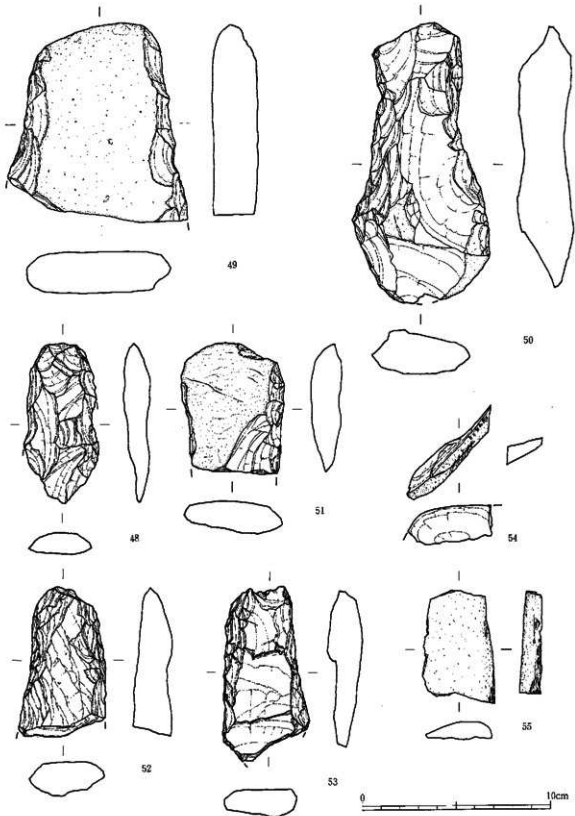
第82图 石器(2)



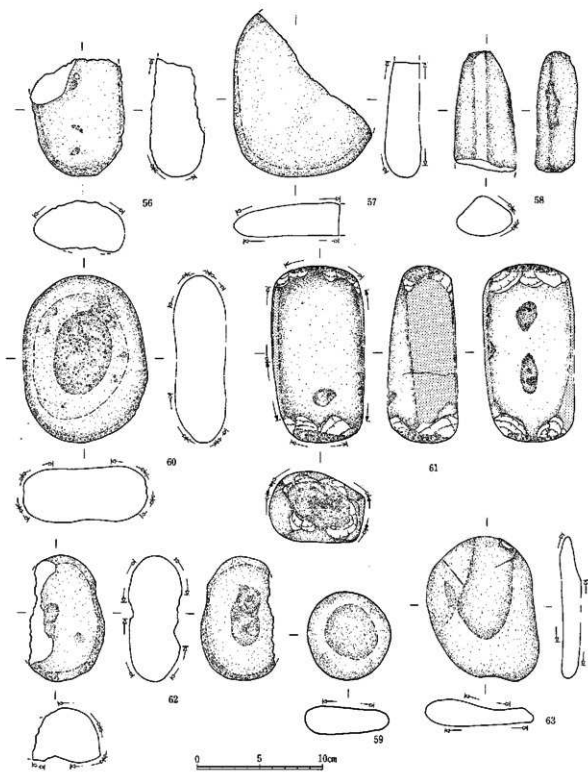
第89圖 石器(3)



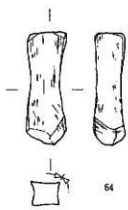
第84圖 石器(4)



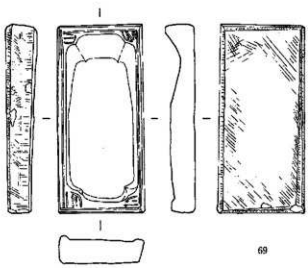
第55圖 石器(5)



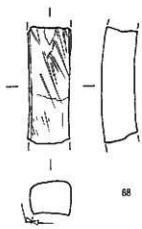
第66圖 石器(6)



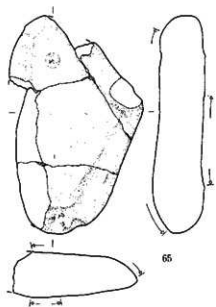
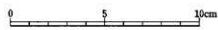
64



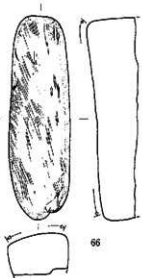
69



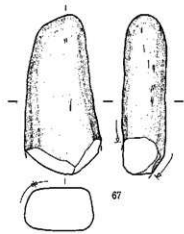
68



65



66



67



第87圖 石器(7)

3 鉄器・銭貨

検出された鉄器・古銭は19点で殆どが土壌より単独出土している。1は長さ42.5cmの大きな鉄鉗で、古墳時代の第14号住居址より出土したものである。ただこの住居址のすぐ南には方形周溝墓があり、あるいはその遺構のものが混在したということも考えられる。鉄鉗は明らかに鍛造時に用いられたものであるが、鉄釘以外鍛造に関するもの出土がない。鉄鉗は長野県内では飯田市竜丘古墳群¹⁾と佐久市の周防畑遺跡(H2号住居址、平安時代)²⁾からの2例が見られる。この2例の鉄鉗の大きさは37~38cmで本址の方がやや大きい。刃部と柄部のバランスを見ると、竜丘例に似ているが、刃と柄との比率は本址例が1:2であるのに対して、竜丘例では1:1.6である。刃部の先端は握みやすく幅広に作られ、柄部分は四角であるが、先端に行くにしたがって丸くなる。現状では刃部が中心部より大きく反りかえって曲がっている。2~6は釘状のものであるが、確実に釘と言えるものは4・5である。4は頭が丸く現代の釘と似た形であり、5は角釘で頭も四角い。6は上部2cmあまりまで中空のもので煙管の吸い口状をしているが、用途不明である。7は鎌の先端部で古墳時代のものと言えよう。8も同様の鎌とも見えるが、断面は扁平である。9は穴の開いた薄い板状のものであるが、形状・用途不明である。10は扁平な鉄板で鉄鉗状ともいえるが、一端は丸みをもって、やや反っている。他方の端も切損時に曲ったものか角が反っている。用途については不明である。

古銭は9枚出土しているが、1枚は劣化が激しく図示できない。11~14は図示出来なかった1枚と共に六道銭として用いられたもので、土壌623より出土している。図No.の順に銭名を並べると、政和通宝、元祐通宝、至元通宝、政和通宝、図示できなかった1点は元豊通宝らしい。何れも火がかかっている。15は元〇通宝で土壌640出土。16は元豊通宝で土壌642出土。17も元豊通宝で土壌667出土。18は熙寧通宝で土壌708出土である。土壌については墓址と見ているので、これらの鉄器・古銭は埋葬時に死者とともに葬られたものと考えられる。釘類については木棺等木製品に使われていたものであろう。土壌の多さに比して、遺物の少ないことが特記される。

註1) 土屋長久「周防畑遺跡」長野県佐久市緊急発掘調査報告書 1980 佐久市教育委員会

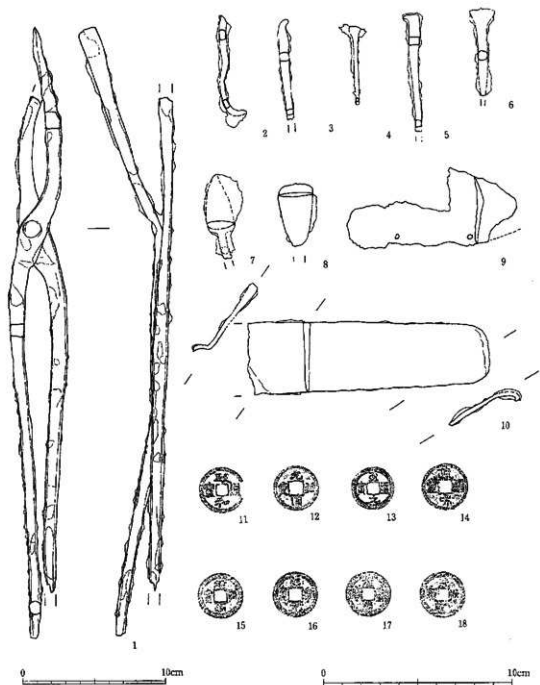
註2) 岩崎中臣・松尾昌彦「長野県史」考古資料編・第一巻(四)遺物・法橋、1988 長野県史刊行会

なお、これらの資料については宮下健司氏から指示をうけた。

鉄器・古銭

表 5

図 No.	出土遺構	種 別	寸 法 (cm)			重量 (g)	備 考
			長さ	巾	厚さ		
1	14号住居址	鉄 鋸	42.5	41	1.4	345	一方両端欠失
2	10区	釘状鉄器	(5.9)	< 0.6 >	< 0.4 >	(5.0)	
3	土壇251	"	(5.3)	< 0.5 >	< 0.5 >	(3.3)	
4	土壇621	釘	(4.1)	< 0.25 >	< 0.2 >	2.0	
5	土壇703	"	(6.2)	< 0.6 >	< 0.45 >	6.8	
6	土壇263	不 明	4.5	0.5	0.5	6.1	
7	竪穴 3	鉄 鋸	(4.5)	<身1.3 > <基0.4 >	< 0.4 >	7.2	
8	16号住居址	"	(3.2)	< 1.9 >	< 0.15 >	4.4	
9	土壇716	不 明	8.9			10.0	形状については全く不明
10	土壇357	鉄 板	(12.7)	< 3.8 >	< 0.4 >	(51.7)	
11	土壇623	古 銭					政和通宝
12	"	"					元祐通宝
13	"	"					聖元通宝
14	"	"					政和通宝
	"	"					元豊通宝か
15	土壇640	"					元○通宝
16	土壇642	"					元豊通宝
17	土壇667	"					"
18	土壇708	"					熙寧元宝



第88圖 鉄器・銭貨

4 土壌353出土の人骨について

埋葬状態：出土した人骨は頭部・胸郭部分などが全く欠失し、骨盤から下肢を主に残存する。最下方に骨盤が位置し、骨頭を同一レベルとする大腿骨・胫骨（左）が膝関節で強く屈曲され、土中で直立した形をとっている。右の下肢はやや散乱するが、胫骨下部に足骨が左右混在して一括されることから、両下肢は同じ状態で揃えられたものと判断される。手骨はこれらの骨の側方に集中するが、上腕骨はかなり東方に離れた位置で出土し、しかも同一骨の断片がさらに四散した個所で発見されている。また2本の歯がこれらの骨のやや南寄りレベルも浮上した遊離歯として出土している。頭蓋骨や脊椎骨・肋骨など個数の多い骨の残存が全く認められないことは、或る時期にかなり固化した切り取りや攪乱が行なわれた可能性もあり、判断し難いところである。残された各骨の位置で見ると、座位埋葬の埋葬位が推定される。

各骨の形状：すべての骨は骨表面の気泡が生じ、海綿質の露出が崩壊を早めている。

歯一下顎左第3大口歯(智歯)、歯冠が残り、冠内に歯根の一部が付着している。咬頭にわずかな咬耗を認める。他は上顎第3大口歯と見なされるものであるが歯冠のみで一部を欠いている。上腕骨一左、骨体の下半分で滑車の一部を欠く。手骨一舟状骨・有頭骨・大菱形骨などと第1中手骨(いずれも右)に若干の指骨が残る。寛骨一右、寛骨臼とその肩縁部分。左もほぼ同様であるがやや大きな断片である。寛骨臼は広く、坐骨結節は強度に発達し粗雑性に富む。大坐骨切痕の鋭く深い形態は極めて男性的な特徴を示す。仙骨一破砕された細片で一括されている。大腿骨一右、骨頭・骨幹・遠位関節部と離断するが、ほぼ原型を保つ。左、大転子や内・外側上顆を欠くが、全体の形状を残している。骨体は伸直で頑丈な形態である。しかし、粗線や筋線粗面の発達は中等度で、外側上顆上縁も弱い。骨体中央横断示数は103.5でヒラステルの形成はかなり弱度、同上部横断示数73.5は超広型に属し、前後の扁平性が著しく強い傾向を示す。脛骨一右、左ともに脛骨粗面を欠くがほぼ完存する。比較的頑丈な形態である。前縁は直状であるが鋭くなく、各縁も鈍で、ヒラメ筋線の発達は極めて弱度である。栄養孔部横断示数67.7で中脛であり、同中央横断示数70.0は正脛に属する。腓骨一右、骨体中央部分のみ。左、腓骨頭の一部を欠くが完存する。足骨一距骨(右、左)。踵骨(左)。舟状骨、楔状骨(内・中・外側)、立方骨はすべて左。第1中足骨(右、左)、その他若干の指骨が残存する。

結論：本人骨は両側下肢を主に残し、膝を屈曲・直立させた姿勢を保つが、上半身の部分の骨が悉く失われ、墓壙内での本来の埋葬状態は明確でない。残された骨の形質や第3大口歯の咬耗の程度から壮年期以降の年齢が推測される。長骨の頑丈さや、大坐骨切痕の形態からは明らかに男性とみられる。しかし、筋附着部位の発達は極めて弱度で、下腿筋群はさほど発達していなかったものと考えられる。

大腿骨の形質のなかで骨体横断示数を見ると、上部横断示数(右)が73.5で著しい扁平性を示す。

中世(鎌倉材木座)では78、江戸時代(湯島無縁坂)78、現代日本人(中部地方)で83とされ、この形質が消失していく過程で、本例の場合は同部の矢状径がほぼ通常なの比して、横径の値がかなり大きいのが要因である。なお、この形質は縄文時代人では扁平性と柱状形成が相伴うという特徴が顕著で、以後、柱状性が消失する結果となるが、本例の中央横断示数103.5は弱度で柱状形成は殆んど失われている。脛骨の骨体横断示数は栄養孔部で67.7、同中央部で70.0を示し、前者で中脛、後者で中脛と正脛の中間の値を示し、扁平脛骨の範囲には入らない。一般的に扁平脛骨は扁平大腿骨に伴う傾向があるとされるが、本例の場合は大脛骨の扁平性のみ残るのが特徴的である。しかし、他の項目では、おおむね現代日本人より大きな数値を示すが、形態の頑丈さによる結果とみられる。大腿骨(右)からPearsonの公式による推定身長は160.3cmとなる。

本人骨の残存程度はかなり良好で、細かな骨まで保存され、その形質は現代日本人に通じる特徴もみられ、断定できないが、近世以降の比較的新しい時期の埋葬人骨である可能性が高い。

信州大学医学部第二解剖学教室

西沢寿晃

参考文献

- 高橋 誠 現代日本人の骨の人類学的研究(英文)、人類学雑誌83:3 1975
 同上 現代日本人の骨の人類学的研究(英文)、信州医学雑誌14:2 1969
 香原志勢 四肢骨特に大腿骨の形質、鎌倉材木座発見の中世遺跡とその人骨、1956
 森本啓太郎 江戸時代人の骨、季刊考古学13, 1985

表-1 大腿骨計測値と比較資料

	大 腿 骨		
	上 瀬 353(mm)	中世(鎌倉) 平均値(mm)	現代人(中部) 平均値(mm)
最大長(1)	420	417.1	409.6
中央矢状径(6)	30	27.3	27.8
中央横径(7)	29	26.5	26.6
中央周(8)	93	84.5	85.3
上横径(9)	34	31.3	30.5
上矢状径(10)	25	24.2	25.2
中央横断示数(6/7)	103.5	104.9	104.8
上横断示数(10/9)	73.5	77.9	83.0

表-2 脛骨計測値と比較資料

	脛 骨	
	上 瀬 353(mm)	現代人(中部) 平均値(mm)
全 長(1)	344	325.7
中央矢状径(8)	30	29.0
營養孔部矢状径(8a)	31	33.2
中央横径(9)	21	21.3
營養孔部横径(9a)	21	24.0
骨体周径(10)	80	78.7
營養孔部周径(10a)	85	89.0
中央横断示数(9/8)	70.0	73.6
營養孔部横断示数(9a/8a)	67.7	72.9

- ※ 香原志勢(1956)
 ※※ 高橋 誠(1969, 1975)

第4章 結 語

向畑遺跡は丘状の台地上に位置しており、向畑古墳群の一部でもある。今回の周場整備事業に伴う第1次調査の総面積は5200m²であり、渠道建設工事に伴う発掘調査を加えると総面積は8100m²に及び、内調査で確認された遺構は竪穴住居址48、竪穴状遺構6、古墳2、方形周溝墓1、土壙94基、溝18、特殊遺構1になる。時代的に見ると縄文時代中期、古墳時代前期・中期、平安時代、中近世に亘っている。以下主な遺構を簡単に記述していく。

1. 竪穴住居址 縄文時代中期の11号住、古墳時代中期の15号住、住居址でない可能性が高い39号住を除いた他の45軒は古墳時代前期に属するものである。全体図（付図）を見ると調査地全体に平均的に分布しており台地上の平坦地に広く形成された様相を呈している。古墳時代前期の住居址で炉を伴うものは16軒、そのうち地床炉13軒、埋壺炉4軒で、縁石埋壺炉は2軒で確認された。位置的には柱穴間が11軒、中央にあるものが5軒である。埋壺はすべて柱穴間に位置している。支柱穴間を確認できたものはほとんどが4本柱で、隅丸長方形を呈する37号住のみが6本柱であった。特徴的な施設が認められたものでは、30号住にベッド状の段があるがその性格はわからない。床面・施設等から、改築の痕跡が認められるものには、13、17、40号生の3軒がある。焼失住居と断定できたものは40号住1軒であるが、12、44号住もそうであったかも知れない。本遺跡北、ほら貝山の北西端にある弘法山古墳を作った人達の生活基盤がまだつきとめられていないので、本遺跡の発掘成果が何かの手掛かりとなって、解明の糸口になればと思っている。今回の調査に引き続き、63年度に実施された第2次調査の整理が終了した時点で考えたい。

2. 古墳 向畑古墳群はカニ沢沢に沿って延びる丘陵状に東西に連なり、西側は坪の内古墳群に続き、尾根の先端で南に回っていると見ていたが今回の2基の発見により東端も南に向かっていくことが判った。

また第2次調査では新たに5基が発見され、このうち1基は丘陵から離れた常斜面に確認された。従来考えられていた丘陵上ばかりでなく台地の斜面にまで分布が及んでいたことになる。遺物より向畑6、7号古墳は5C後～6C初めのものと思われるが、造営者の生活基盤はまだつきとめられておらず、今後の課題である。

3. 土壙 向畑遺跡を代表する遺構であり、縄文時代中期、古墳時代前期、中～近世に亘る。中近世の墓址が殆どであるが、配石、封土等は確認されなかった。前項で評述した様にいくつかの集域と、その中に墓道と思われる空地を検出出来たことは大きな成果であった。尚第2次調査でも今回の調査区域西側約10,000m²を調査し、やはり中近世の墓址を含む多数の土壙を検出している。

発掘調査にあたっては松本建設事務所、中山土地改良区、中山公民館等関係者の方々にご協力頂いた。また松本市文化財審議委員桐原健氏、東京大学史料編纂所千々和到氏、長野県史編纂委員井原今朝雄氏他多くの方々にご教示頂いた。記して謝意を表します。

1982年、島田哲男氏は井戸尻縄年に基き、松本市牛の川・雨堀遺跡の出土土器を分析、松本平Ⅰ期～Ⅲ期の変遷を設定された。そのうち縄文中期初頭については、松本平Ⅰ期（九兵衛尾根Ⅰ式）、Ⅱ期（九兵衛尾根Ⅱ式）に分けられたが、当時良好な資料に恵まれなかったため、Ⅰ期は空白期、Ⅱ期は前半の様相が不明となっており、資料増加が待たれていた。

その後、1987年林山腰遺跡・向畑遺跡・前田木下遺跡、1988年向畑遺跡Ⅱと中期初頭の遺構・遺物の調査が相次ぎ、松本平Ⅰ・Ⅱ期の空白を埋め得る良好な資料が整ってきたと言える。また近年、当該期の土器研究も飛躍的に進歩し、従来混乱を招いていた既存型式が整理され、その系統、変遷が明らかになりつつある。

ここでは、近年最も整理がなされている三上徹也氏の研究成果に基き、雨堀・林山腰・向畑・前田木下遺跡の資料を主に用いて、松本平の中期初頭土器について考えたい。変遷は大きく4段階となり、第1段階は三上徹也氏のⅠ段階（今村啓爾氏の五領ヶ台Ⅰ式）、第2～4段階はⅡa～Ⅱc（五領ヶ台Ⅱ式、神谷原・大石式）に相当する。尚第1段階については、未だ資料が少なく、表採品も含んでいる点をおことわりしておく。

(1) 第1段階（第89図1～9）

林山腰土壙51出土資料他が挙げられる。器形・文様帯のあり方により縄文系・沈線文系の2者に分類される。これは各段階とも同様で、後者は鬮場系とされた一群である。

縄文系土器（5・3・8・9）

①器形 深鉢、鉢が存在する。深鉢は3に代表される2段ないし1段くびれるキャリパー形と、9の様な円筒形がある。前者の胴部は裾でやや振り出すものがある(5)。2段にくびれるキャリパー形は、文様帯のあり方により、下段のくびれが口頸部とも胴部とも受けとれるが、ここでは胴部としておく。尚キャリパー形には4単位の波状口縁をもつものも存在する。鉢は林山腰で1点知られる(8)。口縁部が直立ないしやや内湾し、小径の平底をなすものである。

②文様 口縁部の細線文、胴部の縦帯縄文が特徴的である。文様帯は基本的に口縁部2段、胴部1段に分かれ、横位に展開される。口縁部上段は縦位に細線文が施され(3・8)、時に格子目となる事もある。8は口唇に爪形文を施している。9は横位に縄文を施文し、新しい様相と考えられる。下段は細線文と三角印刻文の組合せや、山形押引文、瓦状押引文ないし半截竹管先端による刺突文(3・9)が充填される。下段～胴部にかけて、橋状把手が4単位付加されるのも特徴である(3)。胴部は地文として、両端ないしは片端に結節をもつ縄文を縦位に回転する。縄文帯の間隔は十分にとり、羽状縄文も存在する。施文は胴上部に行われ、口縁部と同様細線文や平行沈線・三角印刻文の組み合わせによる区画文や、「Y」字状文(8)が多く見られる。5は底部付近まで、平行沈線による区画が見られ、細線文による格子目文上に三角刻文や逆「U」字形の構図が描かれる。

沈線文系土器 (1・2・4・6・7)

①器形 全形の判明する資料はない。大きく外開する頸部に、「く」の字形に内屈する口縁部が取り付くものである。胴部の形態は6の様ToStrートなものである。

②文様 いわゆる「集合沈線文」を特徴とする。文様帯は口縁部、頸部、胴部に3分される。各文様帯内へは、半截竹管状工具により縦位、斜位、格子目、山形、瓦状押引等の平行沈線が充填される。口縁部文様帯は格子目(1)、斜位沈線(4)、瓦状押引文の他、羽状沈線も見られる(2)。口縁部には突起が1単位付加され(4)、口唇部に爪形文を施すもの(7)も多い。1の格子目文は斜位沈線上にソーメン状の粘土紐を貼付して描出し、古い手法と言える。推定4単位の橋状把手を有する点は、縄文系の要素と考えられる。頸部文様帯は斜位(2)ないし縦位(1・4・7)の平行沈線文が施される。縦位の場合密に行うものと間隔をおくもの(1・4・7)があり、後者は地文に縄文を施すものが多い(1・7)。胴部文様帯は3分帯の構成となるものが多く、上2分帯には格子目文、山形文が多く描かれる。腹下段は縦位の構成となり、縦位沈線、山形文、羽状文等が施文されるようである。6は雑な施文だが、胴部全体が縦位の構成と考えた方が良さそうな土器である。

以上、本段階の土器は出土例が未だ少なく、松本平での様相は判然としない。本段階内での新田は、ソーメン状粘土紐貼付の見られる1がより古い段階、口縁部に帯縄文の施される9を新しい段階に位置づけることができよう。沈線文系・縄文系の共存関係は、林山腰遺跡土壌51で捉えられる他は、一指資料が見られない。

(2)第2段階 (第89図10~19、第90図20~37)

林山腰遺跡土壌21等遺構内一括資料が多く出土している。

縄文系土器 (10~12・18・20・22・24~35・37)

①器形 前段階同様キャリバー形と円筒形の深鉢が見られる。前者は2段にくびれるもの(18)が減り、後者はその量を増す。波状口縁(19・25)も存在する。底部の張り出すものは少ない様である。

②文様 口縁部の帯縄文が特徴的である。文様帯のあり方は前段階と同様である。

口縁部文様帯は上段に縦線文に代わって横位縄文が施されるが、爪形文(10・37)、無文(18)もある。又、口唇部に刻目を入れるものも多い(11・12・18~20・31)上下段の区画は平行沈線、単沈線で行われ、後者には刻目が施される場合が多い。(11・12・18・21・28・32)がこれは三角印刻文の変化と考えられる。下段の文様帯は基本的に無文となる。橋状把手や陸付突起がしばしば見られる(10・11・16・20・25・26・27・28・35・37)。一方施文されるものも少数あり(22・35)、胴部と同様の文様が展開されるようである。35は地文に組線文を用いている。腹部との境には隠帯が横走するものが多く見られ(10・12・20・22・25・27・28・31・33・35)、突起を4単位貼付する(18・19・21・22)。胴部文様帯は「Y」字状文及びその変化と考えられる弧線文(10・14・18・22・33)の他、横帯区画内に玉抱き三叉文(27・28)、鏡形・菱形・「B」字文等の構図を描くもの(12・35・

37)も存在する。無文となるものも多い(20・24・31・32)。地文の縄文は隙間なく施されるようになる。高33は4単位の懸垂隆帯を有しており、新しい要素として捉えられる。

以上の他、全く施文されない一群も少数存在する(29・30・34)。

沈線文系土器(13~17・19・36)

良好な資料がなく、図示したものの多くは縄文系・沈線文系の両要素をもつ土器である。

①器形 基本的には前段階と同様で、「く」の字形に屈折する口頸部及びストリートな胴部形態を呈する(14)。13は屈折部を省略した形態と言えるが、他はキャリバー形を呈し縄文系の器形と言えよう。

②文様 文様帯のあり方は第1段階と比べ大きな変化はない。口縁部文様帯は格子目文・斜線文・瓦状押引文ないし結節平行沈線文(14)が見られる。口唇部の爪形文もある(23・36)。頸部は縦位ないし斜位の平行沈線が施される(14・15・16・23・36)。頸~胴部の区画は隆帯で行っている(14・16・36)。胴部文様帯は下段の縦位施文が拡大され(13・36)、36では懸垂隆帯が付される。一方上位1段のみ施文され下段が省略されるものも多い(16・19・21)。区画内は格子目文(13)・縦位平行沈線文(16・19・21・36)が充塞される。

本段階内での新旧は、10の三角印刻文、13の胴部文様帯区画が3段である事等、向畑遺跡土壇10出土資料に古い様相が窺え、逆に林山腰遺跡出土資料、特に土壇21の一括資料中、33・36に胴部縦位懸垂隆帯が存在、新しい様相を示すものと捉えられよう。

(3)第3段階(第91図38~48、第92図49~54)

向畑遺跡II次土器一括廃棄資料が挙げられる。沈線文系土器及び浅鉢は続く第4段階との兼分が出来ない。従って本段階で述べることとする。

縄文系土器(38~43・49~53)

①器形 深鉢はキャリバー形と円筒形が認められるが、両者に胴部の膨らむものが存在する(39・41~43)。浅鉢は直線的に強く開くもので、内面の唇厚部に施文される。

②文様 口縁部の単沈線による弧線文が特徴である。口縁部文様帯は上段の幅が狭くなり、横位縄文は下段へも施文される。42は縦位に懸垂文を施している。下段の弧線文は2段階の胴部弧線文の転移と考えられ単沈線3条を一束とし、上向きに施文される。弧線の谷には玉抱き三叉文が例外なく施される。上下段を区画する横位沈線は、刺突を施すものが減り、弧線文との間に交互に行う連続「コ」の字文となる(40・41・43)。38は下向きの弧線文が描かれるもので、前段階27・28からの変化が考えられよう。円筒形土器は口縁部文様帯が省略傾向にある(39・41)。胴部の文様帯は隆帯ないし沈線の4単位の懸垂文が一様化する(38~40)。懸垂隆帯の上端には、「Y」字状文の変化したと考えられる「V」半状の貼付(40)ないし「Y」字状に施されるものが存在する。区画内は頸部の横走隆帯に沿って2~3条の沈線文が施される程度のもので、41の様に弧線文が施文されるものがある。

この他、無文の土器群（49～51）が前段階同様存在する。浅鉢は口縁部内面肥厚部分に3条前後の幅広い結節沈線文が施文され、連続「コ」の字文や三又文が時に付加される。波状口縁も存在する。

沈線文系土器（44～48）

資料が少なく、第4段階との細分もできない。前田木下遺跡2住出土資料を呈示する。

①器形 深鉢は前段階の形態を基本的に継承するが、口縁部の内折は幅が狭くなり、頸部も同様に短くなる。胴部はストレートなものと、上位の張るもの（45・48）が存在する。尚47は口頸部が省略され、本段階以後多く見られるものである。

②文様 文様帯のあり方は口縁部・頸部・胴部の3段に分別される。口縁部は上下に爪形文を施す太い隆帯を有し、狭い区画内に連続「コ」の字文を行う。施文されないもの（48）や、内折部分省略される形態も存在する。又、隆帯による4単位の突起が付されるのも特徴的である。

頸部は縦位の平行沈線文、格子目文（48）が施文される。44は逆「V」字形の区画内に格子目文を行っている。胴部文様帯は縄文系同様、4単位の懸垂文が顕著となる（46～48）。これらは隆帯で行うもの（47・48）と数条の平行沈線によるものがあり、後者には連続「コ」の字文が伴う（46）。47は隆帯上部が「Y」字状になり、地文、突起とともに縄文系との関連を思わせる。区画内には横位の文様帯が描かれるが、これは前段階の13・16等が懸垂文により分断された形となる。1～2段の区画を行うものと多段に行うものがあるが、上段には斜線文（47）や格子目文（45）、横位平行沈線文（45）が多い様である。45・48の様に逆「U」字形ないし「コ」の字形の区画を行うものも顕著である。又横位平行沈線文には連続「コ」の字文が付加されるものも多く存在している。

第3段階の資料は、縄文系・沈線文系の二者がまぎれあって出土した例がない。兩堀遺跡IIは前者が主体で、後者は少量伴っている。前田木下遺跡ではその逆である。

(4)第4段階（第91図44～48・第92図49～65）

兩堀遺跡I次B1位、同II次一括土器廃棄資料を呈示し得る。

縄文系土器（55～65）

①器形 深鉢・浅鉢がある。深鉢はキャリバー形の口縁部が狭くなり、円筒形は口縁部が外反する。56・57は特に顕著である。前者に波状口縁が見られる（56・57・64）。浅鉢は前段階同様で、54は外傾する口唇に角押文が施文されている。

②文様 キャリバー形土器は口縁部の弧線文が隆帯により描出されるが、良好な資料を呈示し得ない。一方新しい手法として、口縁部に「T」字状文や角押文を用いるものが存在する（58・60・64・65）。これらの頸部には狭い楕円区画文が見られ（55・58・60・64）、懸垂隆帯がクランク状になるものが現れる（58）。円筒形も同様で、38の弧線文の変化と考えられる63は隆帯化・重三角区画文化している。59・62は楕円区画文・「Y」字状の懸垂隆帯が見られる。口縁部文様帯は縄文が顕著（56・59・63）だが、62は角押文による斜位沈線、57は部分的に押引を施す単沈線により玉抱き三又文を描く。これらの土器には金雲母を多く含むものが見られる点も特徴的であろう。

沈線文系土器 前段階で呈示した。雨堀Ⅰ次BⅠ住では口縁部の内折が省略されたものが破片で出土している。

本段階も、沈線文系、縄文系の良好な伴出資料を欠く。しかし縄文系が主体的ではあるが、確実に沈線文系も伴っている。資料の一括性としては雨堀Ⅰ次BⅠ住が良好だが弧線文ないし重三角区画文の系列が欠陥している。

以上各段階を概観してきたが、最後にまとめとして松本平の地域性について問題点を列記する。

- ①第1段階 資料不足ではあるが、塩尻市竜神平、女夫山ノ神遺跡資料も含め検討すると、沈線文系の頸部縦帯平行沈線文が間隔をおき、縄文地文となるものが顕著である点(1・4・7)。
- ②第2段階 a 沈線文系が少なく、多くが縄文系との折衷で存在すること。b 「B」字文等が縄文系に顕著である事。
- ③第3・4段階 第2段階に増して沈線文系が極めて少ない。但し前田木下遺跡は例外的だが、一部の調査のため余容は不明である。
- ④各段階を通じ、在地の系統の中に播系文や反撫、付加条等の原体を地文にもつものが他地域より多い事。

以上の諸点のうち、①・②b・④については、当地域が地理的に北陸に近く、北陸地方の朝日下層式・新保式の影響が強いう点で理解されるのではないだろうか。ちなみに①・②bについては、朝日下層式や新保式に多く見られるようである。

②a・③については、八ヶ岳山麓の大石遺跡等とは全く逆であるが、同じ八ヶ岳山麓および諏訪湖盆地の頭殿沢遺跡や船倉社遺跡は大石遺跡型顕著ではない。遺跡毎の差異が激しいが、続く平出3類Aの分布域の北限が松本平である点を考えれば沈線文系の減少も理解されるのではないだろうか。今少し各遺跡での実態を見る必要があろう。これらの点を除けば、松本平での中塚初頭土器の変遷過程は、諏訪湖盆地や八ヶ岳山麓と基本的には同じ流れをたどると考えようである。

まとめとしては簡略に過ぎるが、紙幅の都合もありしめくくりとしたい。(竹原 学)

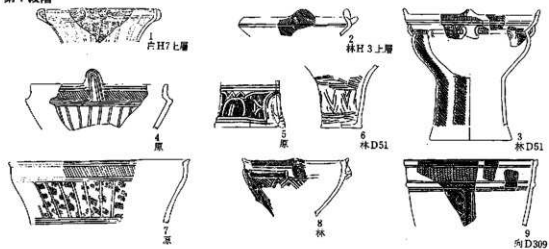
参考文献

- 今村白鶴地誌 1972 『穴の塚遺跡』 加賀野典人考古学研究会
高橋直喜 1992 『縄文時代中期におけるゆふすき』 『ゆふすき内閣府特別展第一巻2次』 松本市教育委員会
三上直幸 1988 『新久保式土器 再考』 『長野県歴史文化センター紀要 1』 長野県歴史文化センター
西 久和 1985 『北陸の縄文時代中期の遺存—鹿久保遺跡—』 松本大学
山口 明 1990 『縄文時代中期の土器類における型式の文意』 『縄文土器の文化とその発展』 群馬県立総合学芸センター
山手内典 1958 『五箇ヶ岳系土器型式』 『縄文土器大観 第3巻 中後編』 小学館
諏訪湖盆地文化財調査 1956 『穴の塚遺跡』
長野県教育委員会 1976 『八ヶ岳山麓』 『長野県中央遺跡展示 昭和53年度』
同 1980 『信濃川遺跡』 『同』 昭和53年度
同 1981 『船倉社遺跡』 『同』 昭和53年度
同 1984 『高野平遺跡』 『中央近畿府県縄文調査報告 2』
松本歴史文化財地誌部 1978 『女夫山ノ神遺跡発掘調査報告』 『A』 27 巻

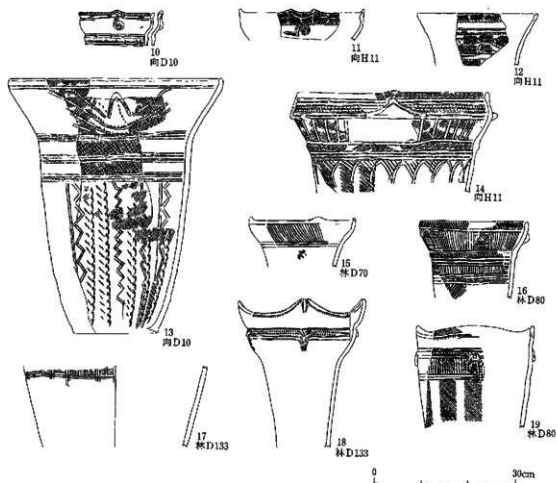
資料出典

ゆふすき文化財調査報告No.28 (発掘調査) 頁: 1981・21 (新田遺跡) 頁: 1982・27 (反撫遺跡) 1983・34 (古橋遺跡) 1985・61 (神山遺跡) 1988・62 (前田木下遺跡) 1988

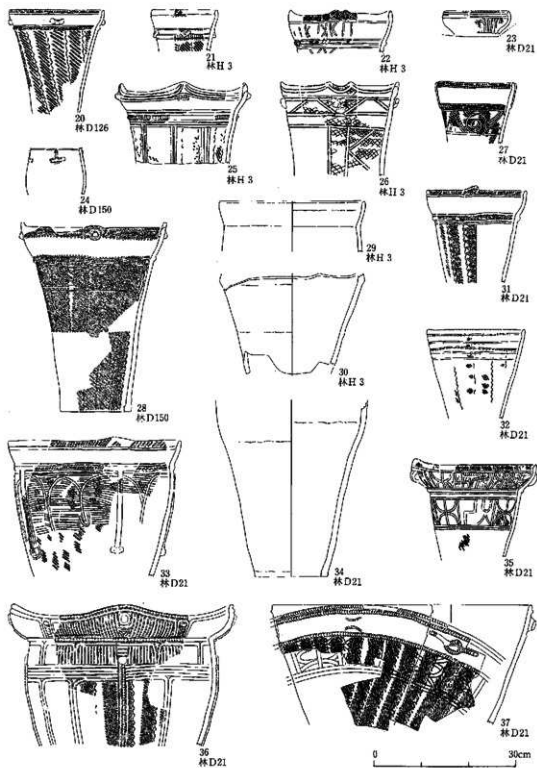
第1段階



第2段階

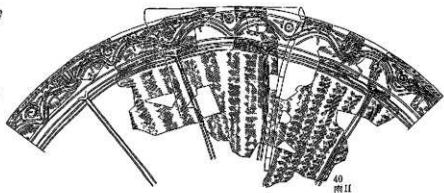


第89圖 縄文時代中期初頭土器集成(1)

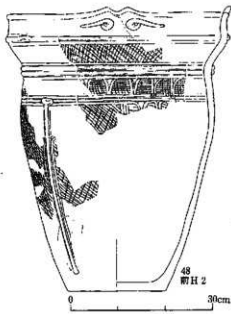
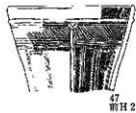
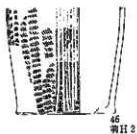


第90図 縄文時代中期初頭土器集成(2)

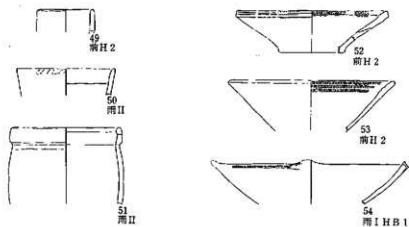
第3段階



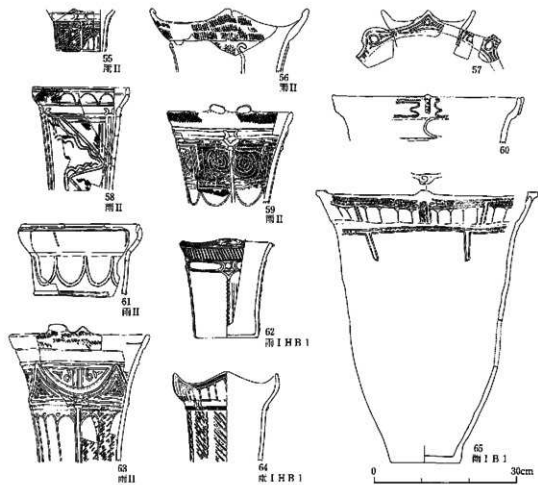
第3・4段階



第91圖 縄文時代中期中初頭土器集成(3)



第4段階

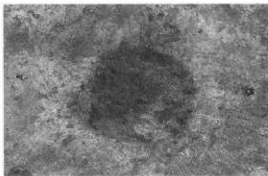


第92圖 縄文時代中期初頭土器集成(4)

図 版



第1号住居址 地床炉をもつ



同地床炉 (100×60cm)



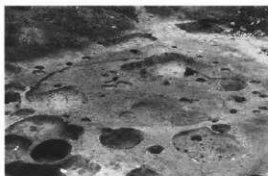
第2.5号住居址 手前が2号住居址



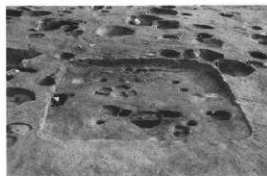
第3号住居址 地床炉をもつ



第4号住居址 床面に凹凸がある



第11号住居址 縄文時代中期



第13号住居址 貼り床を施している



第15号住居址

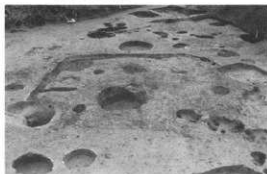
第1図版



第16号住居址



第17号住居址



第18号住居址 間仕切りの溝がある



第19号住居址 不整形を呈している



第20号住居址



第21号住居址



第22・29号住居址



第29号住居址 遺物出土状況

第2図版



第23号住居址 調査区域外へのびる



第24号住居址 4本の支柱穴がある



第24号住居址 緑石埋喪炬



同 埋設状態 壺と高環の坏部



第26号住居址 4本の支柱穴がある



第27号住居址 周溝が巡る

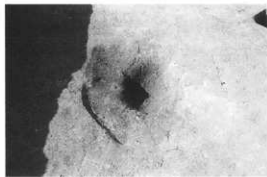


第28号住居址 周溝が見える



第30号住居址 ベッド状の高まりがある

第3図版



第30号住居址 地床炉



第42号住居址 放射状に広がる炭化材



第40・42号住居址 古墳周溝に切られる



第44号住居址 炭化材が見られた



第45号住居址 2段階りの貯蔵穴がある



同 埋裏炉 周囲が窪んでいる



向畑7号古墳 墳丘は削平により消失



同 周溝 40・42号住を切る

第4図版



豎穴狀遺構 2



豎穴狀遺構 3



豎穴狀遺構 4



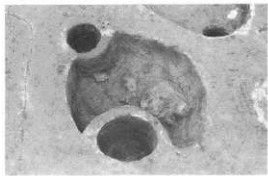
方形周溝墓 1



土壇335 繩文時代



土壇794・795 繩文時代



土壇727 繩文時代



土壇305 繩文時代

第 5 圖版



土壇642 中世以降の墓



土壇179 中世以降の墓



土壇301 中世以降の墓



土壇734 中世以降の墓



土壇278 中世以降の墓



土壇782 中世以降の墓



土壇634 中世以降の墓



土壇635 中世以降の墓

第6図版



土壇177 中世以降の墓



土壇680 中世以降の墓



土壇672 中世以降の墓



土壇738 中世以降の墓



13区 墓道(土壇間の空地)



10区 土壇群



10区 土壇群



10区 土壇群

第7図版



3



4



8



14



5



6



13

第 8 图版



2



7



3



4



11



13



14



15



25



30



31



7



38



55



78



75



32



48

第11图版



76



83



118



90



88



132



89



91



113



103



119

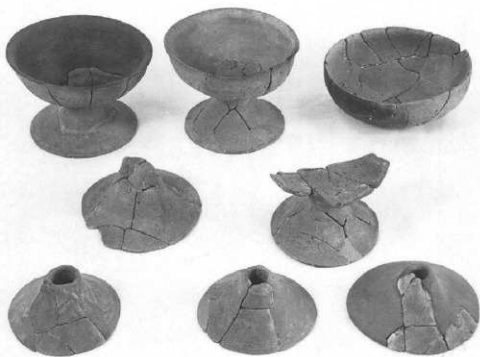


87

第13图版



7号古墳



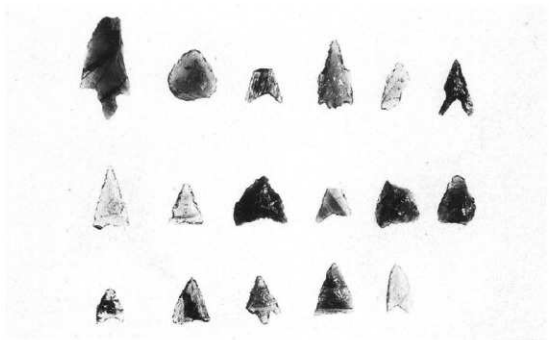
7号古墳周溝供献土器

第14図版



7号古墳周溝供献土器

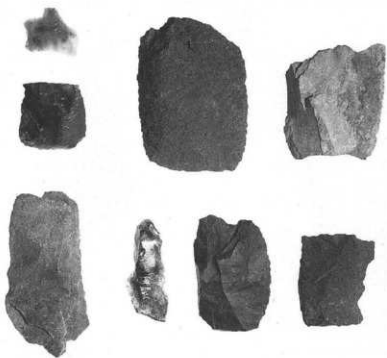
第15図版



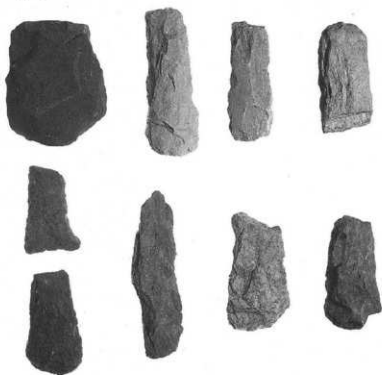
石鏃(1-17)



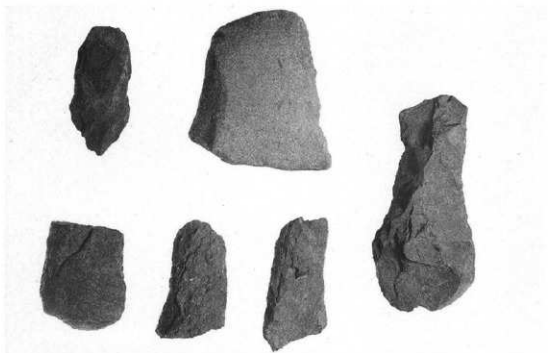
上段 石鏃(18-21)・右側 石匙(22-23)
 中・下段 ビエス・エスキーユ(24-30)



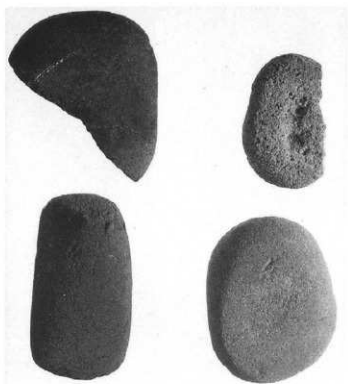
スクレイパー(31-38)



打製石片(39-47)

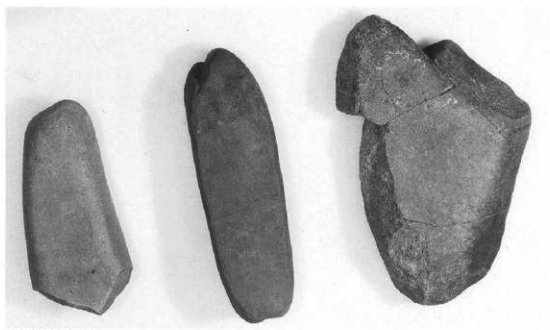


打製石片(48-53)

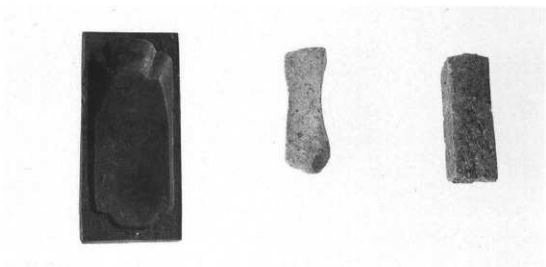


敲・磨 凹石 (上左: 57, 上右: 62, 下左: 59)
(珠磨石): 61, 下右: 60)

第18図版



置き砥石(67-66-65)



視(69)・砥石(64-68)



左端：鐵器
 上段：釘及釘狀鐵器
 中段：鐵葉，鐵葉？，不明
 下段：棍狀鐵製品
 最下段：錢貨

第20圖版

松本市文化財調査報告No.01

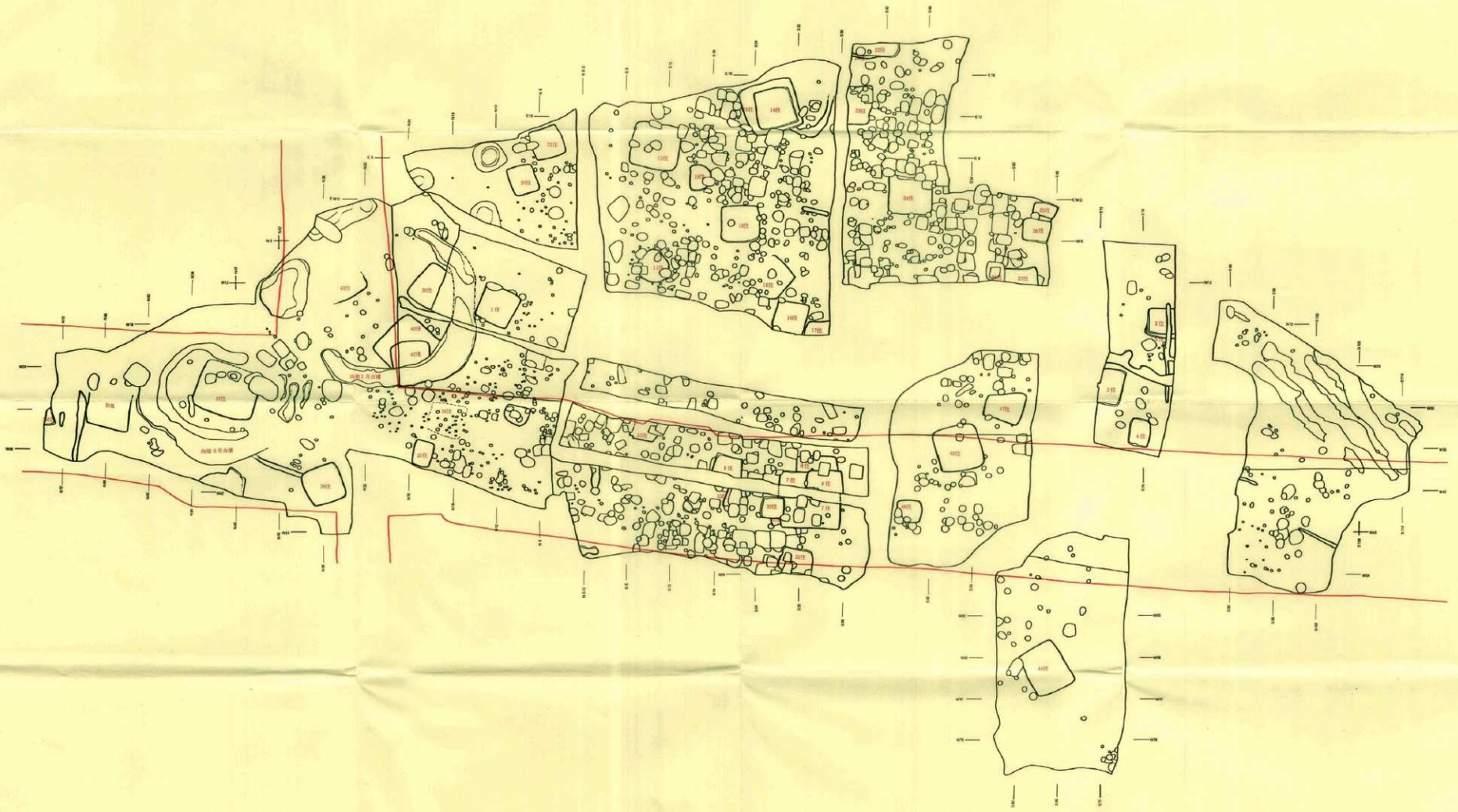
松本市向知遺跡Ⅱ

平成元年3月20日 印刷

平成元年3月30日 発行

発行 松本市教育委員会

印刷 精美堂印刷株式会社



付図 向烟遺跡全体図 (1/300)

